



Volunteer Center

明治学院大学

ボランティアセンター報告書

第22号

VOLUNTEER CENTER YEAR-END REPORT

2025

明治学院大学ボランティアセンター

MEIJIGAKUIN UNIVERSITY VOLUNTEER CENTER

学長挨拶	今尾 真	1
ボランティアセンター長挨拶	猪瀬 浩平	3
I.特集		
1. レインボーフェス		6
2. 能登半島災害復興支援		8
3. 日韓大学生反貧困交流プログラム		10
4. 情報保障の取り組み		12
II. 2025 年度活動報告		
1. 2025 年度ボランティアセンター行事一覧		16
2. 2025 年度来室者数		17
<全学プログラム>		
3. 明治学院大学ボランティア大賞		18
総括		18
受賞学生報告		
大賞「「Do for Others」の主体としてのボランティア ―ボランティアだからできること、私だからできたこと―		
心理学部心理学科3年/内田 夏路		20
審査員特別賞「多文化共生社会を目指して～国際寮での活動と実践～」		
経済学部経済学科3年/小澤 ころ		22
奨励賞「善い活動とは何か」		
文学部英文学科4年/渡邊 香帆		24
奨励賞「教育現場の人手不足が子どもに及ぼす影響―特別支援学級での学習支援を通して―」		
社会学部社会福祉学科3年/横田 歩実		26
奨励賞「積み重ねた行動と学びを形に一人と人とをつなぐ私の実践―」		
心理学部教育発達学科3年/清水 亜桜		28
奨励賞「体験の価値を子どもたちへ―経営と教育発達の視点から―」		
心理学部教育発達学科2年/齊藤 陽菜莉		30
4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム		32
総括		32
修了生報告		
「1つの小さな特技であっても人のために使うことができる」		
文学部芸術学科4年/石井 優衣		36

「私にとってボランティアとは？ 一問いを抱き続けている4年間」	国際学部国際学科4年/室田 素良.....	39
「あなたと共に歩むボランティア 様々なボランティア活動の経験を通して」	国際学部国際学科3年/芝 愛澄.....	41
「青年期の発達課題を問題視しない視点 一カウンセラーとしての姿勢や態度を取り入れて」	心理学部心理学科3年/西 明日香.....	44

< ボランティアセンター主催プログラム >

5. ボランティアファンド学生チャレンジ		47
総括/助成団体一覧		
人をつなぐコーヒープロジェクト		49
Do for children～子どもの未来を開くスポーツ体験～		52
近隣のリースクールと連携して学校によらない体験学習の機会を作る		54
Reading Promotion 企画		56
6. いつでもボランティアチャレンジ		59
総括/助成企画一覧		
「のどこれ！」～見てほしい、伝えたい復興の姿～		62
にじいろシネマ		64
着なくなった服で1日POP-UP イベント		66
平和をつなぐまちあるきプロジェクト		68
明学×能登つなぐプロジェクト		71
中国と日本をつなぐ音の輪プロジェクト		73
車椅子ユーザーなどが安心して渡韓できるバリアフリーマップを作ろう！		75
MEETS-映画『オレンジ・ランプ』上映会-		77
四万十町 雁皮紙再生プロジェクト②		79
アートドキュメンタリー『Listen』上映会		81
「ろう者と一緒に異文化に触れてみよう」～「声」に頼らず「みる」コミュニケーションの体験と対話～		83
若者支援カフェを作ろう！		85
カンボジアへの寄付①		87
いけばな教室-日本の伝統文化を知ろう！-		89
ようこそ、ステキなラップの沼へ		91
カンボジアへの寄付②		93
能登とつながるパンフレット		95
7. 1 Day for Others		97
総括		97
これまでの参加者数		98

プログラム一覧.....	99
8. ボランティア・カフェ.....	102
総括.....	102
各回報告.....	103
9. 災害ボランティア助成金.....	112
総括.....	112
実績.....	112
10. ボランティアフェア.....	113
総括.....	113
開催概要.....	114
11. 国際機関実務体験プログラム.....	115
総括.....	115
派遣学生活動報告.....	116
12. キャンパス別プロジェクト.....	121
白金キャンパス：TAKANAWA HOP WAY（高輪ホップコミュニティ活動）.....	121
横浜キャンパス：畑やろうじゃないか.....	122
III. 新入生アンケート	
新入生のボランティア意識とセンターの課題－「2025年度新入生ボランティア活動アンケート」.....	126
IV. ボランティアセンター資料	
1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま.....	134
2. 2025年度マスコミ報道一覧.....	134
3. 2025年度委員等一覧.....	135
4. ボランティアセンター 2025年度基本方針.....	136
5. 明治学院大学ボランティアセンター規程.....	139

明治学院大学 2025 年度ボランティアセンター報告書の刊行に寄せて

学長 今尾 真

このたび、「明治学院大学 2025 年度ボランティアセンター報告書」が刊行される運びとなり、本学のボランティア活動に取り組まれた学生はもとより、ボランティアセンター長・センター長補佐の先生方および同センター職員ならびに学生にご指導やアドバイスをいただきましたコーディネーター・スタッフの皆さまに、心よりお礼と感謝を申し上げます。

明治学院大学ボランティアセンターは、1995 年に発生した阪神・淡路大震災の支援活動に携わった学生・教職員の声をきっかけに、1998 年学校法人明治学院のボランティアセンターとして開設され、1999 年に大学に移管後、2023 年度に設立 25 周年を迎えました。この間、2015 年度から大学が推進してきた「MG DECADE VISION」の 3 つの重点政策（ボランティア活動、グローバル教育、キャリアサポート）の 1 つの大きな柱として、ボランティアセンターを中心に、さまざまなボランティア活動の実践（例えば、学生によるタイ、クルドの子供たちの保護活動やフィリピンの貧困問題への支援等）、日本赤十字社との連携や東日本大震災に際しての岩手県大槌町との協働、2024 年元旦に生じた能登半島地震に対する募金・支援活動など、国内外においてボランティア活動を展開してまいりました。ボランティア活動は、本学創設者のヘボン博士が生涯実践した、“Do for Others(他者への貢献)”の教育理念を体現するものです。年を追うごとに多様な活動が展開され、多くの学生および教職員がこれに関わり、大きな成果をあげていることをとても誇りに思っております。

さて、2025 年度の報告書の中では、次の 3 つの活動が特筆に値すると思いました。

1 つは、先にも述べたように、2024 年元旦に起こった能登半島地震に対する支援活動です。これまで夏季と冬季の 5 回、復興支援ボランティアがコーディネーター・スタッフの引率により実施されただけでなく、その後に参加学生が報告会を開催し、現地での活動の様子やそこで感じた課題や問題などを共有し互いに考えを深めたということは、大きな意義があることと思います。また、昨年度は、この活動を契機に、既存団体（戸塚まつり実行委員会、横浜の地域活動）・新たに立ち上がった団体による新規の支援活動も行われたとのことで、支援の輪が着実に広がっていると感じました。

次に、昨年に引き続き「レインボーフェス」が開催され、SOGIE（性的指向・性別アイデンティティ／表現）や LGBTQ への理解を参加者が深め、多様な人びとが共にあることを支えるための取り組みが継続されたことは、本学ボランティアセンターがマイノリティ問題を含めた社会課題に果敢に取り組むという姿勢をより鮮明にしたという点で注目に値します。

最後に、「ボランティアファンド学生チャレンジ（通称「ボラチャレ」）」の活動から生じた、「学内生理用品無償配布」プロジェクトが大学の支援を受けて全学展開されるに至ったことです。こうした活動は、本学の教育理念、“Do for Others（他者への貢献）”のまさに具体化であり、しかも学生達の主体的活動から起こったことは大変嬉しく、心強く感じました。*

上記以外にも 2025 年度は多数・多様なボランティア活動・実践がありましたが、紙幅との関係もあり、私の独断により 3 つの取組みを中心に紹介させていただきました。ボランティア活動は、本学の伝統であるとともに、未来に向けた大きな可能性のある取組みであると思っております。大学として、また学長として、この活動をこれまで以上に拡充すべく、支援していく所存です。多くの在学生・関係者の積極的な参加により、本学のボランティア活動がさらなる拡大展開および発展することを期待し、明治学院大学 2025 年度ボランティアセンター報告書刊行にあたっての学長挨拶とさせていただきます。

以上

※学内生理用品無償配布プロジェクトは、2021、2022 年度ボランティアファンド学生チャレンジで採択されました。
活動にかかわった学生の記事は「明学の理由」でも紹介されています。



2025 年度ボランティアセンター報告書の刊行にあたり

ボランティアセンター長 猪瀬 浩平

明治学院大学ボランティアセンター（以下、明学ボラセンと略する）は、ボランティアを人びとが、大きな声やわかりやすい言葉だけでなく、小さい声やわかりにくい言葉を丁寧に受け止め、強い力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである、と考えます。今、大きな声、強い声の存在感が増し、世界を大きく変えています。そんな時代に明学ボラセンは何ができたのかを記録に残し、学内外の人びとや、後世の人びとに検証していただくため、今年も報告書を刊行します。

2025 年度の大きな動きとしては、ボランティアファンド学生チャレンジ(通称「ボラチャレ」)で試行実験と検証を行ったプロジェクトがきっかけとなり、学内に生理用品の無償配布が実現したことが挙げられます。生理の貧困の問題が大きな問題となる以前から、文字通り女性たちの小さく、弱い声を聴き、より大きな力となるようにつなげ、大学を動かした学生たちの動きには、明学ボラセンの魂と言えるものが現れています。*

2024 年度に始まった能登半島地震の支援活動は、これまで5 回行った引率型の活動をきっかけにして多様な展開を見せています。この活動をベースに生まれたボランティア活動がいくつか存在しています。新しい団体をつくることもあれば、既存の団体・活動(戸塚まつり実行委員会、横浜の地域活動)とつながることで、新しい動きを生み出しました。この引率型の活動を力強く展開していくときには、明学ボラセンが活動を始める前に現地でボランティアを行う学生の姿がありました。

今年も6月のプライド月間に合わせて「レインボーフェス」を開催しました。学生が実行委員として企画段階から参加するとともに、昨年同様、宗教部や図書館など学内の他部署と連携した活動も活発に展開されました。LGBTQ や SOGIE (性的指向・性別アイデンティティ/表現) への理解を深め、多様な人びとが共にあることを支えるための取り組みをしていることは、学生や教職員一人ひとりが勇気をもって社会を、世界を変えていくための力を生み出すものだと考えます。

明学ボラセンの潜在能力を引き出してくれた、学生たちに感謝します。

成果ばかりではなく、課題も多くあります。認知を一層高めることについてまだまだ至らぬ点があり、また学生たちの力を一層引き出すための場づくりがどれだけできたのか、そしてスタッフが過剰な負担なく働ける場になっているのかも、真剣に考えるべき点があります。

お読みいただき、忌憚のないご意見をいただければありがたく、どうぞよろしくお願いいたします。

※学内生理用品無償配布プロジェクトは、2021、2022 年度ボランティアファンド学生チャレンジで採択されました。
活動にかかわった学生の記事は「明学の理由」でも紹介されています。



I. 特 集

I. 特集

1. レインボーフェス

2025年6月16日(月)～28日(土)、2回目となる「明治学院大学レインボーフェス」を開催した。

6月は「プライド月間」と呼ばれ、性別／性的指向のマイノリティであるLGBTQの人たちが差別や偏見にさらされることなく公正に扱われる社会の実現を求めるイベントが世界各地でおこなわれる。それに合わせ、ボランティアセンターでも昨年度からこの時期にレインボーフェスを開催している。

この企画は、ボランティアセンターの基本方針に掲げられている「ボランティアとは、人びとが、大きな声やわかりやすい言葉だけでなく、小さい声やわかりにくい言葉を丁寧に受け止め、強い力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらき」の具現化であり、ボランティアセンターがマイノリティ性を持つ学生にも開かれていることを示すものである。

昨年度と大きく変わった点として、協力学生の募集やLGBTQ+Ally サークル Colorful との共催企画の実施といった学生との協働など、連携の拡大が挙げられる。協力学生8名は、横浜校舎の図書館のレインボーブックフェアで展示する本の選出と紹介文の作成、LGBTQ資料展(ボランティアセンター@白金・横浜校舎)でのコーナー制作を担当した。資料展では、概説コーナーのほか、同性婚やLGBTQ運動史に関するコーナー、LGBTQのろう者に関するコーナー、社会制度の課題を取り上げるコーナーなど、それぞれの関心に基づく個性的な展示を作った。また、レインボーフェス担当の砂川が引率し、コミュニティセンター(プライドハウス東京/akta)を訪問し、プライドパレードに参加するなど、LGBTQ市民運動の現場を体験することも重視した。

フェスを締めくくるメイン企画として、Colorfulとボランティアセンターとの共催による「にじいろシネマ」を開催した(後援:社会学部附属研究所)。学長からの挨拶文が読み上げられたあと、古くからハワイ社会に存在してきたマフー(男性／女性の二元論を超えた性別を生きる人)であるフラ教師のドキュメンタリーの上映、LGBT法連合会参事の西山朗さん(明治学院大学卒業

生)のトークをおこなった。この企画には内外から参加者があり、「セクシュアルマイノリティ当事者」から「自分の学生時代にもこういったイベントがあったら、エンパワメントされたらと思う」と。しかし、いざ学生時代にそういったイベントがあったとして、行ったかという分からない。クローゼットな当事者は行けないかもしれない、けれど開催されているという事実には救われる」という感想もあった。

ほか、今年度初めて、総合支援室との共催企画が実現し、白金校舎の図書館でのブックフェアで6名の教員に図書推薦の協力をいただくなど、他部署、教員との連携も広がった。また、多くの授業でチラシを配布する機会をいただき、印刷したチラシ1500枚を配布した。レインボーフェスは、学内で広く知られること自体に意味があることから、チラシが直接多くの学生の手へ渡ったことは大きな意味があったと思う。



実施内容

【イベント】

●ボランティア・カフェ「今さら聞きづらいLGBTQの基礎知識」

日時：6月16日（月）12:40～13:20
場所：コラボレーションスペース（横浜）
参加者数：7名

●LGBTQ+Ally サークル Colorful 茶話会「つながるカフェ」（2回）

主催：LGBTQ+Ally サークル Colorful
日時：6月21日（土）／28日（土）13:00～14:30
場所：コラボレーションスペース（横浜）／1251 教室（白金）
参加者数：4名／6名

●ワークショップ「レインボー缶バッジをつくろう！」

共催：総合支援室
ファシリテーター：松永 美佐寿（総合支援室）
日時：6月25日（水）13:00～14:30
場所：1251 教室（白金）
参加者数：7名



にじいろシネマ（トーク）

●にじいろシネマ「アロハの心をうたい継ぐ者」

トークゲスト：西山 朗（一般社団法人 LGBT 法連合会 参事／明治学院大学卒業生）

共催：LGBTQ+Ally サークル Colorful
後援：社会学部附属研究所
字幕協力：関西クィア映画祭
日時：6月27日（金）17:00～19:20
場所：1101 教室（白金）
参加者数：31名

【展示】

●レインボーブックフェア

協力：明治学院大学図書館
日時：6月16日（月）～28日（土）
開催場所：明治学院大学図書館（横浜／白金）

●LGBTQ 資料展（横浜／白金）

日時：6月16日（月）～28日（土）
開催場所：ボランティアセンター（横浜／白金）



LGBTQ 資料展

（ボランティアコーディネーター 砂川 秀樹）

2. 能登半島災害復興支援

令和6年能登半島地震から2年が経過し、メディアや社会の関心が薄れる中、「小さい声、弱い声に耳を傾ける」というボランティアセンターの理念の具現化に向け、学生・教職員の現地への交通費等を助成する災害ボランティア助成金の交付、センター主催による復興支援活動ボランティア派遣を行った。これらの活動を経て、学生が自発的に立ち上げた団体が複数みられ戸塚や白金における地域活動としても展開している。また、ボランティア・カフェや講演会等を通じて、「支援とは何か」についてともに考え、思考を深める機会をもった。このような学生の自主活動の拡大と継続および地域への展開、また支援の在り方を問い直す場づくり等は本学の活動の特徴ともいえる。

発災時から計5回目となる今年度のセンター主催の復興支援活動ボランティア派遣は、8月と2月にいずれも公益財団法人共生地域創造財団の協力のもと活動を行った。共生地域創造財団は東日本大震災を契機に発足された公益財団法人であるが、母体にホームレス支援全国ネットワークがあり、一人ひとりの生活に密接に関わる「伴走型支援」の理念のもと、被災地にて活動を行っている。



解体が進み更地が目立つ、輪島の朝市エリア(2026年2月)



土管に詰まった土砂の除去作業(2025年8月)

夏季活動では、住民有志による夏祭りイベントの準備や支援物資の配布活動、前年の豪雨の影響が残る農地の側溝の泥掻きの他、地域住民とのサロン活動や寺境内の池の泥出しなどを行った。物資配布の会場である重蔵神社は、被災により失われた地元の数少ない交流の場としての機能を果たしている。支援される側で居続けることへの疲弊や抵抗感から、住民の声に基づき物資配布が有料化されるなど、生活や心身の状況も徐々に変化しつつある。仮設住宅が完成し公費解体が進む中で起きた前年夏の豪雨のほうか、震災より精神的ダメージが大きいとの声が多く聴かれた。そうした中で学生の一人は、「達成感とやりきれなさ感謝」と振り返り、1回の活動だけでは完結し得ない思いを抱えながら、この経験を大学に戻ってどう活かし、どうつなげていくかという問いと向き合う機会となった。夏季活動について映像をまとめ、明治学院大学HPの「ボランティア」ページに掲載している。



冬季活動では、高齢者の方が地震情報を迅速に得るためのスマホ講座の開催や、仮設住宅における個別訪問によるアンケート調査、地域再生を目指すNPOのお米の袋詰め作業や公費支援の届かない墓地の整備などを行った。時間の経過に伴い被災者の抱える課題についても、個別化と複雑化が進んでおり、きめ細やかな支援が一層求められている。今回はその役割を担うボランティアとニーズをマッチングしている民間のネットワーク組織である輪島支援協働センターからの活動にも参加した。公費解体が終了するも材料や工賃の高騰により住宅再建の判断に迷う住民も多く、予定より急速に前倒しされた過疎化と高齢化のなかで、先の見えない不安の声が聴かれた。学生は「思っ



七浦公民館で学生によるアイスブレイク(2026年2月)

ていたよりも整備されていない道などがある」と関東と現地との情報格差に驚くとともに、実際に現地に出向き人と会う事の大切さを実感していた。支援団体スタッフと活動をともにしながら、学生は中間支援的な役割の重要性や「できなくても納得してもらうことの大切さ」に気づき、支援の仕組みのあり方にも思索を展開させていた。一方、仮設店舗なども徐々に増えており、生業支援や観光支援への期待の声もあり、復興に向けたフェーズの変化の中で当センターとしても関わり方を模索する訪問となった。

●夏季派遣

活動期間：2025年8月27日(水)～8月31日(日)

活動地域：輪島市、能登町

受入団体：公益財団法人 共生地域創造財団

参加学生：(7名) 1年生3名(法、国際、心理)、2年生1名(法)、3年生2名(社会、法)、4年生1名(文)

●冬季派遣

活動期間：2026年2月11日(水)～2月15日(日)

活動地域：輪島市、能登町

受入団体：公益財団法人 共生地域創造財団

参加学生：(6名)：1年生1名(経済)、2年生4名(心理)、3年生1名(法)

●2025年度の関連イベント&プロジェクト

- ・横浜女学院にて出張報告会(2025/7/14)
- ・学内活動報告会(2025/12/3)
- ・ボランティア・カフェ：永井玲衣さんと「能登」を考える哲学対話(2025/7/2) (P107 参照)
- ・ボランティア・カフェ：明学生が奥田知志さん、永井玲衣さんと考える能登の復興(2025/12/9) (P111 参照)
- ・いつでもボランティアチャレンジ：「のとこれ！」～見てほしい、伝えたい復興の姿 (P62 参照)
- ・いつでもボランティアチャレンジ：明学×能登つなぐプロジェクト (P71 参照)
- ・いつでもボランティアチャレンジ：能登とつながるパンフレット (P95 参照)



「明学生が奥田さん永井さんと考える能登の復興」(2025年12月)



戸塚地域のイベントで能登支援活動を報告する学生団体(2025年5月)

(ボランティアコーディネーター 森田 恵)

3. 日韓大学生反貧困交流プログラム

韓国・慶熙大学校フマニタスカレッジ（ソウル市）の教員からの呼びかけで、SDGsの目標1である「貧困をなくそう」を大きなテーマとして、明治学院大学の教員（猪瀬センター長）、立教大学の教員、それに一般社団法人反貧困ネットワークのスタッフがコーディネーターとなって、「日韓大学生反貧困交流プログラム」を実施した。今年度初めての取り組みである。

全体コーディネーターは慶熙大学校（Kyung Hee University、以下「慶熙大学」）の姜乃榮先生。明治学院大学、立教大学、反貧困ネットワークのコーディネーターは、「反貧困」を大きなテーマとして共通にもちながら、「孤立とメンタルヘルス」「教育・非正規雇用・労働」「居住・生活基盤・社会的マイノリティ」という個別のテーマの担当となり、現場で活動している団体、機関との受入れ調整にあたった。

参加者は、慶熙大学の学生9名、明治学院大学、立教大学、反貧困ネットワークに関わる学生各3名の計18名で、その18名を上記の3つのテーマに応じてそれぞれ6名ずつのグループ（慶熙大学3名、日本側各団体1名ずつ）に振り分けられた。

12月7日（日）にオンラインによるオリエンテーションが行われ、実際に慶熙大学の学生が来日して、2026年2月4日から2月8日までの5日間、都内および埼玉県内の支援団体や現場を訪問し、講義やフィールドワーク、ディスカッションを行った。日韓両国における貧困問題の共通点と相違点を知り、現場訪問を通じた社会課題への当事者意識の醸成をした。また、大学生同士が同じテーマについて課題意識を持ち、学んでいくことで、国境を越えた若者同士のネットワーク構築や異なる文化的背景からの多角的視点の獲得なども目的としていたが、事前研修から学生は熱心に学びを深め、現場を訪問した際にも、鋭い質問が多く出されていた。

各コーディネーターが分担して訪問先の調整をしたが、実際の訪問は全体で行ったことで（一部3つのグループごとの訪問となった場所もあるが）、同じ情報を受け取っているのであるが、テーマが設定され、それに基づいた視点での最終報告を行い、効果的な学びにつながったと思われる。

また、訪問期間の前に個人的に来日して、5日間のプログラムで訪問予定の食料配布の活動に参加する学生がいたり、事後に慶熙大学で開催された報告会に日本から学生が参加するなど、これをきっかけに共に学びあう姿が見られた。丁寧に関係者間で振り返りながら、今後どういう発展をしていくのか、期待していきたい。

- 期間：2026年2月4日（水）～2月8日（日）
- 訪問場所：都内および埼玉県内の支援団体や現場
- 内容：講義やフィールドワーク、ディスカッションを行い、グループごとの最終発表を行った

◆多様な「貧困」の現場を訪問◆

女性の貧困、非正規雇用と若者、現代の“ドヤ街”、難民と貧困、貧困と学習支援といった様々な角度で取り組んでいる団体や組合などから話を聞くことができた。

日にち	活動・訪問先
12月7日（日）	全体オリエンテーション（オンライン）
1月	事前研修 ★孤立とメンタルヘルスグループ（明学・猪瀬） ①1/17 ②1/23（オンライン） ★居住・生活基盤・労働グループ（立教・和田） ①1/11 ②1/29（オンライン） ★教育・社会的マイノリティグループ（反貧困ネットワーク・加藤） ①1/16（オンライン）

3. 日韓大学生反貧困交流プログラム

2月4(水) 午前	一般社団法人 Colabo 事務所の訪問 (新宿区) ・貧困状態にある女性の支援、そして性搾取の問題に取り組む仁藤夢乃代表の講義 「支援する/される」関係ではなく「ともに現状を変えていく仲間」として考える大切さ。行政の「啓発」が、さらに若者たちが言えない、孤立させてしまうこともあるなど問題点も具体的に紹介してくれた。
午後	反貧困ネットワーク事務所 (東京 DEW) 訪問 (新宿区) ・レクチャー① (反貧困ネットワークと関係する団体) ア) ワーカーズコープ イ) 零穿 (てきせん) 大学 ウ) PARC (アジア太平洋資料センター) ※それぞれの団体から活動紹介、貧困に対する取り組みを伺った。 ・ちゃんぼら (だれでも来れる居場所) 見学 ・レクチャー② ア) 反貧困ネットワークの活動紹介 イ) 安田浩一さん (フリージャーナリスト) 講演 * 日本在住のクルド人の背景を知る・トルコの取材から弾圧の一面を報告 ・参加者交流会
2月5(木) 午前	現場訪問 (3 グループごとにわかれ) ・仮放免高校生の話を一緒に食事を取りながら聞く。
午後	「山谷地区」訪問 (台東区) ① 友愛会の吐師さんから山谷の成り立ちについて説明 ② 簡易宿泊所見学、街あるき ③ 泪橋ホールでグループにわかれて振り返り
2月6(金) 午前	レクチャー 東京 DEW (新宿区) ・非正規労働をテーマにプレカリアートユニオン委員長より講義。個人で加入でき、個人の闘争を支援することなどの活動について伺った。
午後	一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク (アスポート) 訪問 (さいたま市) ・困窮家庭の子どもたちを全県域で学習支援活動を実施/伊東柱記念碑 (立教大学) 見学
2月7(土) 午前	回らずしユニオン創設者 (現役大学生) から「孤立からの連帯」をテーマに講義 (新宿区) ・立ち上げるに至った背景や、業界を見て賃金の低価格競争にある、業界全体に対する異議申し立て、春闘の様子など話題提供をしてもらった。
午後	生活困窮者向け食料配布参加 (新宿区) ・認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやいと新宿ごはんふらすが開催している活動へ参加 NPO もやい事務所訪問。 ・活動についての振り返りや質疑応答をもらう。
2月8(日) 午前	グループごとにわかれて報告会準備 (明治学院大学白金校舎)
午後	報告会と懇親会 ・各グループのテーマに対応しながら、これまでの事前学習、4 日間の学びから、報告を行った。
2月22(日)	報告会 (韓国・慶熙大学) (ハイブリッド)

- ・全体でのレクチャーやディスカッションの場では引率者の一人である慶熙大学の姜先生が通訳をし、グループでの議論や活動の際には各チームに日本語能力の高い慶熙大学の学生が1名ずつ加わっているため、彼ら・彼女らが適宜円滑なコミュニケーションを促してくれた。
- ・また全体およびグループ内での連絡は LINE による同時翻訳機能を活用したため、事務連絡などでも問題が生じなかった。

(プログラムディレクター 菅沼 彰宏)

4. 情報保障の取り組み

ボランティアセンターでは、今年度の基本方針の1つとして「ボランティアセンターにおける活動の広報・情報保障の強化」を掲げており、ボランティア支援やプログラム参加、イベントや会議について、多様な学生、教職員に十分な情報保障ができるよう、引き続きアクセシビリティを十分に整備することを目指した。2025年は日本で初めてデフリンピックが開催された年であり学内においても今年度は、学生による情報保障やアクセシビリティ向上に関する自主的な取り組みが複数行われた。

情報保障の取り組みとして、ボランティアセンター内には、学生相談用に筆談器が常備されている他、タブレットによる音声のリアルタイム文字化機能などが活用されている。今年度は、ボランティア大賞の開催時に字幕スクリーンを設置した。自動入力精度や会場の照明との兼ね合い等を確認しつつ引き続き環境整備に取り組んでいく。

また、ボランティア・カフェ『『当事者が主役』ってどういうこと?〜JICA『TAMPOPO』プロジェクトに学ぶ国際協力〜』では、聴覚障害当事者による活動報告が行われ、要約筆記による字幕スクリーンの設置、登壇者側および参加者側双方に対する手話通訳の配置が行われた。さらに、聴覚障害学生による自主的なイベントにおいても手話通訳が手配され、当事者が主体となった発信の機会を支援した。その他、学生による映画上映を通じて音のない世界の豊かさを紹介するなど、インクルーシブな共生社会に向けた取り組みが行われた。



(ボランティア大賞会場) 右奥が字幕スクリーン

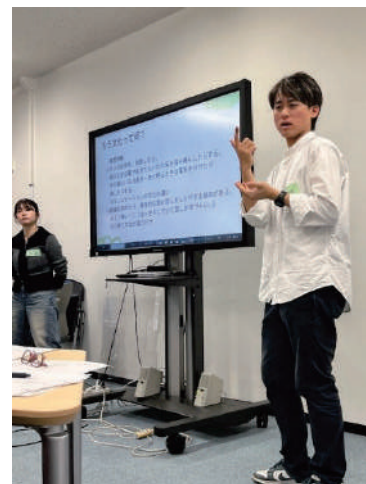
(ボランティアコーディネーター 森田 恵)



ボランティア・カフェ『『当事者が主役』ってどういうこと?』(P110 参照)



いつでもボランティアボランティアチャレンジ「アートドキュメンタリー『Listen』上映会」(P81 参照)



いつでもボランティアチャレンジ「ろう者と一緒に異文化に触れてみよう」(P83 参照)

II. 2025 年度活動報告

II. 2025 年度活動報告

1. 2025 年度ボランティアセンター行事一覧

月	主な行事・イベント	通年プログラムと活動内容	授業 協力
4月	ボランティアセンターガイダンス開催 (4回) 1 Day for Others (1Day) 実施 (1回) いつでもボランティアチャレンジ (いつボラ) 受付 (採用1件) 災害ボランティア活動助成金活動 (災ボラ) 採用2件 赤十字献血協力 (白金)	校舎別 PJ (白金:ホッププロジェクト、横浜:畑やろうじゃないか (以下白金 PJ、横浜 PJ) 白金 PJ:TAKANAWA HOP WAY (THW) 参加	2回
5月	1Day 実施:17回 (内1回中止)、いつボラ:採用1件 ボランティア・カフェ (ボラカフェ) :①開催 第1回ボランティアセンター運営委員会	ボランティア・サティフィケート・プログラム:ガイダンス、インテグレーション講座Ⅰ開催 白金 PJ:THW 参加	-
6月	1Day 実施:13回 (内2回中止)、いつボラ:採用3件、 災ボラ:採用4件、ボラカフェ:②③④開催 ボランティアファンド学生チャレンジ 2024 (ボラチャレ) 中間報告会 レインボーフェス (ボラカフェ②、ブックフェア、シンポジウム、啓発缶バッジ作成、ボラセン内展示 (白・横))	白金 PJ:(ラベルデザイン勉強会、ラベルデザイン案作成、活動紹介展示、THW 参加)	3回
7月	1Day 実施:3回、いつボラ:採用4件、災ボラ:採用24件、 ボラカフェ:⑤開催 ボランティアフェア開催 (7/8~11) 横浜校舎近隣自治会等役員との懇談会	白金 PJ:ラベルデザイン案投票、THW 参加	学外 1回
8月	1Day:5回、災ボラ:採用8件、国際実務体験プログラム: 夏期プログラム (YOKE1名)、能登半島地震復興支援 ボランティア活動実施 (8/27~8/31)		-
9月	1Day:1回、いつボラ:採用3件、災ボラ:採用2件	白金 PJ:ラベルデザイン決定、THW 参加、収穫①	-
10月	1Day:23回 (内2回中止)、いつボラ:採用1件、ボラ カフェ:⑥開催、災ボラ:採用12件、ボラチャレ 2025 開始 (2団体)、フェスティバルーン参加	白金 PJ:収穫②、THW 参加、東海大学・参加企業訪問	-
11月	1Day:13回 (内2回中止)、いつボラ:採用2件、ボラ カフェ:⑦開催、第6回ボランティア大賞開催、たかな わ子どもコミュニティカレッジ①、赤十字献血協力 (白 金)、第2回ボランティアセンター運営委員会開催	ボランティア・サティフィケート・プログラム:インテグレーション講座Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 白金 PJ:収穫③ 横浜 PJ:収穫	6回
12月	1Day:3回、いつボラ:採用1件、ボラカフェ:⑧⑨開催、 災ボラ:18件 (※悪天候に伴う中止18件)、 抱樸「おんなじいのち」協力、 たかなわ子どもコミュニティカレッジ②	横浜 PJ:調理大会	1回

1月	1Day:1回、いつボラ:採用1名、災ボラ:22件 日韓プログラム事前研修	白金PJ:株分け、THW参加 横浜PJ:和綿植付	-
2月	国際実務:春期プログラム実施(IUC1名)、ボラチャレ 2025中間報告会、1Day:5回 日韓大学生反貧困交流プログラム実施(2/4~8)、能登 冬期活動実施(2/11~15) 第3回ボランティアセンター運営委員会開催	白金PJ:THW参加	-
3月	高輪子どもコミュニティカレッジ③	ボランティア・サティフィケート・プログラム:修了証授与式	-

2. 2025年度来室者数

今年度の来室者数は、全体としては大きく伸びた。これまで来室者を増やしていくために苦心していた白金が大幅増であった。

いくつか要因が考えられるが、大きな理由としては災害ボランティア助成金の利用件数増と連動していると思われる。引率型の被災地復興支援活動も2年目となり、参加した学生を中心にいくつかボランティア団体もできている。助成金の申請が個人単位となっているため、個人が必要書類の持参や事後の報告などその都度来室していると思われる。

次に相談票の件数をもみても2024年度が白金12件、横浜33件であったのに対し、2025年度は白金44件、横浜42件となっており、特に白金の件数増加が著しいが、これまで何もしてこなかったため在学中に活動してみたいという学生も増えている。相談の内容についてはここでは省略するが、改めて白金・横浜で受けている相談内容などの分析をすることで、今後の認知度の向上やボランティアセンターの活動などに生かしていければと思う。

月	2025年度			<参考>2024年度		
	(白金)	(横浜)	(オンライン)	(白金)	(横浜)	(オンライン)
4	117	409	2	101	212	15
5	111	349	22	93	341	13
6	160	295	3	101	260	19
7	144	417	11	85	331	16
8	76	49	11	12	11	34
9	69	85	11	25	103	5
10	151	289	15	103	389	25
11	128	238	13	61	316	19
12	124	161	31	54	326	13
1	82	72	6	34	138	17
2	72	42	27	19	84	32
3	69	33	2	37	21	43
計	1,303	2,439	154	725	2,532	251

単位：名
(プログラムディレクター 菅沼 彰宏)

3. 明治学院大学ボランティア大賞

(1) 総括

ボランティア大賞とは、大学での「学び」と、社会課題とを「ボランティア実践」を通じて結びつけることにより、それぞれを深化させてきた学生を表彰し、その成果を学内外に広く発信することを目的とする賞奨励である。2020年度より開始し、今年度は6回目の開催となる。

第6回の実施概要は、以下の通りである。

応募資格	(1) 本学在学学生（院生含む）による活動であり、明治学院大学入学後の活動を審査対象とする。 (2) 応募は個人によるものとし、科目等履修生および団体からの応募は除く。 (3) 教育理念（Do for Others）の具現化を図る活動であること。 (4) 応募者は一次審査を通過した場合、必ず二次審査で発表ができること。
応募期間	2025年9月8日（月）～9月30日（火）
募集広報	7月下旬より大学ウェブサイト、ポータルサイト（ポートヘボン）、ポスター掲示を実施
審査	(1) 一次審査（書類審査） 10月3日（金）～10月15日（水） (2) 二次審査（プレゼンテーション審査） 11月8日（土） (3) 最終審査（合議審査） 11月8日（土）
審査結果	<p>【大賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Do for Others」の主体としてのボランティアーボランティアだからできること、私だからできたことー 内田 夏路（心理学部心理学科3年） <p>【審査員特別賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生社会を目指して～国際寮での活動と実践～ 小澤 ころこ（経済学部経済学科3年） <p>【奨励賞】※発表順</p> <ul style="list-style-type: none"> ・善い活動とは何か 渡邊 香帆（文学部英文学科4年） ・教育現場の人手不足が子どもに及ぼす影響ー特別支援学級での学習支援を通してー 横田 歩実（社会学部社会福祉学科3年） ・積み重ねた行動と学びを形にー人と人をつなぐ私の実践ー 清水 亜桜（心理学部教育発達学科3年） ・体験の価値を子どもたちへー経営と教育発達の視点からー 齊藤 陽菜莉（心理学部教育発達学科2年）

今年度は応募が6件あり、すべてが一次審査（書類審査）を通過し、二次審査（プレゼンテーション審査）および最終審査（合議審査）へと進んだ。プレゼンテーションでは、ボランティアとは何かを問い直すような、これまでのボランティア大賞ではあまり見られなかった、自身の内面に向き合う哲学的な要素を含む発表も見られた。活動の中で感じた喜びや苦悩、そしてそれらと結びつく学びが語られる発表は、多くの観覧者の心を動かし、とりわけボランティア実践に取り組む人々を勇気づけるものとなった。

なお、昨年度からの変更・改善点として、①ユニバーサル対応（UDトークの投影）、②広報

の強化（予告版チラシによる早期告知や受入団体への案内）、③スケジュールの前倒し（審査準備時間の確保）、④「学生賞」の実施、の4点を挙げるができる。

特に「学生賞」は、学生が主体的に参加できる仕組みづくりとして新たに設けたものであり、「どの発表がいちばん刺さったか」という観点から観覧学生による投票を行う形式とした。その結果、学生賞は大賞受賞者である内田夏路さんが受賞することとなったが、発表者のこれまでの活動へのねぎらいや、今後の展開を応援する気持ちが込められた、あたたかな賞となった。観覧学生が「何かを“ちょっとやってみよう”」と思えるきっかけに触れた瞬間でもあった。

また、観覧者数は回を重ねるごとに増加しており、学生・教職員のみならず、学外にも少しずつ浸透してきていることを実感している。

一方で、プレゼンテーションは限られた時間の中で進行するため、「もう少しじっくり発表や質疑応答を聞きたい」という感想や、「書類審査とプレゼンテーション審査の印象にギャップがあり審査が難しい」といった意見も寄せられた。こうした点については、今後さらに検討・改善の余地がある。今後も、本学の学生・教職員に加え、学外の方々も巻き込みながら、さまざまな立場から社会課題を感じ、考える場として本取り組みを発展させていきたい。

（職員 菊池 範子）



(2) 受賞学生報告**◆「Do for Others」の主体としてのボランティア—ボランティアだからできること、私だからできたこと—**

受賞	大賞
受賞者	心理学部心理学科3年・内田 夏路

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私がボランティアセンターの扉を開いたきっかけは、1年次春に履修した「ボランティア学入門1」の授業でボランティアについて考える中で、ボランティアへの興味と好奇心が育っていったからである。そして、2023年度ボランティアフェアの企画学生として準備を進める中で重度知的障がい児の放課後等デイサービスである「くまさん横浜」と出会い、実際にボランティア活動を始めることとなった。

2. ボランティア実践の内容

私のボランティア実践は、大きく3つの柱に分けられる。

1つ目は、上述した放課後等デイサービス「くまさん横浜」での活動である。ここでは、言葉によるやり取りが難しい子どもたちもいる中で、コミュニケーションの方法と可能性を考えながら活動を続けてきた。この活動は、積極的に訪問していた時期と定期的に訪問していた時期を合わせると、1年次から現在に至るまで継続している。継続的な活動の中で生まれた関係性は、「知的障がいのある人と共に暮らす」ことを自分事として私に考えさせた。綺麗事や幻想では語りつくせない現実や限界、保護者の想い、事業所の職員の考えや葛藤を目の当たりにする中で、自分の無力さや考えの浅はかさに直面した。

2つ目は、私の地元・神奈川県海老名市で発足した学習支援ボランティア「わいわい」での活動である。ここでは、小中学生を主な対象として夏休みの宿題を手伝ったり日曜日の午前中に学校の宿題を見たりしながら、楽しく学べる環境を提供している。その中で、単に「勉強を教える場」としてではなく、人と人が交わる場としてボランティアは柔軟に機能できることに気づく。しかし、自由度の高いボランティアだからこそできることと、それでも構造化された環境からこぼれていく層を掬いきれないことの狭間に立ち、「ボランティアが地域の中でどうあるべきか」を考える場所となった。

3つ目は、学内での聴覚障がい学生への情報保障、「ノートテイク」である。この活動では、一般的なアルバイト程度の謝金が支払われる。アルバイトの場合は、労働の対価として賃金が支払われる。では、ノートテイクは支援の対価として謝金が支払われているのだろうか。このことについて、私は「ノートテイクは謝金をもらっているからこそ、テイクの質の向上に努めなければならない」という考えに至った。加えて、「利用学生も、ノートテイクが謝金を支払われているからこそ自身のニーズを表出できるのではないか」とも考えた。つまり、謝金は単なる対価ではなく、謝金を媒介して個々のニーズに合わせた情報保障の質の向上が図られている仕組みが生まれていると考えた。

こうした学内外でのボランティア活動を経て、多様な人とのつながり方や関わり方を模索し、感じることとなった。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私はここまでいろいろな授業を履修してきて、明治学院共通科目と心理学部ならではの専門的な科目の両方が自分の価値観を大きくアップデートしてくれていると思う。

2年次で履修した「知的障害の病理（教育発達学科）」と「障害児・者心理学（心理学科）」は、直接的に「くまさん横浜」での活動と相互に作用した。私の場合は、1年次からのボランティア経験が授業より先行していたため、現場でなんとなく疑問に思っていたこと、あるいは見過ごしていたポイントが、授業の中で理論と紐づいていった。さらに、授業で専門的な知識を学ぶようになるとそれを現場に持っていくこともでき、まさに円環的な学びと実践が実現していた。

3年次には、「グローバル社会と市民活動1」の授業に取り組む中でボランティア活動をする意味や

価値を改めて問い直した。その頃は、それまで楽しく充実感を持ち、やりがいを感じながら取り組んでいたボランティア活動に対し、「なんの意味があるのか」「社会貢献なんてできていないのではないか」という葛藤を抱えていた時期でもあった。そうした問いに対して、「いや、意味があるに違いない」と思い込みたかったのかもしれない。けれどもこの授業が示してくれたのは、「正解は分からないけど、分からないまま活動してもいい」ということ。加えて、「分からないことを答えだと断定するのではなくて、分からなさを抱えることでベターを追い求め続ける」ことだった。早急に答えを求めない、分からなさを受け入れることで答えを探し続けられるという視点の獲得だった。

こうした考えを得るまでに、私に影響を与えてくれた本が実はたくさんある。そして、それらが私の心を動かしたのは、2年次に履修していた「日本文学講読5・6」の授業において、センテンスに真摯に向き合う姿勢を学んだからである。この授業があったからこそ、その後興味の湧いた書籍の文章に向き合うことができたと思うし、それらの持つメッセージを「汲み取りたい」と思えた。この授業での取り組みを通して、私は他者の言葉に対して能動的に働きかけることを学んだ。

こうしてみると、明治学院共通科目には専門科目とは違う視点から世界の見え方を少し変えてくれたり、見える世界を少し豊かにしてくれたりするエッセンスが詰まっているのだと思う。そうした授業に出会えたことや、それらから影響を受けて少しずつ自分が変わっていく過程を楽しめたと思っている。

4. 今後の課題、方向性

今後は、「私という存在に何ができるのか」という問いに向き合いたい。「あれをした、これをしたから終わり」ではない。常に自分の存在に可能性を見出し続けたいと思う。

具体的な部分では、卒業までに「くまさん横浜」での1Day for Othersを企画することを目標としている。私が1年生の時に「くまさん横浜」に出会って知らない世界に踏み出したような経験を、他の学生にも広めたい。そうして、障害福祉分野に興味を持ち、問題意識を向ける学生が増えることを期待したい。少しでも輪を広げることは、個人から個人へ、さらに集団へ、組織へとその意識が共有されていくことにつながるだろう。

ただし、そうしてしゃかりきに発信する以外にもできることがあるかもしれないと、最近思うようになった。自らの心を豊かにすることだ。私は心理専門職になることを現時点で目指している。そこで重要視されるのは、「自分とは違う他者の世界や価値観を想像すること」だと思う。自分は自分の人生しか生きられない。新たな価値観を取り入れるためには他の人の言葉が必要だ。他の人が見た世界を見る必要がある。だから、文化や芸術を見て、聴いて、感じる経験をしたいと思う。

他者にアクセスすることは、煩雑である。面倒だし、時には避けられない衝突もある。どうしても自分にとっては理解できない人もいる。でも、そういう世界を「知る」ことはできる。そうやって、自分とは違う世界を拒絶せず、ともにあろうとする姿勢を育み続けたいと思う。

5. 私にとっての Do for Others

“Do for Others”は「他者への貢献」であり、明治学院大学の誇る教育理念である。この言葉を考えるとき、どうしても“for Others”の部分に注目してしまいがちである。私はこの精神を心にとめようと思うとき、「私は他者のために何ができているのだろうか」「貢献できているのだろうか」と葛藤する。

しかし、この“Do for Others”は、他でもない“Do”の主体を無視して実現することはない。そしてその主体は、私であり、あなたである。そこに居続けること、何かをし続けること、「できているのだろうか」と考えながらも“Do”を続けること。その中で訪れる出会いと別れに、いちいち真剣に向き合って、正解が分からないままでベターを見つけようともがくこと。こういった、あんまりカッコよくない営みの中に“Do for Others”があるのではないだろうか。“Do for Others”は限られた人だけが実現可能な言葉ではない。立派なことや特別な活動をしないといけないと言っているわけではない。誰にでも開かれていて、普通の生活の中でこそ輝く言葉だと思う。

◆多文化共生社会を目指して～国際寮での活動と実践～

受賞	審査員特別賞
受賞者	経済学部経済学科3年・小澤 ころこ

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私が RA (Resident Assistant) として本学の国際寮 MG 奥沢ハウスでのボランティア活動に取り組むようになった背景には、多文化共生を理論だけでなく生活の中で実践したい、という思いがあった。これまで、日本赤十字社編集員や地域ケアプラザでのボランティアを経験してきたが、これらの活動は限られた時間の中で行うものだった。一方で、国際寮での RA 活動は、留学生と同じ空間で生活を共にし、日常の困難や不安に継続的に寄り添い、常に伴走しながら関わる点に大きな特徴がある。大学での多文化共生や移民、ジェンダーに関する学びを深める中で、その知識を身近な現場で実践したいと思い、RA としての活動を志した。

2. ボランティア実践の内容

RA として私は、10 か国以上から来た約 30 名の留学生が安心して日本で生活し、学べる環境づくりに取り組んできた。具体的には、入出国に関わる手続きや行政対応、医療機関の利用、アルバイト探しや面接練習の支援など、生活基盤を支えるサポートを行った。また、生活面の支援だけでなく、孤独や疎外感を抱える留学生の声に耳を傾けることも重要な実践であった。国際寮では、言語や文化、宗教、ジェンダーなど多様な価値観が交差するため、誤解やすれ違いが生じることも少なくない。そうした中で、RA が「最も身近な相談相手」として存在することで、留学生が安心して悩みを相談できる環境づくりを心掛けた。

さらに、交流を促進するために、各国の郷土料理を紹介する Cooking Night、たこ焼きパーティー、防災について学ぶ防災センターツアー等のイベントを毎月企画し、寮生同士が自然に関われる機会を作った。これらの活動を通して、留学生が孤立せず、寮全体が多文化共生の「小さな社会」として機能することを目指してきた。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

RA 活動は大学での学びを、実践を通して深める場となった。多文化社会やグローバル社会に関する授業では、人種・民族・ジェンダーといった課題を理論的に学んだが、国際寮ではそれが日々の判断や行動の中で具体的な課題として現れる。例えば、宗教的配慮やジェンダーに関する話題において、自分の当たり前が通用しない場面に何度も直面した。イベント企画や日常会話の中で、無意識のうちに特定の価値観や役割を押し付けていないかを常に振り返るようになり、多文化共生は「善意」だけでは成立しないことを実感した。

また、専攻である経済学の、労働と移民をテーマにした授業で学んだ技能実習生の孤立問題は、留学生の姿と重なって見えた。寮内の実践を通して、理論として学んでいた社会課題が、目の前の現実とつながり、自分自身がその課題に関わる当事者であることを強く意識するようになった。学問と実践を行き来することで、学びはより具体性を持ち、実践はより深い意味のあるものへと深まっていった。

4. 今後の課題、方向性

国際寮での活動を通して、私が特に強く感じた課題は、日本語能力が留学生の生活の安心感に大きく影響しているという点である。病院や役所に一人で行けず、不安を抱える留学生がいる一方で、将来日本で働きたい、日本社会に参加したいと考える学生も少なくない。言語の壁は、単なる不便さではなく、社会参加そのものを制限する要因になっていると感じた。

この課題に応えるため、今後は他の RA メンバーと協力し、日本語教育の支援により力を入れていきたいと考えている。具体的には、寮内での定期的な勉強会の開催や、日常会話の中で場面に応じた日本語表現を意識的に使う工夫を行い、自然な形で日本語に触れられる環境を整えたい。

また、学習のモチベーションを維持するため、目標を共有し合える仕組みや、交流を通じた学びの場づくりも重要だと考えている。こうした取り組みを通じて、留学生が日本社会への適応力を高め、多文化共生社会の担い手として成長できる環境を築いていきたい。

さらに私自身来年からカルフォルニア大学への留学を予定しており、今度は自分自身が言語的・文化的マイノリティとして生活することになる。国際寮で支える立場にあったからこそ、今度は支えを必要とする側として、多文化共生の難しさや大切さを体感したい。その経験を再び日本に持ち帰り、誰かの不安を和らげる行動につなげていくことが、私なりの“Do for Others”の実践だと考えている。

5. 私にとっての Do for Others

私にとって Do for Others とは、特別な善行や一時的な支援ではなく、他者と共に生きる姿勢そのものである。国際寮で留学生と生活を共にする中で、支援とは一方的に与えるものではなく、関係性の中で相互に学び合うプロセスであると実感した。相手の文化や価値観を理解しようと努める中で、自分自身の固定観念や無意識の偏りにも気づかされる場面が多くあった。RA 活動を通して学んだのは、共生とは「完全に分かり合うこと」ではなく、違いを前提に、調整しながら共に生活していく努力の積み重ねだ、ということである。その過程で、私は他者への貢献を特別な行為として意識するのではなく、日常の選択や態度として自然に行えるようになった。

国際寮での RA 活動は、私自身の価値観や行動の基盤を形づくった経験である。今後どのような環境に身を置いても、Do for Others の姿勢を忘れず、他者との関わりの中で実践し続けたい。

◆善い活動とは何か

受賞	奨励賞
受賞者	文学部英文学科4年・渡邊 香帆

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

不登校支援に注力してきた背景には、私の当事者としての実体験がある。

中学高校時代に不登校を経験した際、居場所は家のみになってしまった。しかし、フリースクールなどの不登校支援機関に通えるようになり居場所が増えると、より広い価値観を知り、「もっとこんなこともやってみたい」と関心が広がる体験をした。さらに、フリースクールでの活動を続ける中で、「やってみたい」という思いを持つ生徒は他にいるにも関わらず、フリースクールでは学習支援等の通常活動以外のイベントの開催が難しい事情に気づいた。不登校児童にとって「家」→「フリースクール」→その先にある「やりたい」を叶える場所を作りたいと考えて、不登校児童に体験学習の機会を作るボランティアサークルを設立した。

2. ボランティア実践の内容

不登校児童や学校に行きづらさを感じている児童に対して、体験学習の機会を、他団体と連携することで提供する活動をした。これを、明治学院大の学生によるボランティアサークル「Piece of Nature」として2022年より実現してきた。

活動を通して直面した大きな課題は、学生メンバー、子どもの両者の参加者を十分に集めることの難しさである。活動2年目の新入生継続率は25%、子どもの参加率は半分以下だった。どう対処すればいいかわからない中、例えば以下のような試行錯誤をした。

- ・入部前に実際の活動では気づきにくい活動理念や背景も言語化して伝える
- ・学生・子どもに活動に期待することを聞く
- ・直接聞けない人に関しては、参加している学生、子ども、保護者などの参加者の人物像を挙げ、それをもとに生活や困りごとを想像し、ニーズを考えてみる

その結果、3年目では新入生の定着率は83%に、子どもの参加率は90%に改善することができた。しかし、このプロセスは私にとって「ただがむしゃらだった」以外に言いようのない試行錯誤だと感じており、どこがよかったから結果に繋がったのかが理解できていない感覚が強くあった。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

「イギリス文学特講」という授業が、活動に対するモヤモヤに言葉を与え、「ボランティアとどう向き合うか」を教えてくれた。

授業では、イギリスの哲学者・作家のアイリス・マードックの著書「The Sovereignty of Good(善の至高性)」を元に英詩分析を行なった。

「善の至高性」によると、善の核心は世界の捉え方にある。先入観(エゴ)を捨て、他者があるがままに見ようとする姿勢を「愛を持った眼差し」と呼び、私たちが愛を持って他者に接する時、自ずと善を果たすことができる。だからこそ、善いことをするためには、賞賛や名声は必要なく、ただ愛を持って善いことをするだけで十分だという。英詩人W.H.オーデンは“The More Loving One”という詩でこの哲学をうまく言葉に落とし込んでいる：

星々が人を愛し輝いてるとしたら
人々が愛を返せないことはなんと悲しいことか
もし同じだけ愛し合うことができないなら
せめてより愛することができるのは私でありたい

(発表者翻訳)

学びと実践の効果は2つある。

1つ目の効果は、もやもやしていた課題解決のプロセスを言語化できたという点である。これまでは

なぜうまくいったのかわからなかった課題に対する取り組みが、学びを通して、「相手があるがまに見ようとする努力」だったからだ気づいた。以前は、例えば学生メンバーに対し、「不登校支援に関わる学生は不登校問題について知っているはずだ」と思い込んでいたが、試行錯誤を経て、本当は子ども好きな学生や、とりあえず何かボランティアをしたくて参加した学生も多いことに気づいた。学生や子どもの現状をより正確に把握して対応できたからこそ、結果に繋がったとわかった。

2 つ目の効果は、ボランティアに対する姿勢の見直しである。課題に直面したとき「これに意味はあるのだろうか」と考えがちになってしまうが、そんな時、オーデンの言葉は、「誰かに褒められる・認められるためにボランティア活動をしているわけではない、すぐに結果が出なくても、ただ善を追求するだけで十分だ」と、ボランティア活動を始めた原点に帰らせてくれた。

4. 今後の課題、方向性

今後の課題は、活動の継続の方法にある。

私自身が4年生のため、活動を継続するためには今後は下の世代にリードしてもらう必要がある。しかし、この活動は私自身の個人的な体験が原点となっているため、卒業後の活動は必ずしも同じ活動をそのままの形で継続する必要はないと考えている。

活動を通して気づいたことや得られたことを元に、活動を再解釈し、新たな活動として今の理念が引き継がれる形でも、「善いこと」の実現につながるのではないかと考え、後輩との対話も積極的に進めていきたいと考えている。

5. 私にとっての Do for Others

Do for Others の根底には“Love” for Others があるのではないだろうか。

「よかれ」と思ってしたことが本当に相手のためになっているか、定義が難しいボランティア活動がその効果を発揮するのは、他者があるがまに見ようとする努力があった時ではないかと思う。他者があるがまに見る＝愛を持つことで、支援する・されるという関係を越えた相互的な繋がりが生まれると考えている。

◆教育現場の人手不足が子どもに及ぼす影響－特別支援学級での学習支援を通して－

受賞	奨励賞
受賞者	社会学部社会福祉学科3年・横田 歩実

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

以前通っていた学校の教育実習でお世話になった小学校の校長先生から声をかけていただいたことがきっかけに、小学校での学習支援ボランティアを始めた。特定の子どもとお互いが顔と名前が一致する距離感で、関係を築いていきたいと希望し、特別支援学級でのボランティアが始まった。学生という立場であっても、子どもの役に立ちたいという気持ちが大きな原動力となった。小学校の特別支援学級での学習支援ボランティアをする中で、普段の学校生活以外の子どもの姿にも興味を持ち、運動会運営のサポートや宿泊体験学習の引率、小学校外では療育センターや地域子育て支援拠点などに参加してきた。

2. ボランティア実践の内容

小学校の特別支援学級での学習支援ボランティアでは、児童の安全確保や学校生活全般の見守り、授業中のサポートなどを行った。2年続けたこともあり、児童との関係性を構築しながらも、一人ひとりに合わせた支援を大切に活動を行った。

療育センターでは、子どもの安全確保やプログラム・給食などの片づけ、子どもの食事・排泄・遊び・移動などの介助を行った。療育センターに通う子どもは特別支援学級に比べて、年齢が低いこと、子どもの障害の幅が広がることが特徴であった。言葉によるコミュニケーションが難しい子どももあり、感情を読み取ることに苦戦した。

地域子育て支援拠点としての芽では、ひろばスタッフとして、おもちゃの消毒や片づけ、乳幼児とその親とコミュニケーションなどを行った。両親学級にも参加させていただいた。

私立小学校での学習支援ボランティアでは、算数の授業についていくことが難しい児童への対応をメインに、人手が足りない授業へのサポートを行った。公立小学校とは異なり、特別支援学級の設置自体はないものの、支援が必要な児童はいる。算数は学年が上がるごとに抽象度が増す科目であり、苦手な児童は一定数いる。そのため、分かりやすく自尊心を傷つけないような関わりを心がけた。

公立小学校の宿泊体験学習の引率では、愛川宿泊体験学習と三浦宿泊体験学習の2回、活動を行った。引率補助や夜間の見守り、活動の補助などを行った。宿泊体験学習で児童が普段とは違う様子である中、冷静に状況を見て、先生との連絡を細やかにを行うことを意識した。

特別支援学級に入っている小学校で行われた運動会の補助も行った。具体的には、普段関わっている児童に付いて、プログラムのサポートなどを行った。普段の生活とは異なる環境に不安になる子どももいるので、そういった子どもへの対応がメインである。また、児童の対応に伴い、教員との連絡も行い、安全確保にも努めた。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

「特別支援教育学総論 AB」や「障害児・者心理学 1, 3」などの障害児者関連の授業を受講した。大学での学びとボランティアのどちらもあったからこそ、根拠を持って子どもに関わることができたり、実際の子どもの姿と重ね合わせられ、障害に関する理解がずっと自分の中に入っていったりできた。

「ソーシャルワーク実習1」やインターンシップの授業では、高齢者や乳幼児の施設・機関に訪問する機会があった。複数の現場に行く中で、共通する考えとして相手を多面的に捉えることが大切だと気づいた。私には学校など自分のいる空間の子どもの姿しか見られない。しかし、その子どもにとっては家、学校、学童、習い事など生活全体があるため、他の空間や背景を想像し理解しようとするよう心掛けている。環境にも目を向けるようになったことで、行動だけを見て注意することがなくなり、子どもの考えや思いに耳を傾けるようになった。また、こうした考えはソーシャルワークの考え

としてある「人と環境の相互作用」にも繋がってくるだろう。

「社会福祉運営管理論 A」の中で、ゲストスピーカーで聴覚障害者が登壇されていた。その講義を通して、支援の手厚さは必ずしも本人のためになるとは限らず、成長の機会を奪うこともあることを学んだ。この学びを得てから、今のその子どもに必要なことを考え、相手の選択肢や成長の機会を奪わないように気を付けながら関わるようにしている。

4. 今後の課題、方向性

私は自身が行っていた特別支援教育支援員の普及によって、教育現場の人手不足に向き合っていきたいと考えている。

これまで5名の校長先生に大学生が現場に参加することに対するご意見や支援員の必要性を伺ってきた。大学生の特別支援教育支援員にニーズがあると共に、小学校側から人とつながることの難しさを知ることができた。社会福祉調査や基礎演習の授業があったからこそ、このような校長先生方へのインタビュー形式の調査を円滑に行うことができた。調査票の設問作りは社会福祉調査の授業から、インタビューの形式や展開などは基礎演習でのインタビューの経験から生かすことができた。

子どもとの関わりに価値を感じられる学生にもっと学校現場へのボランティアのハードルを下げる工夫をしていきたい。特に私が所属する社会福祉学科には、将来子どもや障害者支援に関わりたい学生がいる。そういった学生が現場に行くことは価値があるだろう。だからこそ、仕組みづくりや情報発信などをして、大学生にとっても教育現場にとっても利点のあるものにしていきたい。

5. 私にとっての Do for Others

私にとっての Do for Others とは何か一つの明確なものではないと考える。他者と一括りに言っても、様々な人がおり、その人にとって何を貢献と感じるかはそれぞれである。また、タイミングによっても変わってくるものだろう。

だからこそ、私はまずは相手との関係の構築を通して、目の前の人に自分が何をできるか、どうすれば思いが伝わるのかを考え続けること自体が他者への貢献ではないかと考えている。実際に活動の中で、まずは相手の名前を覚えて呼ぶ、相手の良いところに気づいて言葉にして伝える、相手の変化を気にかけるなど自分がされて嬉しいことを相手にもすることを大切にしてきた。そうした行動は小さなものだが、相手を大切に思っていることを伝える方法の一つであり、関係を築く土台になっていたと感じる。

本学の教育理念である Do for Others には、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という意味が込められている。この考え方は私が関係を築いていく中で大切にしてきた部分と重なる。

Do for Others とは、完成形を持つものではなく、相手と向き合い続け、考えるプロセスそのものだと今は考えている。

◆積み重ねた行動と学びを形に一人と人をつなぐ私の実践―

受賞	奨励賞
受賞者	心理学部教育発達学科3年・清水 亜桜

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は港区の国際交流施設でインターンとして、また平和記念事業の実行委員会として活動をしている。そして、オーストラリアでの幼稚園アシスタントとしての経験や、アルバイトでの在留外国人とのかわり、国際交流協会での経験から、在留外国人が国際交流施設の職員や同じ在留外国人同士の関わりはあるものの、日本人の若者と関わる機会が限られていることを感じた。また、戦争体験者のお話を聴く機会があった時に、戦争体験者の方々が未来の平和のためにつらい経験を思い出しながら、重い腰を上げて私たちに話をしてくれていることを感じた。また、戦争体験者も高齢であるため、いつまで直接お話を聴くことができるのかわからないという現状があることも感じた。そして、自分自身も実行委員会に所属するまで、平和や戦争に対して考える機会が日常生活のなかでほとんどなかったことから、「在留外国人と日本人の交流の機会創出」と「次世代を生きる若者や外国人の方々に平和について考えるきっかけをつくる」ために自分自身にできることはないかと考え、これらを組み合わせたイベント、「平和をつなぐまちあるき」を実施することで、一方にのみ興味を持っていた人に対してもう一方にも関心を持ってもらうきっかけを作ることができるのではないかと考えた。

2. ボランティア実践の内容

イベント当日は、港区の表参道地域も被害を受けた山の手空襲に注目して、前半は戦争体験者の話を直接聞くことができる「山の手空襲を語り継ぐ会」主催のイベントに参加し、後半は、表参道地域周辺の山の手空襲の跡をめぐるツアーを日本人学生の案内のもと実施した。前半では若者の朗読や音楽のパートもあり、自分自身も朗読者の一員として参加した。後半では運営の学生メンバーが事前に調べた内容を基に普段目にしていないものの、気付かない戦争の史跡に関してお伝えし、参加者それぞれが考える平和について話しながら、まちあるきをした。

イベントの実施にむけては、まず初めに国際交流や平和学習に関心のある学生をメンバーに迎え、計5人で運営を行うことに決めた。その後、港区国際交流協会と港区総務部総務課人権・男女平等参画係の平和都市宣言40周年記念事業担当職員の方々に協力依頼をし、それぞれの団体で、周知活動の面とツアー内容の検討、関連団体への調整の面でご協力いただけることとなった。イベントの内容を検討しつつも周知活動のためのポスターを作成し、大学の先生やボランティアセンターの職員の方、港区国際交流協会の方からアドバイスをもらい、完成させて、SNS(Instagram)、チラシ(国際交流施設)、留学生向けの授業での周知活動を行った。国際交流イベントに参加し訴求ポイントを探ったり、直接チラシを配ったりすることで、定員として掲げていた15人を超える応募が集まった。自分自身と運営メンバーの平和に対して、戦争に対しての知識を深めるための学習を行いつつ、参加者の理解を深めるための資料作成や当日のイベント内容の見直しを行った。

当日は、多くの方の協力や、運営メンバーの協力のおかげもあり、ゼロからの企画という点ではじめは不安もあったものの、無事に開催することができ、温かい雰囲気の中で国際交流と平和学習の機会創出をすることができた。参加者からも「平和を願う仲間と出会えたことが嬉しかった」「戦争の苦しみの深さを痛感した」などといった声を頂くことができ、また事後アンケートで参加者全員から満足度星5の評価を頂けたことから、国際交流と平和学習の機会を楽しく過ごしていただけたのではないかと考えた。

また、イベントはテレビでも取り上げられ、このイベントや私自身の考える「伝承」についてお話する機会をいただけたことで、平和について考えるきっかけや行動するきっかけを作ることができたと感じた。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

様々な学びとのつながりがあったなかでもとくに印象的だったのは、「グローバルシチズンシップ各論3」という、地球市民の一員として、自分たちにできることを考える授業で、三橋先生がおっしゃった、「fall in love with the problem, not your solution. ~自分のアイデアではなく、課題に夢中になろう~」という言葉である。この言葉がここに響き、振り返りや見直しを行う際、アイデアに夢中になってはいないか、逐一立ち返ることを意識した。どんな課題に対して活動を行うのか、だれを対象にしているのか、どんな人にどんな効果を生み出し、それがどういった世界につながるのかということを確認にして、迷ったときやうまくいかない時、うまくいったとき、その都度その都度立ち返ることで、満足度が高く、納得してもらえるような、目標である国際交流と平和学習の機会の創出が達成できるようなイベントの実施ができたと感じている。

4. 今後の課題、方向性

今後の方向性としては、まずは現在活動している、港区国際交流協会でのインターンと港区の平和都市宣言 40 周年記念事業実行委員会として今年度いっぱい活動を続けていくことで、それぞれの団体の課題に対して夢中になって行っていきたい。

また、今回おこなったイベントである「平和をつなぐまちあるき」としては、来年度も夏に再度実施しようと考えている。内容としては、今年度と同じように戦争体験者の話を直接聞けるものや、学生メンバーによるツアーを考えているが、運営メンバーとして参加してくれた学生がより主体的に参加し、知識を深められるような内容の再検討、また、参加人数定員の上限を上げ、より多くの在留外国人の方や日本人の地域の方にも参加していただけるような形を実現していくために考えていきたい。いずれにしても、国際交流と平和学習の機会を創出し、地域の方々や学生に満足してもらえる、楽しく学んでもらえるようなイベントが作れるように考え続けていきたい。

5. 私にとっての Do for Others

私にとっての Do for Others は「目の前の課題に向き合って、目の前の人に向き合って、自分にできることをする」ことだと思う。行動してみて初めて見える課題があって、行動してみて初めて出会える人がいて、行動をつづけることでできることの幅も広がっていくと感じている。はじめにできることは大きくなくても、思いを持ち続けることで、できることをし続けることで、救える人がいたり、社会をよりよくする一歩を踏むことができたり、自分自身としても成長することができると思う。自分自身のことを大切にするのはもちろん大事で、そのうえで目の前の課題に対して、困っている人に対して社会に対してできることをしていくことだと思う。

◆体験の価値を子どもたちへー経営と教育発達の視点からー

受賞	奨励賞
受賞者	心理学部教育発達学科2年・齊藤 陽菜莉

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は小学生のとき、学校で配布された「サブ・リーダー講習会」というチラシをきっかけに、はじめて子どもキャンプに参加した。そこでは、学校も学年も違う新しい友だちができたり、普段の生活では味わえない体験をして、大きな楽しさと充実感を味わった。また、いつも楽しいことを考えてくれたり、寄り添ってくれる大学生のリーダーの存在に強い憧れを抱き、「自分も将来、あんなリーダーになりたい。」と思うようになった。その思いから、中学時代は「ジュニア・リーダーズクラブ」というリーダー育成団体に入り、そこでの活動を経て、大学入学後、ジュニア・リーダーの卒業生が多く在籍する、地元墨田区の一般社団法人SSKに所属し、本格的にボランティア活動を始めた。

SSKでの活動では、楽しさだけでなく、思うように子どもと関わらず悩むことも多くあった。しかし、色々な新しいことにチャレンジしながら成長していく子どもたちの姿を間近で見ることで、もっと子どもの成長を支えられる存在になりたいと強く思うようになった。同時に、体験活動が子どもに与える影響の大きさとその価値を強く実感し、現在まで活動を継続している。

2. ボランティア実践の内容

私が所属している一般社団法人SSKは、非日常の体験を通して、あそびゴコロあふれる社会を実現することをミッションとして活動している。現在、遊具の撤去やボール遊びの禁止などにより、子どもが自由に遊べる公園が年々減少している。加えて、家庭の経済状況による体験格差や、それに伴うキャンプなどの自然体験の減少、さらには地域のつながりの希薄化による子どもと地域住民との関わりの減少など、子どもの体験機会の減少は大きな社会課題となっている。私はこうした課題に問題意識を持ち、SSKの活動に参加してきた。主な活動内容は、キャンプなどの体験学習のスタッフ、移動式遊び場におけるプレイリーダーの活動などである。

まず、キャンプでは、野外炊飯をしたり、川を登ったり、ふわふわの雪に思いきりダイブしたりなど、自然を通した非日常的な体験を子どもに届けている。私は、子どもたちを見守り、ときには同じ立場で一緒に遊んだり、挑戦したり、またときには悩みや不安に寄り添う、子どもにとって身近なお兄さん・お姉さんのリーダーとして活動している。キャンプは年間で約9回参加している。

つぎに、移動式遊び場での活動についてである。移動式遊び場とは、車やリヤカーに遊びを引き出す道具や素材を積み込み、プレイリーダーと共に地域を巡る「移動する遊び場」である。車には、アスレチック遊具、けん玉、こま、皿回し、輪投げ、素材遊びの道具、巨大ジェンガ、ボードゲームなどが搭載されていたり、車自体が黒板やすべり台にもなる。他にも色々な遊びがあり、校庭や広場、大きな道など、どこでもすぐに遊び場に変身して、みんなが遊べる場所をつくれるのが、移動式遊び場の魅力である。そしてその中で私が担うのが、プレイリーダーの役割である。常に変化する子どもの遊び場の様子を見守ると同時に、必要に応じて声かけをしたり、ときには子どもと一緒に思いきり遊んだりして、子どもにとって「何をしてもいい、何をしなくてもいい遊びの場と時間」をつくっている。移動式遊び場は毎週さまざまな場所で実施されており、私は月に1~2回程度参加している。

そのほかにも、地震災害のあった能登半島での移動式遊び場ボランティアや、SSKの大学生世代が中心となって運営しているSSK子ども会において、子どもの第三の居場所づくりにも携わっている。

これらの活動は、子どもに遊びや体験の機会を提供し成長を支えるだけでなく、安全に子どもを預けられる場の提供として保護者を支援したり、地域の交流の場をつくることによる子育ての孤立解消にもつながる実践であると考えている。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は、ボランティア活動を大学での学びに持ち帰り、また大学で学んだ知識をボランティア活動の

現場で活かしてきた。具体的に、転学科した経験を活かして、教育発達学科の視点と、転学科前の経営学科の二つの視点をもって活動してきた。

まず、教育発達学科の「教育心理学」の授業では、そもそもなぜ遊びや体験が子どもにとって重要なのかを学んだ。具体的に、ピアジェの認知発達理論や、ヴィゴツキーの社会文化的発達理論などの発達理論から、子どもにとって遊びや体験は学びや成長そのものであることを実感した。また、授業で学んだ受容や繰り返しなどの傾聴の技法は、実際に子どもと関わる際に意識的に実践している。さらに、「特別支援教育」の授業では、子どもは誰もが異なる個性や特性をもっており、一人ひとりにあった支援が大切であることを学んだ。

そして、転学科はしたが、経営学科での学びも、私の活動を支える重要な基盤となっている。経営学では、主に非営利組織の存在意義を学んだ。非営利組織はミッション（使命）の達成を目的としており、利益追求を目的とする営利企業では取り組みにくい社会課題に向き合える点が強みである。一方で、人材や資金の確保が難しいという課題もある。自分自身、実際に活動するなかで、低価格で子どもたちに体験を提供できることは大きな強みである反面、人手不足や資金不足を課題として感じる場面があった。こうした学びと経験から、活動を継続・発展させるためには、地域の理解と協力を得ることが不可欠であると強く感じた。そして、単にお手伝いでなく、組織の一員としてミッションを再確認し、どうすれば地域との連携を深められるのか、活動をもっと広げていけるのか、といった運営の視点からも活動を捉えることを意識するようになった。

このように、社会課題に対する問題意識を持ち、教育発達学の視点から「子どもをどのように支えるか」、経営学の視点から「その活動をどのように支えるか」という二つの視点をもって活動してきた点が、私のボランティア実践における学びの深まりであり、独自性であると考えている。

4. 今後の課題、方向性

今後の課題としてまず挙げられるのは、教育発達学に関する専門的理解をさらに深めていくことである。私は今年度から教育発達学科に転学科したため、まだまだ知識不足である。今後は、活動での経験を生かしながら、さらに講義や実習を通して学びを積み重ねていきたい。

また、転学科はしたが、経営学も私にとって非常に大切な学びであるため、独学にはなるが学びを続けていきたい。特に、これまで私は主に班付きリーダーの役割を担ってきたが、今後は経営学の学びを活かして、企画や運営といった側面にも積極的に挑戦していきたい。

さらに、自身の活動の幅を広げることも課題である。現在はSSKでの活動が中心となっているが、今後は他のボランティア活動にも積極的に参加し、多様な価値観をもつ人々と関わりながら経験を積んでいきたい。加えて、大学内でのつながりを生かした活動にも取り組みたいと考えている。例えば、これまでの培ってきたレクリエーションのスキルを、同じくボランティアに関心をもつ学生に共有し、大学内におけるボランティア活動や交流を広げていけるイベントの開催などである。

5. 私にとっての Do for Others

私にとって、「Do for Others」＝「Do for Me」である。私はこれまでのボランティア活動を通して、多くのものを得た。子どもが喜ぶ姿に自分自身も幸せな気持ちをもたらした。共に活動する大切な仲間とも出会えた。思うようにいかず悩み、自分の不甲斐なさに悔し涙を流したことも少なくないけれど、そうした経験を積み重ねて、自分自身少しずつ成長することができた。そして、転学科という人生の大きな決断もした。誰かのための活動が、自分と向き合うひとつの時間になったのである。つまり、「Do for Others」は、私のための「Do for Me」の活動でもあったのである。

もし今、ボランティア活動に興味をもち、挑戦してみたいと考えている人がいたら、ぜひその一歩を踏み出してチャレンジしてみてほしい。そこには、誰かのために行動する中でしか得られない、自分自身への気づきがあるかもしれない。

私の人生において、ボランティア活動は切っても切り離すことのできない存在である。そして、きっとこの先も私の人生の一部であり続けるだろう。これからも、誰かのために、そして、自分のために。

4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム

(1) 概要

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラムは、ボランティア実践と大学での学びを融合させた明治学院大学独自の学生向けプログラムである。全学の正課教育と連携した取り組みであることから、明治学院大学教育連携という言葉が冠されている。

このプログラムは、実践の意味を見抜き、人の想いを読み取る「観察する力」、自身の考えを言語化し発信する「デザインする力」、現場の経験を理解し、専門性の学びを深める「理解する力」を身につけることを目指している。そして、それらの力によって、本学の教育理念“Do for Others”に基づき、共生社会の実現（他者との共生を意識し守ること）に貢献する学生の育成が最終的な目標である。

このプログラムを修了するには、入学年度より5年以内に、以下の3つの要件を充たす必要がある。①ボランティア実践（入学後100時間*以上）、②インテグレーション講座（全4回）の受講、③ボランティア実践と結びつけた科目の単位修得（3科目以上）である。また、活動をおこなった場合は毎月、おこなわなくても最低3か月に一回、報告書を提出し、コーディネーターのフィードバックを受ける。要件を充たしたのち、最終報告書を提出し、運営委員会、認証委員会での承認を経ることで修了証（サティフィケート）が与えられる。

*実践時間は、2024年度登録生までは135時間であったが、2025年度登録生から100時間となった。

(2) 総括

2025年度の修了者は、2022年度登録生（3年目生）6名、2021年度登録生（4年目生）2名、合計8名だった。1名、要件を充たしながら、最終報告書が間に合わなかったため修了できなかった学生がいた。また、修了が4年目になる学生が2名いた。1名は、活動時間とインテグレーション講座の受講回数が条件に達していないため、もう1名は、修了要件はすべて充たしながら、修了予定者がおこなうインテグレーション講座IVでの発表を翌年に持ち越したいという希望があった者である。修了生と最終発表タイトルは下記の通りである。

2025年度修了生と最終報告書タイトル

文学部英文学科4年	渡邊 香帆*	With Love, to the Next View
文学部芸術学科4年	石井 優衣	1つの小さな特技であっても人のために使うことができる
社会学部社会福祉学科3年	横田 歩実*	子どもへの貢献
国際学部国際学科4年	室田 素良	私にとってボランティアとは？ 一問いを抱き続けている4年間ー
国際学部国際学科3年	芝 愛澄	あなたと共に歩むボランティア ー様々なボランティア活動の経験を通してー
心理学部心理学科3年	内田 夏路*	Do for Othersの主体としてのボランティア
心理学部心理学科3年	西 明日香	青年期の発達課題を問題視しない視点 ーカウンセラーとしての姿勢や態度を取り入れてー
心理学部教育発達学科3年	清水 亜桜*	積み重ねた行動と学びを形に ー人と人をつなぐ私の実践ー

*の学生は、「明治学院大学ボランティア大賞」で発表し、その内容が本報告書に掲載されていることから、内容の重なるサティフィケートの最終報告書は掲載していない。

(3) プログラム登録者数と修了者数の推移

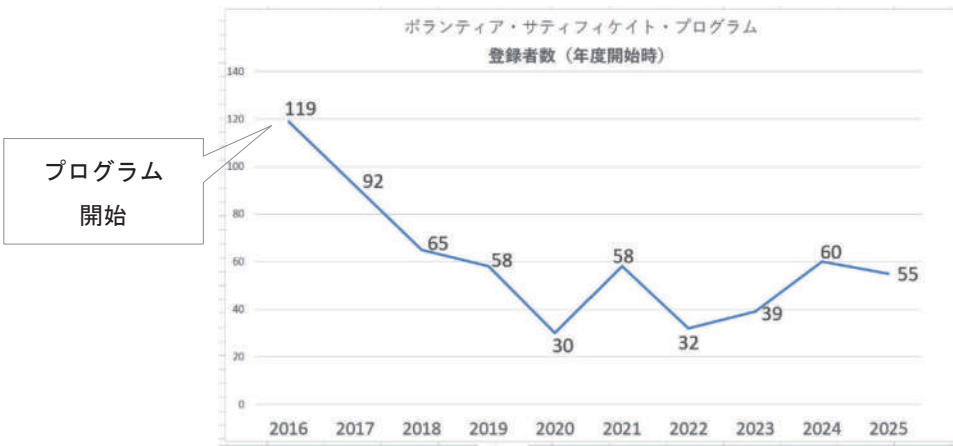
図1は、11月に開催される第2・3・4回インテグレーション講座時点での登録者数である。インテグレーション講座出欠アンケートへの回答者を継続意志のある者として登録者数としている。継続率は登録開始時の人数を基にしている。この時点での全体の登録者数は、2024年度74名より微増となっている。

(図1) 2025年度プログラム登録者数 (2025年11月8日)

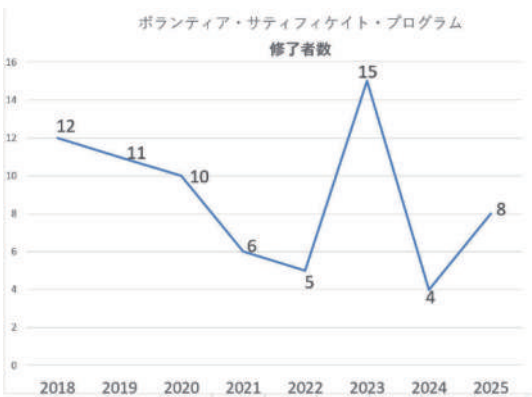
	合計	学部							継続率 (%)
		文	経済	社会	法	国際	心理	情報数理	
2025年度登録 (1年目)	40	11	4	8	4	11	2	0	71.4
2024年度登録 (2年目)	26	2	2	7	6	4	4	1	43.3
2023年度登録 (3年目)	12			2	2	3	5		30.8
2022年度登録 (4年目)	2	2							**
合計	80	15	6	17	12	18	11	1	

**この登録年度は3年目で修了している学生もいることから継続率は算出していない。

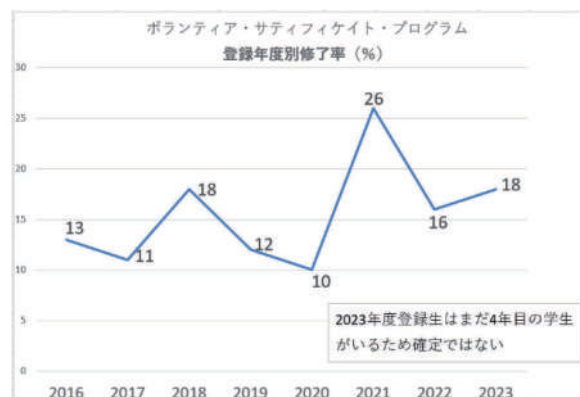
(図2) 登録者数 (年度開始時)



(図3) 年度ごとの修了者数



(図4) 登録年度ごとの修了率



最初の修了者 (3年で修了した者)

(4) 段階認定導入

これまで、登録者の継続率、修了率の向上が課題となってきた。そこで、2026年度から、モチベーションの維持を主たる目的として修了前に2つの段階認定を設けることとなった。

修了は運営委員会、認証委員会（学部長会議）の認証を経て、学長名で修了証を発行するが、段階認定はボランティアセンターの定例ミーティングで承認し、センター長名義で認定証を発行する。

区分	名称	時間数	受講	条件	承認・認証
段階認定	ベーシック	30 時間	～II	左記条件クリアすることで認定	定例ミーティングで承認 → センター長名で認定証発行
	アドバンスト	70 時間	～III		
認証	修了	100 時間	～IV	最終報告書提出 → 教員（運営委員）がチェック・指導	認証委員会で検討・認証 → 学長名で修了証発行

(5) 2025 年度の流れ

インテグレーション講座 I	
インテグレーション講座 I はオリエンテーションとボランティア活動の探し方、活動する上での注意など活動の入門的な内容となっている。受講後に登録書を提出し登録完了となる。	
(春学期) 5月26日(月) 5限 27日(火) 5限 28日(水) 3限 (秋学期) 9月29日(月) 3限 30日(火) 4限	【内容】 ①講義「ボランティア実践から学ぶとは？」(センター長 猪瀬 浩平) *動画 ②ボランティア入門(改訂した『ハンドブック』に沿って説明) ③学生同士の交流 「あなたが気になる社会課題は？」 ④質疑応答 登録学生(春) 52名(文学部11 経済学部6 社会学部11 法学部8 国際学部14 心理学部2) 登録学生(秋) 4名(文学部2 法学部1 心理学部1)
インテグレーション講座 II/III/IV	
午前の「ボランティア大賞」と午後の「学部別分科会」から構成される。ボランティア大賞は、サティフィケート登録と関係なく応募でき、応募者のうち一次の書類審査を通った6名がプレゼンテーションをおこなう(二次審査)。II/III/IVとともに同じ講座への参加だが、この秋の講座にはじめて参加する学生(主に1年目生)にとってはII、2回目になる学生にはIII、3回目となる学生にはIVとなる。分科会で、IVの学生(3-4年目生)が最終報告書執筆に向けて発表し、運営委員の教員がコメントをする。他の学生も活動報告を共有し合う。	
11月8日(土) 9:30~13:15 ボランティア大賞	【午前の部】 ボランティア大賞への参加(発表 or 観覧) ▼二次審査を通過しプレゼンテーションをおこなった6名のうち、サティフィケート登録学生が5名だった。 【午後の部】 学部別分科会

4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム

<p>13:30～15:00 学部別分科会</p> <p>分科会 A 1455 教室 (A-1) 1455 (A-2) 1457</p> <p>分科会 B 1456 教室 (B-1) 1456 (B-2) 1458</p>	<p>▼分科会 A/B で本年度修了予定学生の発表を聞き、その後、小分科会に分かれ、それぞれの活動内容などを共有した。</p> <p><分科会 A> 文学部/法学部/国際学部 参加学生…35名(発表者3名+ボラ大発表者1名) 運営委員：齊藤 哲也(文学部)/波多江 久美子(法学部) 榎本 珠良(国際学部)/長谷部 美佳(教養教育センター)</p> <p>ボラセン：猪瀬 浩平(センター長、教養教育センター) 森田 恵(コーディネーター) 菅沼 彰宏(プログラムディレクター) 熊澤 端、杉山 佳奈(職員)</p> <p>→ 小分科会 A-1 文学部/法学部 A-2 国際学部</p> <p><分科会 B> 経済学部/社会学部/心理学部/情報数理学部 参加学生…27名(発表2名+ボラ大発表者4名) 運営委員：土屋 拓也(経済学部)/稲葉 振一郎(社会学部) 杉岡 千宏(心理学部)/宮寺 隆之(情報数理学部) 尾畑 裕(宗教部長、経済学部)</p> <p>ボラセン：西原 博之(センター長補佐、経済学部) 宮崎 理(センター長補佐、社会学部) 砂川 秀樹、田中 悠輝(コーディネーター) 菊池 範子(職員)</p> <p>→ 小分科会 B-1 経済学部/心理学部/情報数理学部 B-2 社会学部</p>
<p>最終報告書</p>	
<p>修了予定者は、最終報告書を提出する。同報告書には、ボランティア実践の内容と時間数、プログラムと結びつけた科目を記し、ボランティア体験で学んだこと、大学での学びとの結びつけ、今後の展開、自分にとっての「Do for Others」について書く。報告書は、所属学部の運営委員(教員)が読み、必要に応じて指導し、再提出させる。</p>	
<p>1月8日(木) 1月9日(金) 2月5日(木)</p>	<p>最終報告書提出〆切(ボランティアセンターに提出) → ボランティアセンターから各学部教員へ最終報告書を送付 → 教員からの戻し〆切</p>
<p>認証</p>	
<p>学生の活動時間、内容に基づき、運営委員会での確認を経た後、認証委員会でプログラム修了認証の可否が検討され、決定される。</p>	
<p>2月25日(水) 3月3日(火)</p>	<p>運営委員会 → 認証委員会【構成：学長、副学長、各学部長、教養教育センター、事務局長、ボランティアセンター長】(陪席：学長室長、ボランティアセンター次長、コーディネーター)</p>
<p>修了証 授与式</p>	
<p>3月12日(木) 11:00～12:00 記念館小チャペル</p>	<p>修了生 8名</p>

(ボランティアコーディネーター 砂川 秀樹)

◆1つの小さな特技であっても人のために使うことができる

文学部芸術学科4年 石井 優衣

1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名/活動先	活動時間
1年次	ヤギ部 Kawaii 華道体験レッスン 戸塚モディでの華道教室	73 時間
2年次	ヤギ部 華道で繋ぐ地域の輪	58 時間
3年次	(打ち合わせなど)	3 時間 50 分
4年次	実施前 川上北小での華道教室	15 時間
合計時間		149 時間 50 分

2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

私が「特技は人のために使うことができる」というテーマに気づいたのは、実を言うと華道教室形式のボランティアを経験した後である。活動以前の私は、華道をはじめとする芸術は、基本的に一人で向き合うものであり、また、取り組んでいる人だけのためのものだと考えていた。そのため、企画した時点では、だれかと華道が出来たらみんな新鮮で楽しいだろうなという考えに近かった。しかし、ボランティア活動を通して、芸術が人と人との間にあるとき、その意味が大きく変わること気づいた。作品そのものよりも、それを前にした人同士に生まれる言葉や場の空気が制作を通して交わっていた。そこから芸術は人との鑑賞や技術だけで完結するものではないと感じるようになった。

特に印象に残ったのは、活動後に自分の行動そのものに対して、後日わざわざ DM を送ってもらったり、直接、感謝の言葉を受け取ったことである。それは、完成した作品や出来栄に対する評価ではなく、「関わってくれたこと」への感謝だった。その経験を通して、特技は(私の場合は芸術は)誰かと時間や視点を共有するための手段にもなり得るのだと実感した。

この気づきからボランティアはなにも特別なことや難しいことをしなくてはならないのではなく、人とのつながりを持つことが可能であれば、それが小さな特技であってもボランティアになり得るのだと分かった。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は、華道教室形式のボランティア活動を形態を変えて二回実施した。活動の目的は、いけばなを教えることではなく、芸術を介したコミュニケーションによって地域交流を促進することである。この実践は、大学での学びと結びつくことで、より深い理解へとつながった。

一回目の活動は、戸塚モディでワークショップ形式として行った。子どもから高齢者まで、幅広い世代が参加する場で、完成した作品を前に自然と会話が生まれていく様子を目の当たりにした。この経験は、「芸術はメディアである」という「芸術メディア論」の講義内容を実感として理解する契機となった。芸術は鑑賞される対象にとどまらず、人と人の間に置かれることで情報や感情を媒介し、関係性を生み出す存在であるという考え方が、実践を通して腑に落ちたのである。

二回目の町内会での活動では、高齢者を対象に参加者を固定し、より継続的な交流を意識した。ここでは、作品の完成度よりも、制作過程で交わされる言葉や視線といったやり取りが、場の雰囲気をつくっていた。活動後に「若い子と話せてうれしかった」という言葉をかけてもらい、芸術が会話の起点となることで、世代を越えた関係性が生まれることを実感した。

このような経験は、「日本文学講読」で学んだ姿勢とも重なっている。この授業では、文学作品の解釈に正解はなく、それぞれの読みを尊重し合うことが重視されていた。異なる意見が提示されるからこそ、対話は活発になり、「答えがないこと」そのものを楽しむ空間が生まれていた。華道ボランティアにおいても、作品に対する感じ方や言葉は人それぞれであり、その違いを共有することがコミュニケーションの広がりにつながっていた。正解のないものについて語り合う楽しさを、私は実感として学ぶことができたのである。さらに、「身体表現論」の授業では、トラウマや言葉にしづらい感情を絵として表現することで、心が救済されるという行為を学んだ。芸術は言葉を必要としないからこそ、人は無理に説明することなく、自身の内面を吐露することができる。ボランティアの現場でも、言葉数が多くなくとも、花に向き合う姿勢や表情から、その人の気持ちが伝わってくる場面があった。芸術は「話す」ものではなく、「心で語る」ための手段にもなり得るのだと感じた。

これらの学びと実践を通して、私は芸術を一方的に与えるものではなく、人と人の間に置かれる媒介として捉えるようになった。ボランティア活動は、大学で得た知識を確認する場であると同時に、その意味を更新する場でもあった。

こうした経験から、私はボランティアとは「何かをしてあげる」行為ではなく、学びや特技を媒介にして、他者と同じ時間や感情を共有する行為であると考えようになった。大学での学びとボランティアでの実践を繰り返した中で、なにをやるかよりも互いが向き合う姿勢そのものが、地域や社会との新たな関係性を生み出す力になるのだと実感した。

4. 今後の課題、方向性

今後は、これまでの華道ボランティアと大学での学びを、人と人が関わる場づくりへと発展させていきたいと考えている。ボランティア活動を通して、相手と同じ場に立ち、同じ時間を共有することで、言葉にしなくとも気持ちが伝わる瞬間が生まれることを実感した。この経験は、一度きりの活動に留めるものではなく、今後も継続的に活かしていくべき大切な姿勢であると感じている。

「芸術メディア論」で学んだ、芸術は人と人をつなぐ媒介であるという考え方は、華道ボランティアの現場での実感と重なっていた。花に向き合う時間や作品を共有する過程は、意見や感情を自然に引き出し、対話を生むきっかけとなっていた。また、「日本文学講読」で学んだように、正解のないものについて語り合うことは、互いの考えを尊重し合う姿勢を育て、活発なコミュニケーションへとつながる。

さらに、「身体表現論」で学んだ、言葉にしづらい感情や経験が表現を通して救済され得るという視点は、今後の活動を考える上で重要な指針となっている。芸術は説明を必要としないからこそ、人は無理なく自身の内面を表現できる。今後は、こうした表現の力を活かし、年齢や立場を超えて人が安心して関われる場を、ボランティアを通して今後も模索していきたい。

大学で得た知識と、現場での実践を往復し続けることで、自分の感性や経験を他者のために活かす姿勢を深め、社会の中で人と人をつなぐ存在へと成長していきたい。

5. 私にとっての Do for Others

私にとって「Do for Others」とは、相手のために何かを「してあげる」ことではなく、相手と同じ立場に立ち、同じ時間と経験を共有する姿勢そのものを指す言葉である。聖書の言葉である「人にしてもらいたいと思うことを、あなたも他人にしてあげなさい」という一節を含めて考えると、この理念は一方的な善意ではなく、他者への想像力と対等な関係性を前提としていることがわかる。私は高校生の時にこの聖書の教えに出会ってから、「Do for Others」の前後の文脈こそが重要であると考えてきた。

その理解を実感として得ることができたのが、大学での私のボランティア活動である。コミュニケーションが円滑に成立した要因は、私自身がレクリエーションを通して「教える側」ではなく「参加者」になった点にあると考えている。いけばなを指導する立場に立つのではなく、参加者と同じ視点で花に向き合い、同じ場を共有することで、自然な会話や感情のやり取りが生まれた。

このような関わり方は、まさに「相手と同じ視点に立つ」という「Do for Others」の根幹を体現す

るものであった。自分の行為を押し付けるのではなく、相手と共に時間を過ごすこと。その積み重ねによって信頼や交流が生まれることを、私はこのボランティア活動を通して学んだ。

◆私にとってボランティアとは？ ―問いを抱き続けている4年間―

国際学部国際学科4年 室田 素良

1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名/活動先	活動時間
1年次	社会派映画同好会 Piece of Nature	13時間
2年次	昭和女子大学戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト Piece of Nature	55時間
3年次	昭和女子大学戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト	60時間30分
4年次	昭和女子大学戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト のと部よこはま@明学	60時間30分
	合計時間	189時間

2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

テーマを考えるに至った背景は、大きく2つある。第1に、4年間の活動を振り返った時、自身がやってきたことはボランティア活動なのだろうかとの疑問が生まれた。そもそも、ボランティアとは何かとの問いについて考えてみたいと思った。4年間の振り返った時、ボランティアをしたいというよりも、自身がやりたいことをやってきたと言う方が正直なところであった。自分がやってきたことをボランティアとして語ることにためらいや違和感があったため、自分にとって、ボランティアとはどのような営みなのかを考えるなかで、4年間の振り返り問いを抱き続けていることに気付いた。

問いを抱き続けることを私が大事にするようになった背景には、国際学部国際学科野口久美子先生のゼミや授業がある。ゼミでは先住民の「語りを聴く」とはどのようなことか、インタビューの暴力性についての学びにはじまり考えている。私が発した質問を相手が答えたくない、答えづらいものと感じる可能性が常にある。このことは先住民に限らない。自身が発する問いについて考え続けるように、学びを通じ、自ずとなっていく。

第2に、2024年11月のインテグレーション講座分科会である。国際学部国際学科の榎本珠良先生から、ボランティアをできることの特権性についてのコメントがあった。特権性に関するコメントを受け、その場では応答することができなかったが、活動をすることができる余裕がある自分とは、自分が有する特権性とは何かを見つめ直したいと考えた。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

具体的な活動内容は、①昭和女子大学戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト（以下、戦後史プロジェクト）②Piece of Nature③のと部よこはま@明学④場づくりである。④の場づくりは、大学入学後から4年間様々な場を作ってきた。

戦後史プロジェクトに私が参加するようになったのは2022年12月からである。戦後史プロジェクトは毎年11月の秋桜祭に向け、企画展をゼロからつくりあげる。主なテーマは被爆者運動である。日本原水爆被害者団体協議会（以下、日本被団協）が1956年に結成されてから活動を続けるなかで蓄積してきた運動に関する史料を企画展で紹介する。2023年は、「被爆者たちが望む未来 あなたが望む未来―「原爆被害者の基本要求的を読む」―」、2024年は「史料が語る日本被団協の歩み―日本被団協関連文書―」、2025年は、「被団協関連文書をひもとく―私たちと史料との対話―」を実施した。特に2024

年の企画展では、会場に多くの史料を展示し、来場した方が史料を通じて出会う一人一人と自分自身を重ね合わせる様子に触れ、史料と来場した方一人一人との間につながりが生まれているように感じた。

私は Piece of Nature に立ち上げから関わり、大学2年生まで日ごろの活動に参加してきた。大学3年生以降は、活動日に参加できることは少なくなり、メンバーと折々に話して様子を聞く、研修会に参加するなどしてきた。Piece of Nature は近隣のフリースクールと連携し、子どもたちと一緒に自然体験をすることを目的として活動してきた。Piece of Nature の活動を通じて、私は初めてフリースクールとつながりを持った。一人一人にとっての居場所が大切で、その場所は学校に限られないことを学んだ。この学びは教職課程においても活かした。活動を通じ、あるフリースクールに出会ったことで、学びの原点に触れた。学校では主に教科学習に重点が置かれるが、そのフリースクールでは、一人一人がやりたいことに時間を使い大人が近くで見守っていた。遊びと思われる時間の中にある様々な学びを大切にしているように感じた。

2024年4月に、大学内で先輩が能登を訪れ感じたことを共有する場を開く企画も一つのきっかけとなって、のと部よこはま@明学ははじまった。能登について考えたい人が集える場としてあり続けることを大事に活動してきた。2025年9月に、集った人のうち希望者で能登を訪れた。空港に向かう前、珠洲市内の街を歩いていた時、「私はその場所において良いの?」と自分に問うた。自身が被災した場合見知らぬ人に自分の家の中を道から勝手に見られていたら嫌な気持ちになるのではないかと想像した。この問いは国際学科の「校外実習」で、自身がアメリカ先住民の土地を訪れた時に抱いていたものと重なる。

大学4年間継続してきた場づくりについて、自身が代表を務める任意団体 Peace☆Ring 主催で、2024年12月に、演劇の上演を企画したことがあった。直近の活動として12月4日に画家の山内若菜さんを国際学科野口久美子ゼミにお呼びし、公開授業と昼休みの個展を企画した。

私にとって、ボランティアとはどのような営みかを振り返った時、人と出会い、問いを抱き続ける営みではないかと考えた。自身がやりたいことをやってきたとの感覚からボランティアについて考えてみた時、人との関わりがあり、関わりの中で様々な問いが生まれ、その問いと向き合い続けていることに気付いた。

4. 今後の課題、方向性

4年間の中で生まれた問いについてこれからも考え深めていきたいと思う。特に、「語りを聴く」、そして、その場所にいる自分は一体どのような存在なのかを問い続けたいと思う。アメリカ先住民の土地を訪れてから、抱き続けている「先住民でない私が先住民の土地にいるとは」との問い、そして能登で抱いた、「自分がその場所において良いの」との問いがある。人との関わり、そして土地を訪れることで、自分が問われていく。卒業後通信制高校の教員となるため、仕事を通じての人との関わりの中で自分が問われる場面が多くあると想像する。抱いた問いに向き合い続け、その問いを誰かと共有する場を作り続けていきたいと考える。

人との関わりの中で抱き考え続けている問いについて、その時々で自分なりに問いに向き合い考えたことをはじめてその問いに触れる人に伝えるような伝え方を模索し続けたいと考える。具体的な実践の一つとして、自身が経験してきたゼミでの学びをゼミに参加していない人にも伝えるような冊子を制作したいと考えている。制作をしたいと考えた背景には、ゼミでの学びが様々なテーマに繋がる可能性を感じたことがある。

5. 私にとっての Do for Others

Others、日本語に訳すと「他者」との関わりの中で様々な問いが生まれてくる。私にとって、明治学院大学の教育理念「Do for Others」を、自分と他者との関係性について考え続け、自身の特権性についても見つめ続けることだと考える。

◆あなたと共に歩むボランティア ―様々なボランティア活動の経験を通して―

国際学部国際学科3年 芝 愛澄

1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名/活動先	活動時間
1年次	学内日本語授業ボランティア、港南国際交流ラウンジ夏休みの宿題ボランティア、外国につながる高校生のためのフリースペース、下倉田地区連合まつり、戸塚宿こんぴら市等	93時間15分
2年次	外国につながる高校生のためのフリースペース、学内日本語授業ボランティア、SAKAE スマホサポーター、ハロウィン遊山箱、学内バディ制度等	50時間45分
3年次	横浜山手中華学校演奏ボランティア	6時間
4年次		
合計時間		150時間

2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

私は大学入学後の3年間で国際交流や地域イベント、社会福祉など、様々なジャンルのボランティアに携わることができ、またそれらの活動期間も、1日単位のものや長期に渡るものまで様々だった。多様なボランティア活動を行う中で多くに共通していると感じたことは、「相手を尊重する」ことや「相手と一緒に行動する」こと、つまり「あなたと共に歩む」ことである。ここでいう「あなた」とは、ボランティアの受け入れ先で出会った方や支援対象の方のみならず、共にボランティアを行う人も含まれると考える。相手がいることで初めて、自分が携わろうとするボランティア活動の分野について理解するきっかけになり、相手が本当に求めていることに対して自分なりに行動するチャンスでもあると感じる。中でも、国際交流のボランティアや地域のお祭りボランティアなどでは、日本の文化や自分の考えを押し付けるのではなく、相手の文化や言語を尊重し理解した上で、一緒に取り組むことが必要であると感じた。この最終報告書を通して、改めて3年間のボランティア活動を振り返るとともに、私自身の今後の活動にも繋げていきたい。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

ここでは私がこれまでに参加した活動の中でも、実践と学びの結びつきという観点から特に印象的だった事例について記述する。

大学1年次の夏に参加した「夏休みの宿題ボランティア」は、「あなたと共に歩むボランティア」の面で非常に印象深く、また大学での学びと実践をより深く繋げることができた最初の活動でもあった。同ボランティアは、神奈川県港南国際交流ラウンジで2日間かけて行われた。小学生から中学生の外国に繋がりのある子どもたちを対象とし、夏休みの宿題でわからなかった部分をボランティアと一緒に取り組む、というものである。私は大学で春学期に「多文化共生入門1」という科目を履修しており、ここでは外国に繋がりのある子どもたちが外見やアイデンティティ、学習面などで不安や悩みを抱えることが少なくないことを習った。実際にこのボランティアを行うと、私が担当していた中国に繋がりのある小学生の男の子が、学習面において日本の漢字と中国の繁体字を混同してしまい難しいと話していたり、アメリカに繋がりのある中学生の女の子が、技術科の教科書の説明文に英訳をびっしりと書き込んでいたのを見た。ボランティア受け入れ先のスタッフの方から、前者の男の子について、幼少期は中国で過ごしていたため日本の昔遊びを知らないこと、他の子どもたちについても算数の九九の

覚え方や分数の読み方に苦労していることなどを教えていただいた。このように、私が大学の授業で学んだ外国に繋がりのある子どもたち特有の悩みを、この活動を通して初めて目の当たりにすることとなり、大きな発見と驚きを感じたと同時に、一人ひとりに寄り添った個別の支援の重要性を実感した。加えて、この分野についてさらに学び、自分事として考え、ボランティア活動を通して理解を深めたいと思うきっかけになった。

大学2年次に履修した「多文化共生各論3」で学んだやさしい日本語は、複数のボランティア活動に繋がる学びとなった。同じく2年次に、国際交流のボランティアとして「外国に繋がる高校生のためのフリースペース」、「学内留学生バディ制度」に参加した。前者は、前述した「夏休みの宿題ボランティア」を通して外国に繋がりのある子どもたちとさらに関わりたいと思い、後者は、留学を通して現地学生から多くのサポートを受けた経験から、今度は自分が留学生を支援したいと思い応募した。履修した大学の授業では、外国人が全員英語を話す人とは限らず、日本語を第二言語として学ぶ人も多くいることや、やさしい日本語の基本的な使い方などを学び、実践した。フリースペースのボランティアで出会った高校生たちは、ベトナム、ロシア、オーストラリア、中国などルーツは様々で、日本語が堪能な子もいれば留学生として来日している子もいたりしたが、自身の生い立ちや今勉強していること、それぞれの国の文化などについて日本語や英語、ジェスチャー、写真・動画を見せながら交流した。ベトナム出身の子は日本語を学習中とのことだったため、授業で習ったやさしい日本語での会話を実践した。「一文は短く」、「難語をできる限り使わず、わかりやすい表現に言い換える」というやさしい日本語の基本を意識しつつも実際に使用してみると、難語をかみ砕いてシンプルな表現にすることや、一文に対して伝えたいことを一つにするなど、使い方が難しいと感じる部分もあった。しかし、相手もこちら側も落ち着いてゆっくり話すことを心がけるとお互いに意思疎通でき、会話の喜びに繋がった。ロシアに繋がりのある高校生は、日本とロシアの文化的な違いや、昨今の戦争についての自身の率直な意見を話してくれたことが非常に印象的だった。留学生バディでは、もう一人のボランティアとともに、オランダ出身の留学生と昼休みなどの時間を使って英語とやさしい日本語で会話をした。また、日本での思い出作りにと、鎌倉や江ノ島水族館、東京スカイツリーへ一緒にお出かけをした。初めて留学生と出会った時は簡単な英語での会話を中心だったが、次第にやさしい日本語での会話が増え、授業で学んだことを意識しながら会話をする中で、一緒に同じ時間を楽しむことができた。「あなたと共に歩むボランティア」の観点では、授業で学んだやさしい日本語という言葉を通して、受け手や同じボランティア同士での会話が今この瞬間を大切に過ごし、次のアクションへと繋げる一歩になったと感じている。この交流を通して相手の文化や自分自身についても理解を深めるきっかけになった。

4. 今後の課題、方向性

上記のような多文化共生や国際交流での学びやボランティア活動を通して、それまで知らなかった現実や難しさ、またこの分野を深く知ることで繋がった出会いや喜びがたくさんあった。そのため、今後も1dayプログラムや長期の国際交流に関するボランティアに積極的に応募し、海外にルーツを持つ人たちとたくさん出会い、彼らが今何に困っていてどんな支援が必要なのかを自分の目で見て知り、これまでの活動での経験を生かしながら個別にサポートすることを継続的に行っていきたい。また子供たちとの関わりでは、楽しみながら日本語や日本文化を学べるよう、昔遊びを参加者とボランティアで一緒になって行ったり、算数の問題をゲーム感覚で取り組めるような環境作りなどに取り組んでいきたい。

また、私は3年間で国際交流のみならず高齢者支援や地域イベントに関するボランティアにも携わった。特に高齢の方においてはスマホボランティアでの活動を通して、学科の授業である「社会政策論」で学んだ、社会ぐるみでのケアの重要性を実感したため、今後もこうしたボランティアや地域イベントにも積極的に参加し、地元にも貢献していきたい。

5. 私にとっての Do for Others

私が考える「Do for Others（他者への貢献）」は、他者（相手）と自分という両者がいることによ

て初めて成り立つものであると考える。この教育理念は直訳すると「他者のために行動する」であるが、他者（相手）に尽くすだけでなく、他者がいるからこそ自分が行動する、行動できるものであると考えた。

私自身、この活動を行う前は、ボランティアというものは相手に何かを尽くすこと、何かを100%与えるものだと思っており、ボランティア当日は特に、他者のために尽くそう、相手のために役に立ちたいという思いが強かった。しかし実際は、思いがけないところで自分が救われる立場になることがたくさんあった。心からの感謝の言葉や差し入れを頂いた時、相手が笑顔になった瞬間など、自分が励まされ救われた瞬間や、ボランティアをして本当に良かったと感じた場面がたくさんあった。また、これらの経験や出会いが、これからの自分の将来のためになると感じた瞬間が常にあった。ボランティアは単に他者貢献、相手のために「してあげる」「やってあげる」気持ちだけでなく、相手のためでもあり、自分のためでもある活動だとわかった。「Do for Others」は、他者（相手）と自分の両者がいることで成り立ち、この理念を基にしながら、相手と自分が共に歩むことができる活動がボランティアであると私は考える。

◆青年期の発達課題を問題視しない視点 —カウンセラーとしての姿勢や態度を取り入れて—

心理学部心理学科3年 西 明日香

1. 今までに行なってきた主なボランティア実践の一覧

年次	主なボランティア活動名/活動先	活動時間
1年次	学びiプレイス（学習支援を通じた居場所支援） ただい間のおうち（不登校・引きこもり支援）	171 時間
2年次	学びiプレイス（学習支援を通じた居場所支援） ただい間のおうち（不登校・引きこもり支援）	208 時間 30 分
3年次	ただい間のおうち（不登校・引きこもり支援） 心理学習ボランティア（児童養護施設の学習支援）	37 時間
	合計時間	416 時間 30 分

2. このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学び

私は、学習支援や不登校・引きこもり支援、児童養護施設での学習支援という3つのボランティア活動に取り組んできました。いずれも、私が子どもを支援する心理専門職を志していることから、学生時代から子どもとかかわる経験を積みたいという動機から開始したものである。

テーマを考える中で、自身の抱える3つの課題に気づいた。1つ目は、子どもに問題が生じた際、すぐに解決しようと焦ってしまう点である。しかし大学での学びを通して、子ども自身が感情をコントロールする経験も成長につながると捉えられるようになり、問題に対する長期的視点の大切さを学んだ。2つ目は、精神疾患の知識をそのまま子どもに当てはめてしまう点である。精神疾患の知識は必ずしも個々人にそのまま当てはまるものではないため、知識は参考程度にとどめ子どもを一人の個人として接することが大切だと考えた。3つ目は、子どもに発生した問題の原因を、子ども自身に結び付けすぎてしまっていた点である。しかし、サティフィケート・プログラムの分科会を通して、子どもを取り巻く環境や直近の経験など、様々な要因を考慮する必要があることを学んだ。そのうえで、大学で学んだカウンセラーとしての態度や姿勢が、多角的な視点を養う上で大切であると実感した。

以上より「青年期の発達課題を問題視しない視点—カウンセラーとしての姿勢や態度を取り入れて—」をテーマとし、自身のボランティアを振り返る。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は、学習支援を通じた居場所支援「学びiプレイス」、不登校・引きこもり支援「ただい間のおうち」、児童養護施設での学習支援「心理学習ボランティア」の、3つのボランティア活動に取り組んできました。「学びiプレイス」では中高生を対象に、自主学習のサポートや進路相談を行い、「ただい間のおうち」では不登校・引きこもりの小学生～高校生やその保護者が安心して過ごせる空間を提供する活動である。「心理学習ボランティア」では、児童養護施設ベトレーム学園に在籍する小学校低学年生の学習の見守り、サポートを行う活動である。「学びiプレイス」と「ただい間のおうち」では、毎回の活動終了後にミーティングを行い、参加者の発言や様子、場全体について多角的に振り返りを行っている。

活動を通じて、子どもが抱える問題やミーティングで必要な視点について、3つの発見を得た。それぞれを大学での学びと関連付けることで、活動を振り返る。

1つ目の発見は、子どもの言動を一概に問題視しない視点の大切さである。これまでの活動の中で子どもの問題が見られた際には、解決策を求めて深く考えることが多かった。実際に「学びiプレイス」でのミーティングでは、その日の活動についての良かった点や反省点をあげ、次回以降に反省点を改善

するために何をすべきかについて話し合っている。そのため、問題をいかに改善するかを考える姿勢が自然と身についており、常に問題の改善点を見つけ出そうと心掛けていた。しかし「教育・学校心理学」という授業で、子どもをアセスメントする際には、目の前で起こっている「問題」は発達というプロセスにおける一つの通過点と捉え、そこに変化可能性を見出そうとする「発達の視点」が重要であると学んだ。また「ただい間のおうち」のミーティングでは、活動中に子どもが不快感を示した場合、単に不快感を減らすことを目指すのではなく、不快感をコントロールする力を身につけることも本人の成長として大切であるという意見が共有された。これらの経験から、子どもに生じた出来事をすべて問題として捉えるのではなく、その子なりの成長につながるものとして理解する視点を学んだ。この視点は、子どもを長期的に支援していくうえで不可欠であると気づいた。

2つ目の発見は、子どもと本人の抱える疾患とを結びつけて考えることの有効性と、子どもをあくまで一人の個人として接することが求められるという視点だ。生徒が勉強に取り組むために何ができるか、いかにして参加者が過ごしやすい環境を整えられるかを考えた際に、参加者が抱える精神疾患についての知識を活かすことができた。例えば「学びiプレイス」において、ADHDの診断を受けている生徒が、活動中で集中が続かず立ち歩いてしまったり、スマートフォンに熱中し問題の解説を聞いていないように見えたりする場面があった。その際、休憩時間をあらかじめ設定することでスマートフォンの使用にけじめをつけたり、問題の解説時に絵や図を用いて内容を視覚化したりすることで、これらの課題に対応することができた。これらは、「精神疾患とその治療」という授業で学んだ発達障害に関する知識を、実際のケースに活かすことができた一例である。しかし、疾患についての知識がすべての参加者に一律に当てはまるわけではない。大学で学んだ疾患についての知識が、活動中の子どもへの対応に活かされなかったケースも多くあった。そのため、知識は参考として頭の片隅に入れて置き、基本的には相手を一人の個人として捉えることが大切であると実感した。

3つ目の発見は、ミーティングにおいて客観的かつ多角的な視点で話し合う重要性である。ボランティア・サティフィケートの分科会において、ミーティングで子どもに発生した問題を子ども本人に結びつけすぎず、子どもを取り巻く環境や直近にあった経験など様々な観点で考えることもできることを知った。そのような客観的な視点で子どもを捉えるにあたって、「心理的アセスメント」という授業で学んだ、カウンセラーとしての態度や姿勢が役に立つと考えた。相手を読み取ろうとするのではなく、相手のことをそのまま受け入れ、自分の体験として味わう姿勢を身につけることで、相手との感覚のずれを感じ取ることができる。このずれについて吟味することで、より深い話題共有ができ新たな視点でミーティングを行うことができると学んだ。しかし、ボランティア活動において私は心理職として子どもと接しているわけではないため、支援者・被支援者ではなく一緒に何かをする仲間として子どもと接することも、上記の視点を養う上で大切であると考えた。

4. 今後の課題、方向性

4年次はもちろんのこと、大学卒業後も、私は継続してボランティア活動に取り組んでいきたいと考えている。そのうえで、大学生活で培った経験や知識をボランティア実践で活かすことができる機会があれば、積極的に活かしていきたいと考えている。しかし、自身の学びを一方的に用いるのではなく、ボランティア実践を通しての新たな気づきや課題を得ることで、自身のさらなる成長につなげていきたいと考えている。

私は将来、臨床心理士・公認心理師の資格取得を目指しており、現在は大学院進学を見据えている。大学院に進学後に学ぶであろう、より臨床的で専門性の高い知識や専門家として必要とされる姿勢は、ボランティア実践での多角的な視点を養う上でも重要であると考えている。これまで以上に相手を深く知り、受け入れようとする姿勢を身に付けることで、参加者との信頼関係をより強固なものにできると期待したい。

心理学の学問的な学習と、ボランティア実践での経験を双方に活用し、継続的に学び続ける姿勢でボランティア活動に取り組んでいきたい。

5. 私にとっての Do for Others

私にとっての「Do for Others」とは、「知識や経験を活用し、長期的で多角的な視点で相手を支えること」と考えた。

対人支援においては、なぜ相手が支援を求めているのか、どのような支援を求めているのか、支援がどのような方向に進んだらよいかなど、多くの視点で相手を知ることが大切である。そのためには長期的に相手と接し、私は相手に何をしてあげられるかを深く考え、求められている姿勢や立場に沿った支援をすることが大切であるとボランティア実践で実感した。また、活かすことができる知識や経験があれば積極的に活かすことで、支援される人にとっても支援する人にとっても相互的な成長を期待できると考えた。支援される人が支援する人から良い影響を受けるだけでなく、これまでの経験や知識の活用によって、支援する人の新たな気づきや学びにもつながることを、ボランティア実践の中で実感した。

このような経験を通して、「Do for Others」とは単に相手のために尽くすことではなく、自分の持つ経験や知識を生かすことで相互的な支援を可能とし、長期的に支援を行うことで相手のことを多角的に捉える視点を養うことであると感じた。

5. ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）

（1）総括

「ボランティアファンド学生チャレンジ（以下、ボラチャレ）」は、学生が自ら企画した5か月以上1年以内の活動を応援する奨励金制度である。ファンドとなるのは明治学院消費生活協同組合で販売している「明治学院大学ボランティアファンド支援グッズ」の売上の一部で、教育理念“Do for Others”を実現するために、大学公式グッズの購入という形を通じて社会に貢献する仕組みとなっている。

ボラチャレ 2024 の募集要項は、以下の通りである。

募集内容	テーマ：「社会課題にチャレンジ！」 社会の課題を発見し、解決のためにアクションを起こすチャレンジ精神のあるみなさんを支援します。分野は問いません。 奨励金：原則上限 20 万円
応募資格	・ 明治学院大学の学生による学生団体、ゼミ、サークル等による活動の企画であること。 ・ 個人の活動は対象外となるが、2人以上でチームを結成すれば申請できる。 ・ メンバーに卒業生や他大学生、社会人等が含まれる場合、メンバーの半数以上が本学学生であること。
助成対象期間	2024年10月1日（火）～2025年9月30日（火）
応募方法	「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ応募用紙」をメールにて提出
選考	提出書類をもとにボランティアセンターと面談
援助対象	活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など）、保険料 ※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用
活動報告/提出物	・ 中間活動報告会（2025年春学期中）にて途中経過報告を行う ・ 活動終了後、2025年11月末日までに、以下を提出 （1）奨励金使途報告書 （2）領収書等 （3）活動報告書

ボラチャレ 2024 の採用団体は4件である。

Umee Coffee は、フェアトレード・オーガニックコーヒーの販売を通じて、生産者の公正な取引を支援し、持続可能な社会について考えるきっかけを提供することを目指す団体である。SDGsをテーマとする学外イベントへの出店を通じて、フェアトレードとは何か、自分たちがどのような活動をしているのかを広く伝えるとともに、同様のテーマに取り組む他団体との情報交換や協働も積極的に行いながら、多様な視点から学ぶことを大切に活動している。

FLEUR は、経済的・家庭的な事情によって生じる子どもの体験格差という問題に焦点を当て、スポーツを通じた体験機会を提供することを目的に活動する団体である。学童や児童養護施設と連携し、子どもたちと体を動かす遊びを行うなかで、「できた!」「楽しい!」「認めてもらえた!」という経験を生み出している。温かな人との関わりや安心できるつながりこそが活動の本質であるという気づきを得ながら、プロジェクトを展開している。

Piece of Nature は、主に不登校の児童や学校に行きづらさを感じている子どもたちに、学校以外の場での体験学習の機会を提供することを目的として設立された団体である。活動は、田んぼ作業やくだもの狩りなどの自然体験を中心に、児童からの希望も取り入れながら、料理や知図

づくりなど幅広い企画を実施している。多様な居場所や体験の機会が増えることで、価値観が広がり、挑戦する気持ちが芽生えるなど、子どもたちの成長を支えている。

JUNKO Association は、1995 年から発展途上国の子どもたちの教育支援を行ってきた団体である。ベトナム語の理解が難しい山岳地帯の少数民族地域に住む子どもたちが、日常的に活字に触れる環境づくりを目指し、読書習慣の定着に取り組んできた。現地では、本を手にとることをためらう子どもたちのために、パネルシアターを用いて視覚的なサポートを加えたり、現地での活動後も読書を続けられるようなワークを準備するなど、現地の学校の先生方と検討を重ねながら取り組みを進めている。

6 月には採用団体が一堂に会し、中間報告会を実施した。そこでは活動を振り返り、専門性を持つボランティアセンター関係者（教職員）からのアドバイスを受けたり、他学生団体、一般学生との意見交換を行うなどした。各採用団体が抱える課題や苦労などをシェアする場面もあり、互いにエンカレッジしあう良い時間となった。

各団体の活動詳細は、別頁の報告書にて確認いただきたい。

ボラチャレ 2025 は、2 団体が採用を受け活動を行う予定である。

（2）助成団体一覧

2024 年度助成団体一覧（期間：2024 年 10 月～2025 年 9 月）

プロジェクト名	団体名	奨励額	使用額
人をつなぐコーヒープロジェクト	学生団体 Umee Coffee	¥199,000	¥131,435
Do for children ～子どもの未来を開くスポーツ体験～	FLEUR	¥133,000	¥0
近隣のフリースクールと連携して学校によらない体験学習の機会を作る	Piece of Nature	¥200,000	¥35,100
Reading Promotion 企画	JUNKO Association	¥200,000	¥176,270

2025 年度助成団体一覧（期間：2025 年 10 月～2026 年 9 月）

プロジェクト名	団体名	奨励額
雁皮の力で残す四万十の情景	四万十ええとこ発信隊	¥200,000
人をつなぐコーヒープロジェクト II	学生団体 Umee Coffee	¥95,000

（職員 菊池 範子）

◆人をつなぐコーヒープロジェクト

団体名	学生団体 Umee Coffee
企画の目的	フェアトレードのドリップパックを含むコーヒーの提供やフェアトレードについての情報発信を行うことで持続可能な社会について考えながら、「知るきっかけ」を提供すると同時に、フェアトレード商品を購入するという「体験」を届けることを目的とする。

1. 実施概要

- (1) SDGs 多文化 CITY カフェ 出展
(SDGs よこはま CITY プロジェクト×神奈川大学×Umee Coffee)

- ・日時：2024年10月12日(土)
- ・場所：泰生ポーチフロント

本イベントは、さまざまな分野で活動している学生や社会人と交流する機会であり地球規模の課題解決に向けたSDGsを考えるきっかけづくりを目的とした。15名ほどが参加し、フェアトレードコーヒーの提供と併せてフェアトレードをテーマとしたクイズや哲学対話を行った。哲学対話とは専門的な知識を必要とせず、日常の中で感じる哲学的な問いに対して考えを深める対話の手法だ。フェアトレードとは何か、誰のための取引なのかという問いから他団体の学生が取り組んでいる環境問題、SDGsに関係する問いまで高校生や同じ大学生と意見交換をし、学びの多い時間となった。

URL: <https://www.hamakei.com/headline/12653/>



- (2) Worn Wear College Tour 参加 (パタゴニア×Umee Coffee)

- ・日時：2024年11月6日(水)
- ・場所：明治学院大学 横浜キャンパス 5号館・クラララウンジ前

パタゴニア主催の「Worn Wear College Tour」に参加し、フェアトレードコーヒーを提供した。「Worn Wear College Tour」とは、モノを長く使うことで環境負荷を減らす取り組みだ。ツアーでは、リペアスタッフが衣類の修理を行うほか、セルフリペアやアップサイクルのワークショップも実施される。衣類の消費から生まれる環境負荷とコーヒー生産に伴う森林伐採、発生要因は違うが、同じ環境問題に対して考える場としてドリップパックコーヒーと衣服の展示、また互いの活動を紹介し合う交流が実現した。

URL: <https://mag.nagaku.com/news/2024/10/1921/>



(3) アースデイ東京 2025 出店

- ・日時： 2025年4月19日(土) / 20日(日)
- ・場所： 代々木公園イベント広場

アースデイ東京ではドリップパックコーヒーの販売を中心に、フェアトレードとは何か、自分たちがどんな活動をしているのかについて知ってもらえる機会となった。150名以上の方に来店していただき、約210個のドリップパックコーヒーを売り上げた。ブースに立ち寄り下さった方に対してはただ販売するのではなく、商品（ドリップパックコーヒー）やフェアトレードの紹介、また視覚的にも見てもらえるよう活動報告やコーヒー豆の生産方法をポスターとして掲示した。しかし、学外での大きなイベント出店は初だったため SNS での告知の仕方や現場での支払い方法の少なさ、メンバーの役割分担等の円滑さにはまだまだ課題があると感じた。今後はイベント当日までのゆとりをもったスケジュール管理の徹底、また支払い方法を増やすための Air ペイ等の導入も考えている。



2. 感想・活動を通して得た学び

本年度は、昨年度に比べて学外での活動機会が増加したことで、同様のテーマに取り組む他団体との交流が活発化し、新たなつながりを築くことができた1年となった。これらの交流を通じて、特に「フェアトレードをより多くの人に認知してもらうにはどうすればよいか」という課題に対し、さまざまな視点や実践的な取り組みを学ぶことができた。自団体で実施した焙煎工場への訪問や他団体とのフェアトレード勉強会を通じてコーヒーに関する知識を得ただけでなく、活動の幅も広がってきた。他団体との情報交換や協働により、自団体の取り組みに対する意識がさらに高まり、広報活動やイベント企画、活動を通して学んだこと（フェアトレードやコーヒーに関して）を活かした商品宣伝やお客様の目を引くようなポップや装飾の利用など商品販売の工夫に一層力を入れることができた。これにより、フェアトレードの啓発に向けた活動の質と効果を高めることができたと考えている。また、Umee Coffee は立ち上げから2年目を迎え、メンバー数も増加した。新たなメンバーの参加により、

活動の幅が広がるとともに、団体内での意見交換や役割分担も活発化し、より組織的かつ主体的な運営が可能となった。これにより、メンバー一人ひとりがそれぞれの役割を通じて濃い経験を得ることができ、団体全体としても大きく成長する1年となった。

(国際学部国際学科2年 星 美羽)

3. 今後に向けて

2024年度は、大学生協でドリップパックコーヒー1000個を完売させ、学内外のイベントにも積極的に参加した。だが、製品の販売に注力するあまり、その背景にあるフェアトレードの理念や購入する意義、(購入するとどんなメリットがあるのか等)、それに付随してコーヒー生産地や生産者が直面する社会問題、さらにコーヒーの美味しさ等の情報発信が不十分であった点は大きな課題であると考えている。学内の学生・教職員の理解を深めると同時に将来的には明治学院大学を「フェアトレード大学^{*}」とするための基盤を築くことを目的とする。学内での活動で得た経験を基に、より幅広い層に対してフェアトレードの認知を拡大し、身近な選択肢として社会に根付かせることをこれまで以上に目指す。

(国際学部国際学科3年 山口 あおい)

^{*}大学全体でフェアトレードの推進活動に取り組んでいる大学を認証するもの。日本では2014年に「フェアトレード大学」の認定制度が作られ、「一般社団法人日本フェアトレード・フォーラム」が認証機関として審査・認定を行っている。

◆Do for children～子どもの未来を開くスポーツ体験～

団体名	FLEUR
企画の目的	スポーツにおける体験格差の解消と居場所支援

1. 実施概要

近年、教員の働き方改革の流れから部活動の地域移行や廃止の動きが進んでおり、文部科学省もその方針を示している。これまで学校で行われていた部活動では比較的低負担でスポーツ体験が可能だったが、今後クラブチームへ移行することで参加費や遠征費など保護者の経済的負担が大きくなることが懸念される。その結果、経済的に厳しい家庭の子どもがスポーツを継続的に体験する機会を奪われ、将来の進路や職業選択の幅を狭める恐れがある。

私たち FLEUR は、「すべての子どもに温かく安心できる居場所と心に残る体験を届けたい」という思いから、学童や地域の子どもたちと関わる活動を続けてきた。その中で、経済的・家庭的な事情により「大人と一緒に遊ぶ」という当たり前の体験すら得られない子どもがいる現状に直面した。こうした“体験格差”は自己肯定感の形成にも大きく影響する。本企画では、学童や児童養護施設と連携し、安心できる居場所でスポーツを通じた体験機会を提供し、子どもたちの未来を支えることを目指すものである。

(1) 藤沢市内の学童

活動内容：モルック、パイプライン、9マス鬼ごっこ、風船バレー、ツイスター

対象：小学1～4年生の児童 30名程度



(2) 茅ヶ崎市内の児童養護施設

活動内容：卓球、トランポリン、9マス鬼ごっこ、かくれんぼ

対象：小学生～中学生の児童生徒 20名程度



2. 感想・活動を通して得た学び

本プロジェクトを通して、私たちは子どもたちがスポーツをきっかけに心を開き、大人や仲間との関わりを深めていく姿に触れた。その経験から、「居場所」とは単に物理的空間だけを指すのではなく、そこでの温かな人との関わりや安心できるつながりこそが本質であると学んだ。スポーツや遊びは、体を動かすだけでなく、「できた!」「楽しい!」「認めてもらえた!」という肯定的な体験を通じて、自己肯定感や安心感を育む大切な機会となる。しかし、経済的・家庭的事情により、こうした機会から取り残されてしまう子どもが少なくない現実も改めて浮き彫りになった。

また、活動するにあたって、子どもにアプローチするための新しい居場所を1からつくろうとして集客や継続性といった課題に直面したが、児童養護施設や学童など既存の団体と協働することで子どもたちの生活に根付いた形で活動を展開することができることに気づいた。

この過程を通じて、大学生という存在が地域と連携することには多面的な意義があると感じた。子どもにとっては、新しい大人と関係を築く機会となり、安心できる居場所の広がりにも繋がる。地域団体にとっては、大学生の参加が活動に新たな活気をもたらし、運営を支える力になる。そして私たち大学生自身にとっても、地域と関わる中で多くの学びを得ることができた。このように、大学生と地域の協働は、子ども・地域・大学生の三者にとって学びと成長をもたらす、意義深い取り組みであると体感した。

3. 今後に向けて

子どもたちとの関わりを通じて、大学生だからこそ提供できる関わりや居場所の重要性を学んだ。特に、経済的・家庭的事情により体験の機会が十分に得られない子どもたちの「体験格差」の存在を実感し、その影響の大きさを理解することができた。活動自体はこのプロジェクトで一区切りとなるが、この経験で得た学びや気づきを、今後それぞれが子どもと関わる際に還元し、体験格差を少しでも埋める支援につなげていきたいと考えている。また、大学生として地域と協働する中で培った主体性やボランティア意識も、将来の教育活動や子ども支援において大きな力になると感じている。

(心理学部教育発達学科3年 杉山 和香奈)

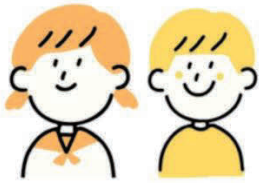
◆近隣のフリースクールと連携して学校によらない体験学習の機会を作る

団体名	Piece of Nature
企画の目的	主に不登校児童や学校に行きづらさを感じている児童に、学校によらない体験学習の機会を作る。

1. 実施概要

本プロジェクトは、本学横浜キャンパス近隣の団体と協力して、不登校児童や学校に行きづらさを感じている児童に、学校を通さなくても参加できる体験学習の機会を作ることを目的とした取り組みである。

WHO



不登校児童・学校に行きづらさを感じている子ども

WHAT



体験学習

HOW



地域団体と連携して

具体的に、月に1-2回、本学横浜キャンパス周辺で自然体験と職業体験を中心とした体験学習の企画を実施した。これらの活動を通して、児童の興味・関心を引き出す、あるいは見つけ、学習支援の次の挑戦の場にしたいという理念のもと活動を行った。

実施スケジュール

日程 (2024)	内容	日程 (2025)	内容
10/20	稲刈り	6/21	かまぼこ作り体験
11/3	脱穀	8/3	海へ行こう！
11/17	みかん狩り	8/20	知図を描こう！
12/8	餅つき	9/7	ホットケーキ作り

各活動では、児童がおよそ3-5人参加した。児童はボランティアセンターの紹介等から繋がりを得た神奈川県内のフリースクールや学習支援機関から募集した。また、活動においては、「田んぼ活動(稲刈り・脱穀)」と「餅つき」は戸塚区の舞岡公園に、「知図を描こう！」は戸塚区にある「珈琲と図書室」の協力のもと実施した。運営団体から特別な協力は得なかったが、「かまぼこ体験」は小田原市の博物館で、「海へ行こう！」は金沢区の海で実施した。

活動背景としては、代表学生が不登校を経験した際、家のみが居場所だったが、フリースクール等の不登校支援機関に通えるようになると、より広い価値観を知り、学習支援等の通常活動以上に「もっとこんなこともやってみたい」という考えを持つようになった。フリースクールには似た思いを持つ他の児童がいることに気づくと同時に、フリースクールは通常活動以上のイベントの開催ハードルが高いことに気づいた。そこで、家、フリースクール、その先の「やりたい」を実現する場所として2022年から当活動を始めた。



2. 感想・活動を通して得た学び

活動でもっとも印象に残っている出来事は、継続的に活動に参加してくれていた児童の成長の瞬間に立ち会えたことである。活動当初から、不定期で参加している児童が、最初は慣れた人がいる場合のみしか参加がなく、活動中も活発な会話は難しかった。しかし、今年は「こんなこともやりたい」と直接、言葉で伝えてくれたほか、活動中も自ら大学生の輪の中に入っていき姿を見ることができ、活動が不登校児童の成長の場になっていることを実感した。

活動を通しての反省点は、新たな挑戦を一度にしようとしてしまったことである。本活動は2022年度から開始し、初めは自然体験を中心とした活動を計画していたのに対し、2025年度はより多くの体験の場を用意したいと考えて、自然体験と職業体験の2本柱の活動を計画した。9月までの年間活動回数7回中、5回を新たな活動に入れ替えたが、実際に具体的に実施しようとする、新たな協力先を高頻度で見つけることの難しさや、当活動の不登校児童の状況を考慮して前日まで申し込み可能にしているやり方と、事前予約が必要なイベントの折り合いの悪さから、多くの活動を実現することができなかった。このことから、新たな試みをする際は、実現可能なスケジュールなのかどうかを含め、やりたいという気持ちだけが先行しないように事前にシミュレーションするべきだと学んだ。

3. 今後に向けて

今後も、従来の体験学習としての不登校支援も充実してほしいと考える。Piece of Natureは代表学生の体験をもとに活動しているため、代表学生の卒業後、必ずしもPiece of Natureとして活動が続かなくとも、この活動から不登校支援に関心を持った所属学生が、それぞれの解釈で活動を再定義し新たな活動につながってほしいと考える。その際は、ここで得た学びを次の活動に還元していきたい。

(文学部英文学科4年 渡邊 香帆)

◆Reading Promotion 企画

団体名	JUNKO Association
企画の目的	本プロジェクトは、ベトナムの山岳地帯の少数民族地域に住む子どもたちを対象とし、児童が日常的に活字に触れる基盤作りをサポートし、継続的に本への興味を惹き出し、読書習慣の定着を目指す活動である。対象校である KPA Kalong School が位置する Hiep Duc 県の少数民族地域では、Ca Dong 語という文字を持たない少数民族言語が話されており、ベトナム語の理解が難しい人々がいる。実際、2024 年度の春期短期派遣のインタビュー調査にて、Hiep Duc の政府機関や KPA Kalong School の先生方は、児童の識字能力向上のために読書の推進は必要なものであると考えていることが分かった。読書の習慣を全く持たない彼らに、読書の楽しさや面白さを長期的にアピールすることで、読書習慣を身につけ、日常的に活字に触れる機会を提供するためこの企画を遂行した。

1. 実施概要

(1)2025 年度春期ベトナム短期派遣

- ・日時：2025 年 3 月 5 日
- ・場所：KPA Kalong School main/branch 1
- ・対象者：KPA Kalong School main 生徒 43 名
KPA Kalong School branch1 生徒 41 名
- ・交流内容：
 - 1.アイスブレイク：チキンダンス
 - 2.パネルシアター：桃太郎のパネルシアターを実施
※パネルシアターとは、パネル布（毛ばだちの良い布）を貼ったボードを舞台に、P ペーパーという不織布で作った絵人形を貼ったり外したり、裏返したり、舞台のあちらこちらへ動かしながら演じる、児童文化のことである。
 - 3.グループワーク
 - ・音読
 - ・ワークシート（桃太郎のキャラクターに関する問題）
 - 4.寄付する本の紹介
 - 5.企画・本に関するアンケート

春短期派遣では、文字を読むことに対してためらいのある子どもたちが、本に手を伸ばす最初のきっかけをつくることを目的として、視覚的アプローチの一環でパネルシアターを実施した。目そして耳から情報を取り入れることで、子どもたちが直感的に物語を理解することを可能にした。さらに、本への継続的な関心を促すために、ワークシートの導入も始めた。しかし、JUNKO Association の派遣時には子どもたちの本への興味を一時的に惹き出すことができていた一方で、派遣のない期間にはその関心が薄れてしまうという課題があった。そこで、この課題を解決するために、派遣のない期間にも取り組める 6 ヶ月分のワークシートを提供し、子どもたちが継続的に本へ興味を持てるよう工夫した。また、定期的に現地の先生に進捗状況を確認することで、より確実に効果的な活動の実施につなげた。

(2)2025 年度夏期ベトナム短期派遣

- ・日時：2025 年 9 月 6 日
- ・場所：KPA Kalong School main/branch 1
- ・対象者：KPA Kalong School main 生徒 43 名
KPA Kalong School branch1 生徒 41 名
- ・交流内容：
 - 1.アイスブレイク：ドラえもん盆踊りの実施

2. パネルシアター：ドラえもんの漫画を題材にしたパネルシアターを実施

3. グループワーク

・音読

・ワークシート（読書スタンプラリーの体験）

※読書スタンプラリーとは、本を読んだあとに、その本の題名などをワークシートに書いて先生に提出すると、先生からシールがもらえ、もらったシールは専用の台紙に貼って集めていくという仕組みのアクティビティである。

4. 寄付する本の紹介

5. 企画・本に関するアンケート

夏短期派遣では、現地の先生方とのミーティング結果を反映させ、ベトナムの子どもたちにも人気というドラえもんを題材にしたパネルシアターを行った。もともと知っている物語を題材とすることでより本への興味を惹き出すことへと導いた。今回は読書スタンプラリーを導入したことで、子どもたちは「本を読み終えた」という達成感や努力が形になる喜びを感じることができ、読書に対する意欲や楽しさを自然と学ぶことができたといえる。



2. 感想・活動を通して得た学び

パネルシアターの実施、ワークシート・読書スタンプラリーの導入を行ったことで、識字率の低い子どもたちが本へと興味を持つきっかけを提供することができた。実際、Hiep Duc 政府機関とのミーティングでは Reading Promotion 企画の効果を感じたといった趣旨のお話を伺うことができ、目標に向けて一歩前進できたような実感が得られた。この本への興味が識字率向上へとつながることを期待したい。

3. 今後に向けて

これまでの活動では、対象校の子どもたちが本に興味を持ち、自分から本に手が伸びるような環境を形成するために行ってきた。2025 年度夏期短期派遣では、ドラえもんという親しみやすい題材のパネルシアターを行うことで、本を読むことに抵抗があった子どもが少しでも積極的に読書できるルール引きのような企画を行った。また、読書スタンプラリーを実施したことで、ただ本を読むだけでは得ることができなかった達成感という感情が子どもたちの中に生まれた。このような過程を得て、今後は対象校において本を読む環境整備を目的に図書館開校を目指して活動していく予定である。対象校には子どもたちが自由に本を借りることができる仕組みがなく、またリラックスして本を読むことができるスペースも確保されていない。私たちがそのような場所を提供することによって、子どもたちが気楽にそして楽しく読書することができる環境づくりに努めていきたい。



(国際学部国際学科2年 相澤 ゆき乃)

6. いつでもボランティアチャレンジ（通称：いつボラ）

（1）総括

「いつでもボランティアチャレンジ（以下、いつボラ）」は、本学の在学生・教職員が自ら企画したボランティア（社会貢献）を実践したいと思った「その時」に申請できる奨励金制度である。年度内のいつでも申請ができ、ボランティアセンターの職員（含むボランティアコーディネーター）が面談を実施し、プロジェクトの採用可否を判断する。

募集要項は、以下の通りである。

テーマ	「社会課題への第一歩」 社会課題を発見し、解決のためにアクションを起こすきっかけとなるプロジェクトを支援します。これまで活動実績がないスタートアップ要素の強い取組や、単発の企画を歓迎します。
奨励金	個人：上限 20,000 円 団体：上限 50,000 円 ※減額して採用となる場合があります。 ※採択金額に未使用金が生じた場合は、未使用金額を返還する必要があります。
応募資格	・本学に在籍する学部生・大学院生・教職員（非常勤も可）が、一人、または複数メンバーで実施するプロジェクトであること。 ・活動開始から活動終了まで3ヶ月以内で完了するプロジェクトであること。 ・個人または団体の採用回数が、1年度で2回を超えないこと。 ・授業の成績・評価につながる活動ではないこと。
応募方法	「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」をボランティアセンターメールアドレス宛に提出
選考方法	応募書類（「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」）をもとに、面談（45分程度）を実施
援助対象	活動現場までの交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など） ※次の項目を除く：人件費（プロジェクトメンバー自身の給料やアルバイト雇用等）、会議会合費（「食」等をテーマとし飲食がプロジェクト遂行上必要な場合は使用可）、機器やアプリケーション購入費（パソコン、タブレット、プロジェクター、ビデオなど）、寄付に該当するもの

2025年度は17件の申請があり、いずれも採用となった。応募内容や活動場所も多岐に渡り、昨年から継続して能登半島地震の復興支援に取り組むものや、外国にルーツを持つ子どもとの交流会といった地域との企画、申請者自身の育った環境や学部での学びを通して障害や貧困、環境を切り口に学内でのワークショップや映画上映も多く実施した。

本制度はスタートアップの要素が強いが、同じ志をもつ学生同士で団体を立ち上げたり、過去に本制度を利用した先輩・友人の紹介で申請に至るケースもあり、これまでの学生たちのつながりから、新たな取り組みが生み出される様子を間近に感じた1年となった。団体内外での調整等、学生たちは当初慣れない様子だったものの、活動を終える頃には円滑にこなせるようになり、さらなる目標を持ち次に進もうとする様子には頼もしさを感じている。採用団体としての活動を終えた後も、申請時に掲げた社会課題に何らかの形で関わりを持ち続けてくれることを期待しつつ、ボランティアセンターとしてもこれをサポートできる環境づくりや伴走のあり方を考えていくこともまた、継続的な課題である。

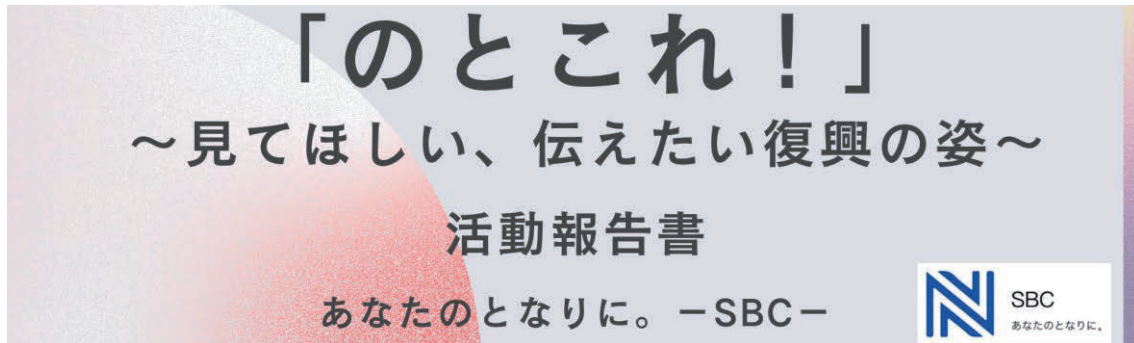
（職員 杉山 佳奈）

(2) 2025年度助成企画一覧

応募日	実施日	プロジェクト名	決定額	使用額	申請者（団体の場合は団体名）
2025年 4月18日	2025年 5月24日～ 25日	「のとこれ！」～見てほしい、伝えたい復興の姿～	¥50,000	¥43,120	あなたのとなりに。-SBC-
2025年 5月16日	2025年 5月26日～ 6月27日	にじいろシネマ	¥50,000	¥28,780	Colorful
2025年 6月6日	2025年 6月9日～ 7月11日	着なくなった服で1日 POP-UP イベント	¥28,000	¥13,968	グローバルシチズンシップ 2025
2025年 6月12日	2025年 6月16日～ 7月13日	平和をつなぐまちあるき プロジェクト	¥13,000	¥7,893	平和をつなぐまちあるきプロジェクト 実行委員
2025年 6月25日	2025年 8月21日～ 8月25日	明学×能登つなぐプロジェクト	¥50,000	¥22,048	あなたのとなりに。-SBC-
2025年 7月1日	2025年 8月26日	中国と日本をつなぐ音の 輪プロジェクト	¥50,000	¥50,000	愛好会吹奏楽部
2025年 7月18日	2025年 9月8日～ 12月13日	車椅子ユーザーなどが安心して渡韓できるバリアフリーマップを作ろう！	¥50,000	¥25,722	JMR (japan movement travel)
2025年 7月18日	2025年 10月22日	MEETS-映画『オレンジ・ランプ』上映会-	¥50,000	¥50,000	金ゼミ OBOG 会
2025年 7月31日	2025年 8月15日～ 8月23日	四万十町 雁皮紙再生プロジェクト②	¥50,000	¥50,000	四万十ええとこ発信隊
2025年 9月24日	2025年 10月23日	アートドキュメンタリー『Listen』上映会	¥20,000	¥20,000	伊地知 芽都 (個人申請)
2025年 9月25日	2025年 11月12日	「ろう者と一緒に異文化に触れてみよう」～「声」に頼らず「みる」コミュニケーションの体験と対話～	¥34,000	¥29,510	NVD-Lab (Non-Verbal Dialogue Lab For Deaf & hearing)
2025年 9月27日	2025年 10月24日	若者支援カフェを作ろう！	¥18,000	¥8,773	居場所カフエ scharff

6. いつでもボランティアチャレンジ

2025年 10月16日	2026年 1月9日	カンボジアへの寄付①	¥5,000	¥5,000	Hugseed
2025年 11月12日	2026年 1月27日	いけばな教室－日本の伝統文化を知ろう！－	¥50,000	¥47,361	いけばなプロジェクト
2025年 11月12日	2025年 12月22日	ようこそ、ステキなラップの沼へ	¥20,000	¥20,000	ラップワークショップ実行委員会
2025年 12月16日	2026年 1月21日	カンボジアへの寄付②	¥19,000	¥19,000	Hugseed
2026年 1月27日	2026年 1月30日～ 2月26日	能登とつながるパンフレット	¥25,000	¥24,730	のと部よこはま @明学



【実施概要】

第 28 回明治学院大学戸塚まつりにて能登半島地震と明治学院大学の学生の能登半島地震ボランティア活動に関するパネル展示を実施した。

○実施日：2025 年 5 月 24 日(土)、25 日(日)

○実施場所：横浜キャンパス 10 号館 1 階

【企画の背景、内容】

○背景

本展示を企画した SBC は夏季能登半島地震復興支援ボランティア参加者を中心に 2024 年 12 月に設立した学生団体である。3 月にはメンバー 10 名で能登半島ボランティア活動を実施した。本企画では戸塚まつりにてパネル展示を行った。出展の背景として、2024 年の元旦に発災した能登半島地震の風化が進んでいることがある。戸塚まつりは学内だけでなく学外の来場者も多いため、学外の人に能登半島について、明治学院大学の学生によるボランティア活動についての周知を広め、ボランティアの輪を広げていくことを目的として企画した。

○内容

展示内容は、能登半島の魅力である特産品や文化の紹介、学生が行った支援の紹介である。A1 サイズのパネルで能登半島について、時系列にまとめた活動内容について紹介した。パネルに加えて A4 サイズのアルバムを作成し、会場内の机に設置した。アルバムは能登半島地震復興支援ボランティア夏季（第 1 クール、第 2 クール）・冬季（第 3 クール）、SBC 訪問分の計 4 冊を活動内容と場所、学生の所感、活動場所についての説明、現地で聞いた人々の声など写真を含めて作成した。加えて活動写真、「SBC メンバーと話そう」コーナーを設置し来場者と SBC メンバーが対話する場を設けた。当日は来場者が静かに展示を見るだけでなく、メンバーが話しかけ、活動のエピソードや来場者からの質問に答えるなど双方のやり取りが生まれることを心がけた。

また、夏季・冬季能登半島地震復興支援ボランティアの活動を記録したボランティアセンターの田中コーディネーター制作の映像を上映した。

当日までの準備として、主にパネルデータ、アルバム作成を行った。



写真左：A1 パネル 右：A4 アルバム

【企画を振り返って】

以下は戸塚まつり終了後に SBC メンバーに展示会の所感について聞いた内容を元に作成した。

来場者からは能登半島の現在について「夏まで瓦礫が残っていたなんて知らなかった」など、すでに復興がかなり進んでいると思っていたと驚きの声が多く聞かれた。また、輪島塗洗浄作業や仮設住宅での傾聴ボランティアなどの活動について、災害支援ボランティアは土砂の片づけやがれき撤去等の肉体労働のみだと思っていたとの声があった。このことから、やはり能登半島地震についての風化が進んでおり、積極的に関わっている人とそうでない人との間で認識にかなり相違があると感じた。今回の企画では学内の教職員は来場していたものの学生の来場は少なかった。しかし災害ボランティアに興味を持つ他大学の学生や東日本大震災のバックグラウンドがある（岩手県など東北地方出身の震災を経験した親世代の方や、親戚が東北に住んでおり震災に関心がある）学生が来場していたことから、今後はより多くの学生に能登半島でのボランティアについて伝えていく必要があると考える。そのため、今後は SBC として引き続き能登半島での活動、明治学院大学内の能登半島地震復興支援に携わる学生団体との連携も図っていきたい。



写真左：映像上映の様子 中央：来場者との会話の様子 右：SBC メンバーと話そうブースの様子

にじいろシネマ

団体名：明治学院大学 COLORFUL
 実施タイトル：「にじいろシネマ」
 活動実施日 2025年6月28日
 活動場所 明治学院大学白金キャンパス
 1101教室

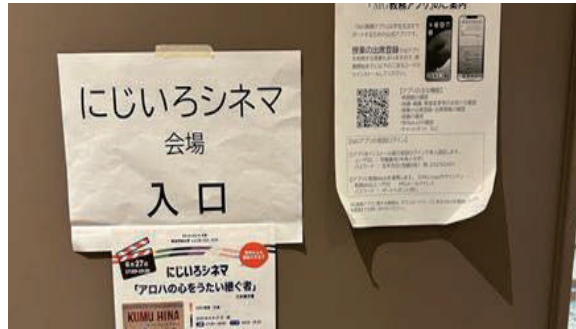
活動内容

企画の目的と背景 近年、日本においても LGBTQ、いわゆる性的マイノリティの方々にスポットライトが当てられるようになり、個人の在り方を尊重する社会へと少しずつ変化が見られるようになってきました。本学においても、ジェンダーや性的指向に関わらず、誰もが安心して過ごせる環境をつくりたいという思いから、LGBTQ 当事者やこのテーマに関心を持つ学生が集まる非公認サークル「colorful」が昨年発足しました。非公認ながらも、学生同士のつながりや理解を深める場として活動が続いています。本企画は、2025年6月に本学で開催された「レインボーフェス 2025」の締めくくりとして実施されました。

実施内容

当日は、開会に先立ち、学長よりいただいた「レインボーフェス 2025」および本企画に対する応援の言葉の代読がありました。続いて、ドキュメンタリー作品『アロハの心をうたい継ぐ者 (KUMU HINA)』を上映しました。この作品は制作会社から無料使用の許可をいただき、関西クィア映画祭より日本語字幕提供をいただいたものです。上映後には、本学の卒業生であり、レズビアンであること公表している、LGBT 法連合会参事の西山朗様をゲストに迎え、ボランティアセンターの砂川コーディネーターとともにトークセッションを実施しました。ゲストご自身の体験や映画に対する感想、在学生へのメッセージなど、多

角的な視点から語っていただく貴重な機会となりました。



上映映画 KUMUHINA について

あらすじ：ハワイ文化において存在してきた、女性・男性両方の性別を生きる / その間の性別を生きる「マフー」として、ネイティブ・ハワイアンとしてハワイ文化を子供たちに伝える先生として生きる「KUMUHINA(ヒナ先生)」に密着したドキュメンタリー。

活動を通して得た学び

イベント本番では、司会進行を担当し、参加者が安心して過ごせる雰囲気づくりに努めました。また、映画の選定やトークセッションの企画、会場設営にも携わる中で、LGBTQ に関する課題をどう提起し、正しい情報や多様な価値観をどのように伝えるかを深く考える機会となりました。鑑賞後のアンケートでは「多文化における LGBTQ の在り方を知る事で日本について考えるきっかけになった」、「学内の他のイベントにも参加してみたい」などのポジティブな感想が多く、colorful の活動が周囲に小さな変化をもたらしたという手応えも感じられました。一方で、準備段階に関わったメンバーが限られており、内部の連携に課題が残った点は今後の改善点です。

今回の学びと経験を、今後の活動の糧にしていきたいです。

いつでもボランティアチャレンジ報告書

プロジェクト名：「着なくなった服で 1 日 POP-UP イベント」

団体名：グローバルシズンシップ 2025

活動実施日：2025 年 7 月 11 日（金）

活動実施場所：

明治学院大学パレットゾーン 2 階「さん・サン」

【活動内容】

● 背景と目的

「ファッション」は大学生である私たちにとって日常的に注目度が高く、身近なものである。しかしファッション業界が社会に及ぼしている影響やサステナブルファッションについて関心を持つ若い世代はそう多くない。現在、日本の若者を中心にファッション消費が加速する一方で、衣類の大量廃棄や環境負荷といった課題が深刻化している。そうした中で、大学生が気軽に参加できる体験型の取り組みを通じて、持続可能な消費行動への関心を高めることが求められている。そこで、「服を介して学生同士の交流を生み出すとともに、社会課題へのアプローチを考えながら持続可能な消費を実現する。」という目的のもと、「着なくなった服で 1 日 POP-UP イベント」を実施した。

● 実施内容

学生から不要になった服を事前に集め、無料で提供するフリーマーケット形式のイベントとして開催された。まず、事前の服回収は、白金キャンパスで 3 回、横浜キャンパスで 1 回の計 4 回実施した。服回収では対面での回収とボックス回収を併用して開催した。服回収にあたり、学内でのポスター掲示や Instagram・TikTok をはじめとする SNS 運用に力を入れ、広報面に力を入れた。その後も個人的な回収や声掛けを続け、最終的に男女・季節問わず 108 着のアイテムが集まった。イベント当日は学内回収で集まった服を展示し、参加者が自由に選んで持ち帰ることで、衣類のリユースを促進することを目指した。開催時間に合わせて多くの方に足を運んでいただき、昼休みの短い開催時間にもかかわらず、53 名の方が来場していただき、盛況となった。併せて、サステナブルファッションの現状や課題についての展示やチラシ配布を行い、環境負荷や大量廃棄の問題について啓発した。内容としてサステナブルファッションの現状や課題について、「Who」「What」「When」「Where」「Why」という項目別で問題提起を行った。自分たちのファッションに関する購買や廃棄が世界中でどのような影響を与えているのか、自分たちにできることは何かといった観点から展示を行った。また、オリジナルデザインのショッパーやステッカー、チラシを配布し、イベント後もサステナビリティを意識し続けてもらう工夫を施した。

● 活動で工夫した点/苦労した点

活動において工夫した点は大きく 2 点あり、1 つがオリジナルショッパーとステッカーの作成である。イベントの広報と来場者へのアプローチを強化するため、来場特典として制作した。サステナブルファッションへの思いを、イベント当日だけでなく日常生活の中でも意識してもらうことを狙った取り組みである。デザインには「一着一着の服には物語があり、再び循環させることで新たな意味を生み出せる」というメッセージを込め、参加のきっかけづくりも意識した。スマートフォンや PC に貼りやすいサイズのステッカーは特に好評で、「かわいい」「もっと欲しい」といった声も寄せられ、集客にもつながった。また当日の掲示物だけでなく、サステナブルファッションの現状の課題や取り組みの意義についてまとめたチラシを配布した。服を手渡す際にチラシを同封することで、単に“無料でもらえる”

ができた。

⑦ 活動を通して得た学び

自分が思いをもって活動をするときに、やりたいと思ったことを分かりやすく伝えられる形にして、関係する団体や大人の方たちに協力やアドバイスを求めると手助けしてくれる方が多くいるということを知った。また、一つの社会課題や問題に対してでも活動している方々がたくさんいるということも知れた。

自分自身たちだけで完璧にできなくても、まずは、自分の想いや実現したいかたちを詳細に想像して、それを実現するために必要な知識であったり、協力してほしい人に、積極的にアプローチしてみると、思いのほか協力してくれたり、うまくいくこともあるのだということを知った。まずは、思いを持つこと、そして行動することが大事であるということを知ることができた。



2025年7月13日



明学×能登 つなぐプロジェクト

あなたのとりに。-Stand By the Community.- (略：SBC)

実施日 2025年8月21日(木)～25日(月)

活動場所 石川県能登半島

活動内容

- 21日：岩井戸公民館でのサロン活動、「まちなか鳳雛塾」の訪問
- 22日：ささゆり児童館、なごみ(縁日企画)、能登町でのワークショップへの参加
- 23日：能登観光、輪島大祭 神輿の担ぎ手、にわか祭の参加
- 24日：穴水町・千手院の清掃作業
- 25日：萬年寺 肥料植え、能登島・珠洲市の訪問

本団体は「明学×地域×能登」をつなぐ活動を目的に、2024年の12月に発足した。今年の3月に復興支援ボランティアとして能登半島を訪れ、そこでの活動を活かした報告会や戸塚まつりでの物産展、パネル展示等の活動を行ってきた。今回の訪問では、未だ支援を必要とする能登半島の関係人口の増加、そして継続的な活動の基盤を作ることが目的とし、新たに加わったメンバーを含めた16人で訪問した。

今回の活動ではメンバーを3つの班に分け、自分たちで企画の考案や当日の進行等を行った。岩井戸公民館でのサロン活動では、折り染めのうちわ作りや昭和歌謡曲のクイズを行った。活動の最後には「上を向いて歩こう」を参加者全員で歌い、楽しんでもらうことができた。ささゆり児童館やなごみではマグネットづくりや子ども縁日など、子どもたちとの交流を行った。

3日目の輪島大祭は神輿の担ぎ手として全員で参加し、地域で根付いてきた「祭り文化」が持つ大きな力を肌で感じる事ができた。また、前回訪れた能登島や萬年寺に加え、穴水町や珠洲市を新たに訪問し、被災地の現状を直接目にする事で自分たちができる活動について改めて考える機会となった。



～中国と日本をつなぐ音の輪プロジェクト～

明治学院大学愛好会吹奏楽部

【活動実施日】2025年8月26日（火）8:30-16:00（交流 10:00-15:00）

【活動実施場所】学校法人横浜山手中華学校 体育館



【活動内容】

私たち愛好会吹奏楽部は、音楽の魅力を広めることを目的に活動しており、その一環として「自分たちの音楽を子どもたちに届けたい」「音楽を通じて異文化に触れたい」という思いから、昨年度に引き続き、中華学校でのボランティア演奏を企画した。そして多様な背景を持つ小学生にとって普段の学校生活では体験しにくい「異文化交流」の場を提供することを一つの到達地点として掲げた。

当日の企画にあたっては、単なる演奏披露ではなく、児童が主体的に参加できる内容を工夫した。例えば吹奏楽部のみの演奏に加え、児童と共にアンサンブルを行い、手作りしてもらったマラカスを使った簡単なダンスを取り入れながら、音楽を「聴く」だけでなく「一緒に楽しむ」体験を実現した。

実施に至るまでには、小学生にとって分かりやすく参加しやすいプログラムを目指し、部員同士で話し合いを重ねた。こうした取り組みは、交流を深めるとともに部員自身の成長にもつながり、音楽を社会に還元する意義を考える契機となった。

【活動を通して得た学び】

今回の活動では、小学生が積極的に音楽に参加し、演奏を通じて交流を深めるという目的を達成できた。そして児童がリズムに合わせて体を動かす姿から、音楽が言葉を越えて心に届く力を実感した。

一方で、子どもたちが全員楽しめるような工夫を考えることは容易でなく、準備段階で多くの試行錯誤を要した。ただ成果としては、演奏技術の向上以上に「相手の立場で考える姿勢」を学べたことが大きい。今回の経験を踏まえたうえで、今後は交流型の活動をより継続的かつ幅広い形で展開する方法を探りながら、活動の場を増やしていきたい。



子どもたちにダンスを教えている様子



今年はアンサンブルグループごとにレクも！



♪アンサンブル発表会♪

車椅子ユーザーなどが安心して渡韓できるバリアフリーマップを作ろう!

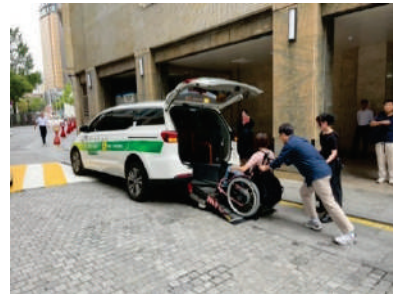
団体名：JMR(Japan Movement Travel)

活動目的・内容

本プロジェクトでは、社会構造の中で生じる不利益が障害のある人にとっていかなる負担が生じているのか検討することを目的としている。交通機関のバリアフリーが整備されていないことで、車椅子ユーザーなど移動に不安を抱えた方達が、社会構造の中で生じている抑圧を経験する可能性がある。それを個人の経済的負担で解決してしまうことで抑圧を不可視化してしまう可能性や、無意識に排除の再生産に加担してしまうリスクが考えられる。大学のボランティアセンターの制度を活用しての現地調査を踏まえバリアフリーマップを作成して学外に発信し、より多くの世代が障害や持病の有無を問わず安心して渡韓できるような社会の創出に寄与したいと考えた。

活動概要

活動実施日 2025年9月8日～9月12日
 活動実施場所 韓国ソウル市内
 活動メンバー 韓国フィールドスタディ履修者8名
 (社会学部社会福祉学科3年)



韓国の障害者コールタクシー
 車椅子のまま乗車ができ、パスポートを見せれば海外からの旅行者も利用が可能

プロジェクトの経緯・背景

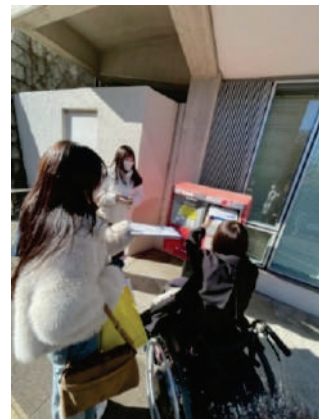
韓国フィールドスタディでの事前学習を通して、身体的な障害を抱えている場合、韓国は日本よりバリアフリーの面に課題があり、「移動権」の保障が十分とはいえない状況であることを知った。車椅子利用の学生と現地での移動方法を検討した結果、タクシーを利用する必要があった。そこでこれを機にバリアフリーマップを作成して、渡韓を考えている人たちににとっての有用なツールとすることができればと考え、今回のプロジェクト申請に至った。

現地での調査結果

現地では車椅子に乗ったまま利用できることが特徴の「障害者コールタクシー」、専用のアプリを使い配車できる背の高い「ベンティタクシー」、そして地下鉄を利用した。韓国ではこれ以外にバスも多くの市民に利用されているが、混雑と車椅子対応の車両が多くなかったことを踏まえ、今回車椅子での利用は見送った。特に障害者コールタクシーについては事前学習も踏まえ配車までに多くの時間を要することを憂慮していたが、今回の滞在期間中は30分ほどの待ち時間でスムーズに乗車できた。一方で地下鉄移動にはまだ課題が残っており、駅員によるサポートはあるものの依頼する際に使用できるのは周囲を見た限り音声言語のみだったため言語的制約があり今回は利用できなかった。そのため車椅子ごと地下鉄に乗車する場合は総重量80kg程度と予想される本体を3～4人がかりで持ち上げる必要があった。

帰国後の取り組み

現地で撮影した写真も使用し、調査結果をバリアフリーマップとしてまとめた。完成したバリアフリーマップは電子コードにし、文書に添えて当事者を主体として運営する団体（自立生活センター等）や航空系特例子会社、全国社会福祉協議会、車椅子を使用している学生の母校など約30箇所に向けて発送を行った。また国際郵便等の複雑な手続きが必要となる関係上、フィールドスタディで訪問した韓国の団体等にはメールで同じものを送信した。また、背景や現地調査の結果、考察、展望をまとめ、代表して3名で2025年12月に行われた社会学部学内学会研究発表会で報告を行った。



今後の課題と活動から得た学び

韓国はキャッシュレス決済（主にクレジットカード）が浸透しており、「いつでもボランティアチャレンジ」の規定である現金決済を意識することが想定以上に困難であった。実際に現地でもカードで決済してしまい一部が自己負担に変更されてしまったため、後輩に受け継いでいく課題として位置付けることとした。しかしそれ以上にポジティブな学びも多くあり、5日間の現地調査を通してバリアフリーの重要性を再認識できたことはもちろん、日本に帰国後も「この場所はバリアフリーか」という視点で交通機関やお店などを見ることが可能になった。また現地のタクシードライバーの方などの温かい対応やプロジェクトメンバー同士での助け合いを通して、物理面だけではなく心理的な所謂「心のバリアフリー」の重要性も実感することができたと考えている。



上から

- ・韓国の地下鉄の拡幅改札口
- ・作成したバリアフリーマップ発送の様子
- ・バリアフリーマップの電子コード

プロジェクトメンバーそれぞれの学び

- ・障害者コールタクシーを始めとする対応して下さった方達が慣れた手つきで補助をしてくださった。「あるけど不便」という点が多かった。申請書などの準備には早め早めの行動を心がけた方が良い。
- ・車椅子利用を想定されていないが実はバリアとなる場所が多く存在していることを学んだ。韓国の気候への配慮がバリアに繋がっているケースもあるため、ジレンマがあると感じた。写真を沢山撮っておくと便利。
- ・障害者コールタクシーは思いのほか利用しやすかったもののその分地下鉄やバスは利用しにくいいため、利用者がタクシーに集中してしまうのではないかと。領収書をもらえない場合もあるので何かしらの記録を残すと良い。
- ・通勤時間帯のバスは混んでいて利用が難しい。バリアフリーは少なくとも進んでいる印象だが、実際に使っていると不十分な点が多いため当事者視点で整備が必要。
- ・地下鉄が日本と違って数字表記で分かりやすい。電車とホームの間が広く全員にとって危険と感じた。大きな段差が多くあり、自動ドアが圧倒的に少なく手動での開け閉めが必要だった。

四万十町雁皮紙再生プロジェクト 2

四万十ええとこ発信隊

文学部芸術学科 4年 田畑宏基

法学部消費情報環境法学科 3年 竹内聡汰

【活動概要】

「雁皮(ガンピ)」はジンチョウゲ科ガンピ属の落葉低木で、高さ1.5~2mほどに成長し、主に四国や九州の山地に自生しています。樹皮繊維が極めて細かいため、古来より高級和紙の原料として用いられてきましたが、人工栽培が難しく、現在でも自生種の採取に依存しています。四万十川流域でもかつて盛んに利用されましたが、戦後の植林政策や生活様式の変化により衰退しました。

近年、町内ではNPO法人朝霧森林倶楽部が中心となり、再び雁皮の栽培・活用が進められています。本プロジェクトはその活動に参加し、自生地や栽培地の見学、採集・皮剥ぎといった工程の体験を通じて、素材の特性と課題を学んでいます。2025年3月には定植作業を行い、地域住民や関係者との意見交換会を実施し、「記憶を未来へ残す媒体」としての雁皮紙の可能性について議論しました。今回の活動では、高知県での採取・皮剥ぎ体験、岡山県での比較調査、さらに地域活性化に携わる方々へのヒアリングを通じて、雁皮紙の活用の方向性を多角的に検討することができました。

◎活動日時:2025/08/15~2025/08/23

◎活動場所:高知県四万十町、岡山県玉野市、岡山県瀬戸内市

【雁皮の採集・加工体験】

○採取(8月19日・ご成婚の森)

急斜面に自生する雁皮を採集しました。幹を伐採後、切断面に薬剤を塗布し、資源を持続的に利用するための手入れを施しました。強い日差しと不安定な足場での作業は体力を大きく消耗させ、雁皮が「容易には得られない素材」であることを実感しました。この経験を通じ、雁皮紙の希少性は自然条件だけでなく、人の手による丁寧な管理と労力の積み重ねによって支えられていることを学びました。

○皮剥ぎ(8月20日・東又小学校)

蒸した幹に切れ目を入れ、外皮を慎重に剥ぎ取りました。外の黒皮が残ると品質が低下するため、内皮だけを分離する繊細な作業が求められました。その後、天日干しを行い、保存に適した状態としました。こうした工程を通じ、和紙づくりは初期段階から高度な技術と忍耐を要することを理解しました。紙一枚が生み出されるまでに込められた労力を身体的に体感できたことは、雁皮紙を「記憶を未来へ残す媒体」として捉えるうえで、その重みを実感する貴重な機会となりました。

【地域活性化の視点から見た雁皮活用ヒアリング】

(8月19日・大正町内)

ヒアリングでは、地域活性化に向けた多様な実践と、その背景にある視点を学ぶことができました。

大正駅前でゲストハウスを運営する小野さんからは、高校生と連携した駅前マルシェや通路を活用した美術展示、カードラリーの取り組みをご紹介いただきました。これらは単なるイベントではなく、人々に「まちなかを歩く理由」を与え、駅前空間を交流や学びの場へと転換する実践であり、大正地区での雁皮紙展示やワークショップの構想にも有益な示唆を与えるものでした。

【雁皮採取↑】



【雁皮皮剥き↑】



また、四万十町役場大正地域振興局の北村局長からは、熊野神社で四万十高校と協働して行う音楽イベント「神ジャズ」や、「大正浪漫実行会」による駅を舞台とした秋のひな祭りについて伺いました。これらは娯楽にとどまらず、地域住民が自らの文化を再発見する契機となっており、地域に根ざした文化活動の力を改めて実感しました。

さらに、四万十町地域おこし協力隊員の立岡さんからは、隊員として発行している「下津井だより」に込められた思いを伺いました。「紙であるからこそ、丁寧に読まれ、残される」という言葉は、雁皮紙の活用意義と深く響き合うものでした。デジタル化が進む現代において、紙媒体の「記録性」や「残存性」の価値を再評価することは、雁皮紙を「記憶を未来へ残す媒体」として位置づける本プロジェクトともリンクするものといえます。

【岡山での調査】

○山火事後の雁皮観察(8月22日・児島半島)

岡山県玉野市の雁皮自生地を訪れ、3月の山火事後から再生した雁皮の群生を観察しました。母木が焼失しても根から再生する姿に触れ、雁皮の強さを感じることができました。この生命力は単なる植物学的特徴にとどまらず、「存亡の危機にあってもなお立ち上がり、記憶を未来へとつなぐ」象徴性を備えているように思われました。

○長島雁皮観察/ハンセン病学習(8月22日・長島愛生園)

続いて、瀬戸内市邑久町の「国立療養所長島愛生園」を訪れました。同園は日本初の国立ハンセン病療養所として1930年に開園しました。園内を散策したところ、かつて雁皮が採取されていたという証言の通り、複数の自生を確認できました。四万十町以外で雁皮を見るのは初めてで、新鮮な発見となりました。

また、現地ではハンセン病患者の歴史と「記憶の伝承」の課題について伺う機会を得ました。ある入所者の方は、断種されたハンセン病患者の記憶は高齢化によって消えようとしているとも語られました。この言葉は、当事者不在によって記憶が失われていく現実を突きつけるものであり、その重みを強く感じました。こうしたなかで、雁皮紙を「記憶を残す素材」として活用し、途絶しかけた語りを記録にとどめようとする試みも始まっています。これは今後の本プロジェクトとも深く関わる重要な視点であり、大きな示唆を得ることができました。

四万十での活動と岡山での事例を比較することで、雁皮は単なる紙の原料にとどまらず、「歴史・記憶・語り」を未来へ手渡す装置としての可能性を強く感じました。

【山火事後の雁皮↑】



【長島の雁皮↑】

【活動を通じた学びと今後の展望】

今回の活動を通じ、私は雁皮を単なる製紙原料ではなく、「歴史や記憶を未来へとつなぐ装置」として捉えることの重要性を学びました。急斜面での採集や皮剥ぎの体験を通じて、その一枚の紙の背後にある希少性と労苦を身体的に理解できたことは、大きな学びとなりました。また、地域の方々へのヒアリングから、雁皮紙が「読まれ、残される」媒体として、デジタル情報が失われやすい時代において特別な価値を持つことを再認識しました。

さらに岡山での調査では、ハンセン病の語り部活動において「断種によって次世代に語り継ぐことができない」という言葉に出会いました。二世三世へ継承できる記憶とは異なり、伝承主体そのものが失われる危機に直面している現実には、強い衝撃を与えるものでした。その中で雁皮紙に記録を残そうとする営みは、文化財的意義を超え、人権や歴史の尊厳を未来へ託す試みであることを実感しました。

今後は、四万十町において雁皮紙を用いた展示やワークショップを展開し、地域住民と来訪者が歴史や文化に触れ合える場を創出したいと考えています。岡山での知見も生かしながら、雁皮を「記憶を可視化し、共有する資源」として多角的に活用していくことが、次なる展望です。



(上映前の様子)



Meiji Gakuin University
Volunteer Center
本プロジェクトは「明治学院大学ボランティアセンター」の裏援を受けています。



ろう者の監督が制作！

映画作品上映会のお知らせ

■上映作品

『LISTEN リッスン』(2016) 共同監督 牧原依里・平境 (DAKEI)

「ろう者の音楽はあるのか？」
という問いを投げかけたアートドキュメンタリー

■日時・場所

10/23 (木) 11:00~12:30

@横浜校舎 8号館 2階 822

(上映時間 43分 音声なし) (お菓子付き！)

*** 参加申込不要**

*** 入退室自由**



『LISTEN リッスン』公式HP

耳で聞く音だけが音楽ではない。
人間的な営みから生まれる「音」

主催：
明治学院大学大学院国際研究科 2年 (個人)

(学内広報で使用した宣伝用チラシ)

5000名以上のボランティア

「ろう者と一緒に異文化に触れてみよう
～「声」に頼らず「みる」コミュニケーションの体験と対話～」

活動報告書

「NVD-Lab」

2025年11月12日(水)

12:50～15:00

明治学院大学 横浜キャンパス

4号館1階コラボレーションスペース



【活動内容】

本イベントを企画した背景には、ろう者と聴者が交流し、共生社会の実現に向けて互いの理解を深める機会をつくりたいという思いがありました。今日、聴覚障害への理解は徐々に広がりつつありますが、実際にろう者と関わった経験のある聴者は多くないと思います。表面的な理解だけでは真の共生社会は実現できないと考え、聴覚障害そのものではなく、聴者とは異なる言語と文化を有する“言語的マイノリティとしてのろう者”の理解を深めてもらうことを目的に本イベントを企画しました。

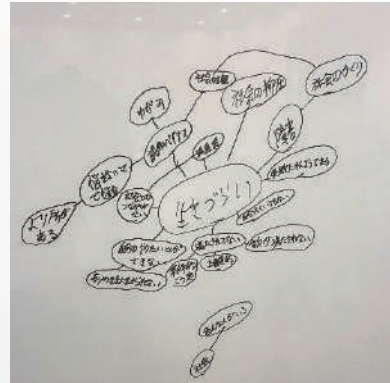
また、様々なコミュニケーション方法やバックグラウンドを持つろう者を知ってもらうため、他大学の学生や社会人のろう者をお呼びしました。企画内容としては、手話とろう者に関する講座、ジェスチャーのみで行うグループディスカッション、演劇発表、さらに一般企業に働いていた社会人ろう者と、ろう者と関わった経験のある聴者の学生によるスピーチを実施しました。

【イベントを終えてみて】

今回のイベントを開催するにあたって、スタッフ全員が多忙な状況での開催となってしまう、企画内容の検討や書類手続きを早い段階から十分に進めることができなかったことが反省点です。今後はより、時間に余裕を持ったスケジュール管理や日程調整を行い、企画に向けて細部まで詰める計画的な事前準備ができれば良いなと思いました。

一方で、そのような状況の中でも本イベントを実施し、スタッフの私たちだけでなく参加者とともに多くの気づきや新たな発見について考える機会を創出できた点は良かったと思います。実際に参加者からは「ろう者の方の体験談を直接聞き、手話を用いてコミュニケーションを取れたことが非常に貴重だった」「表情豊かで美しい手話に触れ、ろう文化を身近に感じられた」といった感想がありました。また、「コミュニケーションの方法が違うだけで同じ一人の人であると理解が深まった」「偏見が薄れ、困っている時は手を差し伸べたいと思うようになった」など、意識の変化を示す

・参加者は家庭環境や学校などでさまざまな思いを抱えて当カフェに来ており、ボランティアが話を聞くことによってすっきりしたと話していたり、自分は一人じゃないのだと話している者もいて、若者を社会的孤立にならないようにするカフェの目的を果たせたと考える。



哲学対話で出た内容の図→

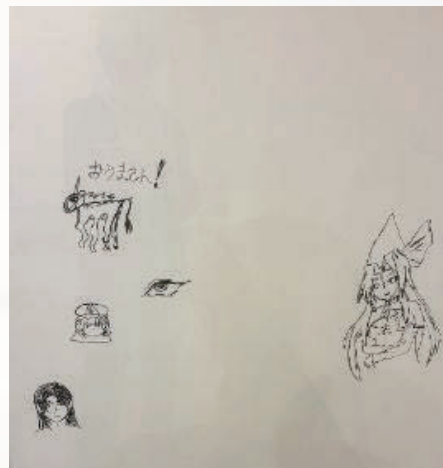
活動を通して得た学び

- ・本カフェは学生が主体となって若者に居場所を提供するという珍しい企画であり、どう人を集めようか試行錯誤をしていたが、実際に参加したい方のもとに出向き、悩み事を聞いたりして参加者を集めた結果、参加者が9人（スタッフ含まず）集まり大盛況であった。
- ・若者支援カフェに集まる人が何かしらの悩みを話すために来ていることから、若者の居場所不足の深刻さに改めて気づかされた。
- ・参加者の話から生きづらさの根幹は既存の生き方とのミスマッチから起きているということに気づかされた。
- ・参加者の満足度は高く、「次回も来たい」という声をいただいた。

残された課題

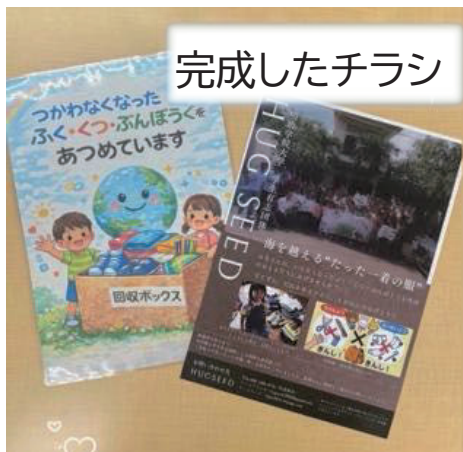
- ・居場所支援カフェで出た声をどのようにして支援や世の中に反映できるかを考える。

参加者の方と描いた絵→



－活動を通して得た学び－

実際に活動していく中で、ご協力いただける小学校がなかなか決まらないという困難がありました。営業担当のメンバーが何校もの小学校に電話をかけ、企画書を作成し、責任者と面談をする過程で、小学校から不参加のご連絡をいただくこともあり、設置する回収ボックスの予算が確定できなかったり、今後のスケジュールの目処が立たなかったりと、思い通りにいかないこともたくさんありました。そのような困難の中でも報連相をすることによって、皆で支え合って慎重にプロジェクトを進めることができました！設置後の回収と現地への送付でも予期せぬトラブルがあるかもしれませんが、報連相を怠らずに臨機応変に対応していこうと思います！



完成したチラシ



回収ボックスを設置させていただきました！

いけばな教室

—日本の伝統文化を知ろう!—



いけばなプロジェクト

(石井美羽, 石井優衣)

活動場所：横浜市立川上北小学校

活動実施日 2026年1月27日(火)



活動内容

社会科の授業の一環として小学6年生約70人を対象に、いけばな体験を実施した。この企画の背景には、以前姉の手伝いとして参加したボランティア活動で、共通点がほとんどない人々が、目の前にある作品をきっかけに自然と会話が生まれる場面を目にした経験がある。この経験から、芸術には人と人との距離を縮め、コミュニケーションを生み出す力があると感じた。

そこで、本活動は日本の伝統文化である華道を用いて、芸術を通して人と関わり、対面でのコミュニケーションの楽しさを伝えることを目的とした。また、同じ材料を使って異なる作品が生まれることから、多様

性について学んでほしいと考えた。

本活動では、班ごとに花器・剣山・軍手を配布し、児童一人につき枝・葉・花を一本ずつ用意した。はじめに、いけばなの簡単な歴史や流派、使用する道具について説明し、花を切る角度や枝を曲げる技法について解説した。実際に枝を曲げる体験を行ったところ初めての体験に児童は楽しんでいるようだった。班に分け、ワークシートに沿って剣山の置き場所を決め、枝・葉・花の順に自由に生けてもらった。最後に鑑賞時間を設け、他の班の作品について感じたことを発表・記入してもらい、活動後は花材を持ち帰ってもらった。

活動を通して得た学び

活動を通して、芸術が人と人とのコミュニケーションを生み出す有効な手段であることを実感した。当初は班の中で意見の対立が起こることも想定していたが、実際にはどの班も話し合いを重ねながら制作に取り組み、協力して一つの作品を完成させていた。特に印象的だったのは、ある班の個性的な葉の使い方が他の班へと広がり、それを真似たり発展させたりし、新たな表現が生まれた点である。

また制作中には、「ここで切ると変か」「切った茎の部分も使っていいの

か」と確認に来る児童も見られた。このことから、自分なりの表現に挑戦する機会を提供できたと感じている。回収したワークシートからも、同じ材料でも全く異なる作品が生まれることに気づいたという声があった。

枝や花の向きや高さ、剣山の配置の仕方によって印象が大きく変わり、表現の違いが作品として表れるという体験を通して、表現の多様性といけばなの楽しさを伝えられたと考えている。



↑説明の様子

←班で異なる児童の作品

ようこそ ステキなラップの沼へ

明学ラップワークショップ実行委員会

🕒 2025.12.22 (月) 13:30~16:30

📖 明治学院大学白金キャンパス
アートホール

活動内容

「自分の声に耳を傾けられた経験なしに他者の声に耳を傾けることは果たして可能なのだろうか。他者と共に生きていくにはまず、自分自身の語りが安全な場所で丁寧に受け止められ、癒された経験が必要なのではないだろうか。」混沌とした世の中に蔓延するヘイトスピーチやヘイトクライムに抗うために出来ることを探していた時、ふとそんな考えが頭に浮かんだ。そして「安全な語り場」を拓く可能性を見出したのが、自分の考えていること、感じていることをリリック(詞)として書き起こし表現するラップという方法だった。

この活動は2024年12月に行われたボランティアセンター主催のラップワークショップを参考に、当時その場に参加した学生が企画したものである。開催に際してはラッパー・詩人として活動されているFUNI氏を講師にお迎えし、参加者にラップのレクチャーをお願いした。参加者は主催学生を含め5名で、休憩を含め3時間、全体の構成には新たに2部制を採用した。第1部ではワークショップ、第2部ではリリックに対する思いなどを座談会形式でお互いに共有する時間を持った。以下は当日のプログラムの概要である。

今回特に工夫の必要があったのが、参加者に向けたアンケートの取り方である。既存のボランティアポータルサイトでは会場設営のボランティアの募集や個別での主催者に対する連絡事項の有無などが設問として設定できなかったため、ボランティアセンターに相談のうえ代替案としてGoogleフォームを作成・使用することとなった。

- 13:30~13:40 主催学生からグラドルールの説明
- 13:40~14:10 FUNI氏のオリジナルラップ披露
- 14:10~15:10 各自でラップの創作・レコーディング
- 15:30~16:30 座談会形式で感想など共有



↑ 広報に使用したポスターデザイン決定には時間を要したが、主催学生が使用する車椅子の色から着想を得て背景はピンク色に、参加者のモヤモヤがラップを通して風船のように軽くなって欲しいという思いから風船のイラストを取り入れた。

-活動を通して得た学び-

企画による成果として、当初の想定を上回る衣類が集まりました。仕分け作業に想定以上の時間を要し、計画段階における作業量の見積もり及び役割分担の重要性を改めて実感する結果となりました。一方で、小学校関係者の方々が活動に共感し、個人的に協力を申し出てくださいるなど、支援の広がりも見ることができました。また、現地団体より子どもたちの写真が届き、支援が確実に届いていることを実感できたことは大きな成果であったと感じられました。

関係者の皆様にご協力いただきました！



って、パンフレットを手にとった人が抱く印象は変わるため、どのような見せ方が良いのかを学んだ。

確認の大切さ≫

印刷原稿にも修正が必要な箇所が残ってしまい、完成した800部を手作業で修正することになった。この経験から、印刷段階に入る前に、複数人で完成したものを確認することが大切になることを学んだ。

◎複数団体の方々と制作したことによる学び

多様な人々と1つのものをつくること≫
パンフレット制作を通じて、複数の団体と一つのものを作る難しさと楽しさを感じた。

難しさとして、パンフレットの方向性や進行等を正確に共有し、設定した期限内にまとめることに苦労した点が挙げられる。進行状況の共有は都度都度出来ていたが、のと部よこはま@明学と他団体との間で、パンフレットの完成イメージを十分に共有出来ていなかったと振り返る。

一方で楽しさとして、多様な団体の協力を得て作成していたからこそ、作成中には完成物への期待と高揚感があった。それぞれの団体が大事にしていることを、寄せて頂いた言葉を活かしてのと部よこはま@明学からパンフレットとして発信する。完成したパンフレットは、のと部よこはま@明学だけでは作り上げることのできなかつたものにまとまった。だからこそ、無事仕上がったパンフレットを手にとった時、誇りに感じた。



のと部よこはま@明学

計画的なスケジュールリングの大切さ≫

利用させていただいた明治学院大学ボランティアセンターの制度(いつでもボランティアチャレンジ)の申請、協力団体さんとのやりとり、そして編集といった作成プロセスに対して必要な時間を考慮した上で、余裕をもった日程を組む重要性を身をもって知った。

依頼内容を明確にすることの大切さ≫

他団体が活動紹介を回答するフォームを作成する際に、目安の字数を記載しておくことで、他団体も文字数を意識した回答ができることを学んだ。

【今後の見通し】

今回作成したパンフレットは、新入生を主な対象として、ボランティアセンターの新年度ガイダンスなどで配布する予定である。また、横浜キャンパスと白金キャンパスのボランティアセンターや国際平和研究所に設置し、新入生はもちろんのこと、「能登に関わりたい」と考える明治学院大学の学生が能登への情報を手に取りやすくするツールとなればと考える。

7. 1 Day for Others (通称：1Day)

(1) 総括

2025年度の「1 Day for Others(1日社会貢献プログラム)」は、年間87プログラムを企画し、延べ328名の学生が参加した。新型コロナウイルス拡大の影響から「1 Day for Others」も、2022年度までは縮小せざるを得ない状況だったが、2024年度に年間プログラム数は過去最多を更新し、2025年度も件数は高水準で推移している。様々な現場で学生が活動させていただく機会をいただけたことは、受入団体の皆様のご尽力があったからこそであり、この場を借りて感謝申し上げたい。

2025年度のプログラム内容について、企画の段階で意識をして受入団体の皆様と検討したことは、学生が現場でリアルな社会課題に触れることができるかという点である。さらに、少人数でのプログラムを多く実施することで「明治学院大学から来た大勢の中の一人」と埋もれてしまうのではなく、「活動を自分事」として捉えてもらうことを意識し、一人ひとりが主体性を持って活動することにつながったと考える。その結果として、活動後に、受入先での活動を継続している学生や、活動をきっかけとして将来の進路が見えてきた学生も見受けられた。

また、2025年度は、受入団体の皆様と7プログラムを新設した。ここまでの皆様との関係性が基盤となりプログラム新設に至ったケースが多い。また、学生が企画したプログラムが5プログラムであり、プログラムに“参加”するだけでなく、学生自ら“企画・実施”する傾向が近年見て取れる。併せて、学内での連携も着実に実になっていることが伺える。

今後は、プログラム数という“量”の追求のみならず、一つひとつのプログラムの“質”の追求も視野に入れ向き合っていく。学生に提供できるプログラムの幅が広がるケースや、学生はじめ学内者が主体的に企画したケースなど、参加学生にとって魅力的なプログラムや今後の学内連携の活性化につながるようなプログラムは、新規プログラムとして積極的に取り入れる一方、既存プログラムについては、「学生が現場でリアルな社会課題に触れることができるか」などの観点で、受入団体の皆様ともご相談しつつ、適宜見直しを図っていきたい。

“量”と“質”の追求という、ときに相反する場面もあるかもしれないが、ここに向き合っていくことが、「はじめの一歩として1日だけボランティアに触れてみる間口の広いプログラム」という性質の「1 Day for Others」を、多くの学生にとってさらに魅力的なものへと進化させる要素だと考えている。2026年度も学生一人ひとりにとって「1 Day for Others」への参加がボランティアの楽しさを感じる機会、ボランティアの意義を考えるきっかけ、ボランティア受入団体の想いを知る一助になることを期待する。

(職員 熊澤 瑞)

(2) プログラムの様子



スペシャルオリンピック日本・神奈川



舞岡・やとひと未来



とつか宿場まつり実行委員会



ふれあい運動会

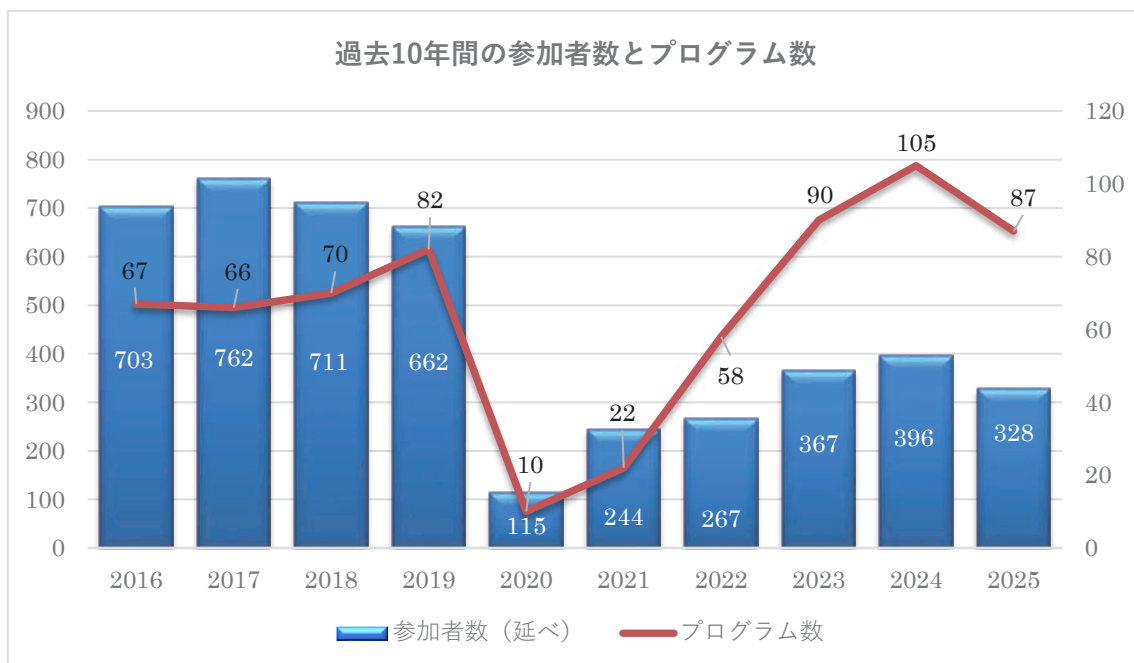
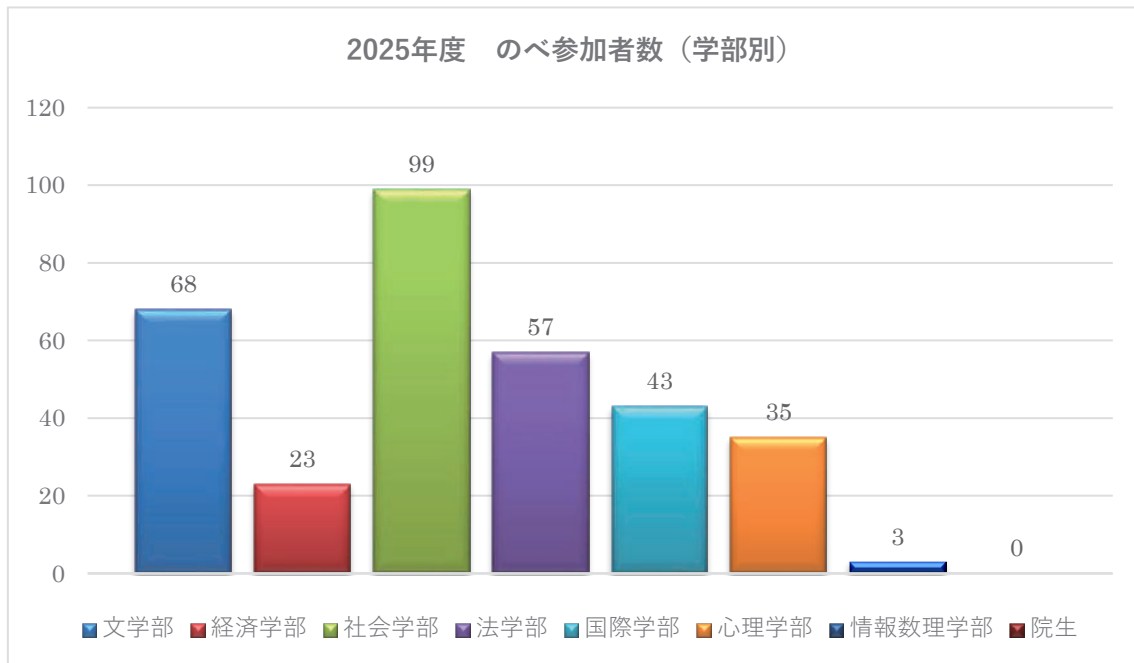


麻布中高中生プラザ



みなと外遊びの会

(3) これまでの参加者数



NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
43	港区高輪地区総合支所	子ども防災フェスで活躍！防災ブースのお手伝いで子どもたちと交流しよう	10/4	5
44	高輪共和会	高輪共和会による祭りサポートボランティア②	10/5	2
45	認定NPO法人舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」で公開稲刈イベント！	10/5	9
46	柏尾川魅力づくりフォーラム	みんなで川をきれいに！「第38回戸塚駅周辺魅力アップキャンペーンin 柏尾川」	10/11	4
47	港区立エコプラザ	みなと区民まつり①	10/11	2
48	港区立エコプラザ	みなと区民まつり②	10/12	1
49	下倉田地区連合会	2025年度第24回下倉田地区連合会スポーツレクリエーション大会を盛り上げよう	10/12	4
50	ボランティアセンター	「フェスティバルーん」での明学出店ブースお手伝い！	10/17	2
51	戸塚区商店街連合会	第2回ムーンライトフェスat TOTSUKAを盛り上げよう！	10/18	7
52	寿みんなの落語会実行委員会	日雇い労働者の町で落語を楽しむ「寿寄席」を盛り上げよう！	10/18	2
53	公益財団法人 横浜市スポーツ協会 戸塚スポーツセンター	スポーツレクリエーションフェスティバル2025	10/19	5
54	NPO法人"みなと外遊びの会"	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期①	10/19	2
55	NPO法人"みなと外遊びの会"	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期②	10/22	0
56	チャレンジコミュニティ・クラブ	チャレンジコミュニティクラブ(港区社会福祉協議会バリアフリーマップ作成)	10/23	2
57	西横浜国際総合病院	西横浜国際総合病院	10/24	1
58	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	芝浦港南ふれあいまつり①	10/25	2
59	認定NPO法人 ブラチナ美容塾	芝浦港南ふれあいまつり②	10/26	2
60	NPO法人"みなと外遊びの会"	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期③	10/26	3
61	MOA美術館 神奈川県児童作品展 戸塚児童作品展実行委員会	「戸塚児童作品展」をギャラリースタッフとしてサポート！	10/26	3
62	NPO法人"みなと外遊びの会"	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期④	10/29	1
63	学生団体OPENROOM (合同会社結びめとのコラボ)	知的障がいのある子どもたちが楽しく白金祭を回れるようサポート！	11/1	6
64	認定NPO法人 スペシャルオリムピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 脱穀編	11/1	5
65	NPO法人"みなと外遊びの会"	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期⑤	11/5	1
66	チャレンジコミュニティ・クラブ	チャレンジコミュニティクラブ(港区社会福祉協議会バリアフリーマップ作成)	11/6	2
67	NPO法人"みなと外遊びの会"	みなと外遊びの会 高輪森の公園 プレパーク 秋学期⑥	11/9	2
68	特定非営利活動法人 銀座ミツパチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを掘ろう！	11/12	0
69	上倉田地区連合会	上倉田地区連合会主催の防災訓練でこどもとあそぶ！	11/15	0
70	高輪地区高齢者相談センター	高齢者を支える地域活動について考えてみよう！	11/19	3
71	認定NPO法人舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」で収穫祭イベント	11/23	6
72	あーすフェスタかながわ企画委員会 ステージ部会	あーすフェスタでかながわの多文化共生について考えてみよう！①	11/29	8
73	とつか宿場まつり実行委員会	2025とつか宿場まつりをお手伝いしよう！①	11/29	5
74	どんぐりの会	白金台"地域のフリマ"「ころころ市」で交流しよう	11/29	2
75	あーすフェスタかながわ企画委員会 ステージ部会	あーすフェスタでかながわの多文化共生について考えてみよう！②	11/30	4
76	とつか宿場まつり実行委員会	2025とつか宿場まつりをお手伝いしよう！②	11/30	4
77	学生団体smile	【学生企画】1日先生体験してみませんか！？	12/5	1
78	認定NPO法人 JUON NETWORK (樹恩ネットワーク)	多摩の森・大自然塾	12/7	3
79	戸塚桜セーバー	柏尾川プロムナード花壇の花植え	12/13	2
80	チャレンジコミュニティクラブ地域連携部会「昔遊びの会」	2025年度 「昔遊びの会」(赤羽小学校授業協力)	1/15	4
81	横浜山中華学校	横浜中華街で春節を飾ろう！	2/3	3
82	芝の家(地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト拠点)	多世代交流拠点「芝の家」で世代を超えたコミュニティづくりを体験しよう。	2/18	4
83	戸塚区民文化センターさくらプラザ	さくらプラザ 春の芸術祭2026 ①ホール公演のサポート	2/21	2
84	戸塚区民文化センターさくらプラザ	さくらプラザ 春の芸術祭2026 ②全体イベントのサポート	2/21	4
85	NPO法人エイブル・アート・ジャパン	【会場運営・来場者対応】アトリエ・ポレポレ30周年記念イベント	2/23	1

7. 1 Day for Others

NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
86	認定NPO法人びーのびーの	だれでも食堂『よるによる会』	2/28	3
87	どんぐりの会	白金台“地域のフリマ”「ころころ市」で交流しよう	3/28	2
			計	328

8. ボランティア・カフェ（通称：ボラカフェ）

（1）総括

2025年度は9件の開催となった。過去3年間も7-10件であり、長期休暇も考慮すると年間9-10件が適切な開催数と思われる。参加のべ人数は238名（前半後半等に分かれるものは多い方の人数を算入）であり、2022年107名、2023年度114名、2024年度150名から大幅に増加した。これは①④⑧⑨が外部に開かれた形での開催だったことが大きい。学内参加のみで人数が多かったのは⑥であるが、これは4つのゼミの参加によるものである。今後も授業との連携を広げていきたい。だが、参加人数の少ないものでも関心の高い層による充実した意見交換、深い学びがあったことは記しておく必要があるだろう。テーマとしては、能登が3件、障害3件、国際2件（障害と重なりあり）、戦争1件、LGBTQ1件であり、能登に重点を置きながらも多様な内容となった。なお、①は戸塚まつり準備会（公認団体）、⑦は学生個人の発案の企画であった。

（ボランティアコーディネーター 砂川 秀樹）

	開催日	タイトル	ゲスト・話題提供	場所	参加数
①	5/25 (日)	能登を想う、だから動く。	①能門伊都子（重蔵神社・輪島市河井町） ②成田智信（善了寺・横浜市戸塚区）	横浜校舎 1021	①61名 ②37名
②	6/10 (火)	「1923年関東大震災時の虐殺を『記憶』するためのプロジェクト」報告会	佐伯賢（社会学研究科社会福祉学専攻）	白金校舎 1407	前半11名 後半5名
③	6/16 (月)	今さら聞きづらいLGBTQの基礎知識（レインボーフェス）	砂川秀樹（コーディネーター）	横浜校舎 コラボ	7名
④	6/17 (火)	自分らしく生きるってなに？ 障害のある人が地域で、一人で暮らすチャレンジから考える	田中悠輝（コーディネーター）	白金校舎 1254	映画上映71名／トーク53名
⑤	7/2 (水)	永井玲衣さんと一緒に「能登」について考える哲学対話	永井玲衣（哲学研究者、作家）	白金校舎 1254	12名
⑥	10/3 (金)	私たち抜きに私たちのこと決めないで～精神障害当事者活動のメッセージ～	山田悠平（精神障害当事者会ボルケ 代表）	白金校舎 アートホール	41名
⑦	11/26 (水)	国際協力の現場から -バングラデシュ児童労働とNGOのリアル、そして学生にできること-	内山智子（シャプラニール）／金坂里菜（社会学部2年）	横浜校舎 コラボ	5名
⑧	12/1 (月)	「当事者が主役」ってどういうこと？～JICA「TAMPOPO」プロジェクトに学ぶ国際協力～	吉田憲（JICA コスタリカ所長）／西村正樹（DPI 日本会議 副議長）／廣瀬芽里（Yes, Deaf Can! 代表）／坂本輝（法学部3年）	白金校舎 アートホール	15名
⑨	12/9 (火)	奥田知志さん・永井玲衣さんと考える能登の復興	奥田知志（NPO 法人抱樸理事長）／永井玲衣（哲学研究者、作家）	白金校舎 2201	15名

(2) 各回報告

【学生企画】能登を想う、だから動く。

進行：戸塚まつり準備委員会

講師：（一部）能門 伊都子（重蔵神社・輪島市河井町）
（二部）成田 智信（善了寺・横浜市戸塚区）

2025年5月25日（日）（一部）10:30～12:00、（二部）14:00～15:30

横浜キャンパス 1021 教室

参加者：（一部）61名、（二部）37名

目的

第28回明治学院大学戸塚まつりの「能登半島復興支援企画」の一環として、戸塚まつり準備委員会との共催により実施された本プログラムでは、2024年に発生した能登半島地震および豪雨災害の被災地・能登の現状や復興の歩みについて理解を深めるとともに、私たち一人ひとりが「想う」だけでなく「行動する」ことの意味を考える機会とすることを目的とし実施した。

内容・所感

第一部では、重蔵神社の能門氏より、被災直後から現在に至るまでの現地の状況や支援活動の実際についてご講演いただいた。重蔵神社は甚大な被害の中心地にありながら、震災翌日から奉納米を用いたおにぎりの炊き出しを開始し、境内での支援物資の配布会を実施してきた。配布会は、物資を配る場にとどまらず、人々が外に出て他者とつながる機会を生み出す場としての役割も果たすようになり、被災地の拠り所となってきたという。配布会を訪れる人の数は震災から1年半が経過した現在も増え続けており、復興は依然として道半ばであることが強く印象に残った。また、避難所運営は行政ではなく、動ける被災者自身が担うという実情を、被災して初めて知ったことも語られた。公的支援だけに頼らず、地域や民間とのつながりを生かした支援体制を平時から構築すること、そして避難後の生活を見据えた備えの重要性が強調された。身近に気にかけてくれる人の存在が、生き延びる力につながるという言葉も、参加者の心に強く刻まれた。



第二部では、善了寺の成田氏より、奥能登地域での炊き出し支援、土木系ボランティア、仮設住宅でのサロン活動など、継続的な支援活動の経験についてお話を伺った。人口約2万人の輪島市で生じている混乱から、過疎地域における災害の深刻さや支援の難しさが語られた。また、被災地から離れた場所にいる我々こそが、話を聞き、応援し、関心を持ち続けることが重要であることや、「関係人口」を生み出す第一歩としての、交流や対話にこそ価値があることが示された。

参加者の声

- ◎現地での支援をし続けている能門さんのお話を聞いて良かった。飛び出したマンホールの画像などのリアリティに衝撃を受けた。
- ◎戸塚地域の住職である成田さんの活動を見て、能登から遠く離れていてもできることがあると思えた。
- ◎企画した学生たちに感謝。まだまだ復興のためにやる事が山積みであることがわかった。

1923 年関東大震災時の虐殺を「記憶」するためのプロジェクト 報告会

報告：佐伯 賢（社会学研究科社会福祉学専攻
博士前期課程 2 年）
進行：宮崎 理（社会学部社会福祉学科准教授）

2025 年 6 月 10 日（火）第 1 部 12:40～13:20

第 2 部 13:30～15:00

白金キャンパス 1407 教室

参加者：第 1 部 学生 4 名（うち院生 2 名）、教員 3 名、職員 3 名

第 2 部 学生 2 名（うち院生 1 名）、職員 2 名、学外 1 名

目的

ソウルに 2002 年に開設された『記憶と平和のための 1923 歴史館』は、関東大震災時の朝鮮人虐殺に関する資料を保存し市民に公開している歴史資料館である。報告者である佐伯さんは、「いつでもボランティアチャレンジ」（以下、「いつボラ」）の助成を得て、日韓市民団体の連帯の場でもあるこの歴史館を訪問し、設立経緯や背景などを館長へインタビューした。

いつボラ申請書では、「歴史修正主義に抗い、植民地主義に根差したレイシズムに対抗するため、この問題に取り組む日本および韓国の人々との連帯の基礎を深めること」が目的として掲げられている。今回のボラカフェは、その目的をより多くの人に共有する機会として実施された。

内容・所感

第 1 部では、まず、佐伯さんがこの問題に関心を持つようになったきっかけについて語られた。大学院で「不正義とは何か」という問いに出会い、「構造的不正義を問題化する視座とは何か？」を研究テーマにすることになったこと、日本軍性奴隷制や関東大震災時の朝鮮人虐殺の問題に取り組む人たちと出会ったこと、そして、日本のソーシャルワークが（個々の研究者や実践者はいるにしても）レイシズムなどの制度的差別を見過ごしてきたことへの疑問など、聞く者の問題意識を掘り起こすような内容であった。その後、写真を示しながら、「1923 歴史館」や日本が植民地支配している時代の抗日独立運動の運動家が投獄された「西大門刑務所」の訪問の報告をおこない、「なぜ日本にこのような施設がないのか」「こうした史実を消そうとすることはおかしい」と疑問を呈した。



第 2 部では、1 部の話を聞いてそれぞれが考えたことを共有した。社会福祉学を専攻する院生からは、「日本のソーシャルワーカー育成では、差別を無くすための思想が削られていく、そうした中でソーシャルワーカーになることに迷いを感じる」「運動では感情も大事なものであるが、研究では、エビデンスが必要とされるなど、制度化された中で言語化することを求められるがゆえに、研究をしていくことに葛藤を覚える」という思いが語られた。それに対して、他の参加者からは、そうした迷いを持つ人がソーシャルワーカーになることに意義があるのではないかという応答があり、組織の中で少しずつ変えられることもあると自身の経験の話があり、進行の宮崎先生からは、「研究することも応答することであり、言語化は、誰かへの応答としてある」というコメントがあった。そうした応答がさらなる応答のきっかけとなり、参加学生が自らの障害について語るなど、それぞれの経験を寄せ合うような意見交換となった。

佐伯さんの歴史館への訪問においておこなわれたインタビューは、相互の知見・経験の交換（interview）として、研究活動／社会活動に切り離せない実践として位置づけられている。今回、その研究-社会活動の内容がボラカフェとして共有されることで、研究-社会活動の関係が多層化し、切り離せさを確認することにもなった。その中で提起された問題を、それぞれの立場から応答することで、プロジェクトで掲げられた目的とその中に込められた意味を参加者が主体的に受け止める内容となった。

今さら聞きづらい LGBTQ の基礎知識

進行・講師：砂川 秀樹（ボランティアコーディネーター）

2025年6月16日（月）12:40～13:20

ボランティアセンター（横浜）コラボレーションスペース

参加者：学生7名

目的

昨年に引き続き、明治学院大学レインボーフェスのキックオフイベントとして開催した。2010年代以降、日本でも LGBTQ という言葉が広く使われるようになった。しかし、その一方で、様々な誤解もある。例えば、本来それぞれ意味を持った言葉の頭文字を並記した言葉であるのにも関わらず、一つの「属性」を指すものであるかのようにとらえられがちである。また、メディアを通して多くの LGBTQ の人たちの姿が可視化するようになっているが、身近な存在として意識されていないことも多い。そこで、ゲイであることを公表している職員（ボランティアコーディネーター）である砂川が、参加者からの質問に答えるという形をとることで、身近に「当事者」がいることを意識してもらいながら、基本的な知識を得ることを目的として開催した。

内容・所感

L/G/B/T/Q、SOGIE（性的指向・性別アイデンティティ・性別表現）についての基礎知識についての確認のあと、砂川が自身の活動経歴について話した。その後の学生からの質問では、ゲイであることを公表しながら活動することに不安を感じないか、親にいつカミングアウトしたか、その際にどういう反応があったかなど、砂川の経験に対する内容のもののほか、自身のマイノリティ性について話をしながら、そのことを親が理解しておらず、どう話したらいいかといったアドバイスを求めるものがあった。

今年、レインボーフェスのチラシを印刷し、このボラカフェ開催前に 800 枚以上配布したが、昨年度より人数が少なかった。昨年度は、横浜でおこなわれている大人数の授業の冒頭で直接紹介させていただく機会があったが、今回はそれがなかったことが人数減少の理由の一つとして考えられる。

参加者の声

◎LGBTQ の基礎知識を知るだけでなく、砂川さんが今までどのような活動をされてきたかを知ることができてよかったです。質疑応答の中で、砂川さんご自身がオープンリーゲイとして活動する葛藤をお話いただいたことや、恋愛感情があまりわからないことに対する家族との対話の方法の模索などのセンシティブな相談を親身に一緒になって考えていらっしゃる姿にとっても安心感を覚えました。私自身、バイセクシュアル当事者であるため、ゲイ当事者の方が大学の職員としていらっしゃって啓発活動をされているのは大変心強い環境であると思いました。

◎ボラカフェでは、砂川先生ご自身のお話のあと、参加者からの質問に答えていただきました。私は、どうすれば自分のセクシュアリティを親に理解してもらえるかということを質問しました。何が問題なのか、どう向き合っていく必要があるのかを一緒に考えながら答えていただき、すぐに理解してもらおうとせず、時間をかけて少しずつ知ってもらうことが大切だと気付くことができました。他の参加者の質問も興味深く、とても有意義な時間でした。

◎今でも、自分のことをオープンにして話すことは怖いとおっしゃっていたことが心に残りました。私は自分のことを話すことが難しいですが、勇気をもらいました。



自分らしく生きるってなに？ 障害のある人が地域で、一人で暮らすチャレンジから考える

進行・講師：猪瀬 浩平（ボランティアセンター長）
田中 悠輝（ボランティアコーディネーター）

2025年6月17日（火）12:40～15:00

白金キャンパス本館2階1254教室

参加者：映画上映：71名（ボラセン関係者除き）

トーク：53名（同上）

目的

どんなに重い障害があっても、地域で自立して自分らしく生きる取組が各地で行われている。家族や施設に守られた暮らしとは違い、家族との衝突、介助者や地域の人とのコミュニケーションなど、トラブルはついてまわる。「それでもなぜ自立生活をするのか」という問いから障害者の自立、またそこから逆照射される“健常者”とされる人々の自立についても考える場となった。

内容・所感

今回は本学のボランティアコーディネーターであり映像作家でもある田中悠輝の監督作品『インディペンデントリビング』を視聴し、その後猪瀬浩平ボランティアセンター長と田中によるトークセッションを行い、「自立とはなにか」、「自分らしく生きるとは何か」を考える場を持った。

映画『インディペンデントリビング』は、大阪を舞台に日常的に手助けを必要とする障害のある人々の生活を記録した映画で、先天的な障害や事故・病気による障害などさまざまな背景をもつ人々が日々の生活と向き合う姿が映されている。

質疑では、制作に至る背景などについても質問があり、社会運動の中でなぜ映像制作をすることになったのかについてなどさまざまなやりとりがあった。

参加者の声

◎映画を観て、障害者に対するイメージが変わったのを実感した。普段は見落としがちな日常の中の葛藤や笑顔が、生活の一部として映っていた。特に、サポートを受けながらも主体的に決断しようとする姿には尊敬の念が湧いた。障害のない人とある人との違いではなく、人としての多様性を描く映画として、多くの人に見て欲しいと思った。



◎ドキュメンタリーでありながら、ただ重くならないユーモアや軽やかさも感じられる映画。日々の挑戦に直面しながら、ふとした瞬間に笑いが生まれたり、仲間や介助者たちとの関係性が温かく描かれていた。観ているうちに生きることのしなやかさや他者と共にあることの豊かさを実感できる等身大の記録として、心に残った。

永井玲衣さんと一緒に 「能登」 について考える哲学対話

進行・講師：永井 玲衣（哲学者・作家）

2025年7月2日（水）14:00～16:00

白金キャンパス 1254 教室

参加者：学生 11 名、教職員 4 名

目的

能登半島地震をきっかけに、私たち一人ひとりが「能登」とどのように向き合い、考え続けることができるのかを問い直すことを目的とする。明治学院大学ボランティアセンターでは、能登の復興支援ボランティアの活動を続けているが、現地で受けた衝撃や考えたことを立ち止まって考え、言語化を試みる必要があると考え、今回の企画に至った。哲学対話を通して、すぐに答えを出すのではなく、他者の言葉に耳を傾け、自分自身の言葉で考え、語り合う場をつくることで、出来事を自分ごととして捉える姿勢を育むことを目的とし開催した。

内容・所感

本イベントでは、哲学者・作家の永井玲衣さんを迎え、能登半島地震から約一年半が経った今、「能登」について立ち止まって考える哲学対話を行った。永井さんの進行のもと、参加者同士がそれぞれの感じたことや考えを言葉にし、他者の言葉を聞き合いながら、問いを見つけ、思索を深めた。正解を求めるのではなく、考え続けることそのものを大切にし、能登との関わり方や、私たちにできることについて静かに考える時間となった。

参加者の声

- ◎永井さんの哲学対話の3つのルール「よく聞くこと」、「自分の言葉で話すこと」、「人それぞれで終わらせないこと」がよかった。
- ◎「沈黙は悪いことではない」「うまく喋る必要はない」などの言葉も印象的だった。
- ◎安全に対話ができる場所としての約束や、それによってできる空間が心地よかった。



- ◎自分と異なる意見を聞くことで、それまで自分が思ってもいなかったような考えも引きずり出されてくるような感覚があった。
- ◎普段会っている人も参加していたが、改めて哲学対話の場で話を聞くことができよかった。普段だとできないような正直な思いの交換ができたと思う。

私たち抜きに私たちのことを決めないで ～精神障害当事者活動のメッセージ～

講師：山田 悠平（精神障害当事者の会ポルケ）

2025年10月3日（金）17:00～18:30

白金キャンパス アートホール

参加者：学生 37名、教員 4名

目的

「私たち抜きに私たちのことを決めないで（Nothing About us without us）」は、国連での「障害者の権利に関する条約」の採択に向けて、障害者当事者によって掲げられた言葉である。

「障害者の尊厳、自律及び自立の尊重、無差別、社会への完全かつ効果的な参加及び包容等」の一般原則を掲げた同条約は2006年に採択され、日本政府は2014年に批准した。しかし、日本では、その条約の理念の完全実施にほど遠い現状がある。条約で掲げられている理念を実現するためには、何が必要か、それらを阻んでいる偏見や差別を含め、精神障害当事者活動をおこなっている立場から話をうかがい、精神障害のある人やその周囲の人がより生きやすい社会について考える。

内容・所感

まずポルケの活動の紹介、障害者権利条約に至る歴史や障害の社会モデルの考え方が示された。ポルケでは、当事者目線で「つながること／つたえること／かえていくこと」の三つを意識している。国際障害者権利委員会からは、日本の長期入院、非自発的医療、身体拘束、虐待などの問題が指摘されてきた。その背景にはパターナリズム、「精神障害者は不幸な存在」という考え方、優性思想などがある。そうした偏見、差別に対する当事者の声は昔からあり、全国患者集会で「精神病院での人権無視を告発しよう」などの文言の入った決議文が出されたのは1974年のことだった。「私たちのことを私たち抜きに決めないで」に基づきながら「わけないありかた」を実現していくためのキーワードは共同創造である。

参加者の声

◎これだ、と入院や治療法などを一方的に押し付けるのではなく、当事者の背景を考えて社会の中で共に暮らしていくことが重要だと知ることができた。障害者が当たり前で権利を持って生活するには、強固な法整備がないとそもそも守ることができないので、無視できないと思った。

◎精神障害のある方を社会から分離させるのではなく、地域で共に暮らし、共に考えていくことが差別や偏見をなくす第一歩になるだろう。しかし実際には、普段の生活の中で精神障害のある方と直接関わる機会は少なく、福祉を学ぶ学生や福祉関係の職に就く人に限られがちであると改めて思った。そのため、地域活動や学校教育などを通して交流の場を広げ、誰もが自然に関わりを持てるようにしていくことが重要だ。今回の話を通して、当事者の声を聞き取る姿勢を持続することが、将来福祉に関わる者としての責任であり、社会全体にとっても必要不可欠な姿勢であると強く実感した。

◎所謂「健常者」中心の世の中で、多くの悲しみと苦しみを体験された中でもこのような活動を続けてこられたことに感服しました。精神障害の何たるかは理解できてはいませんが、この講演をきっかけに少しずつ学んでいければと思います。

◎当事者からの考えや思いはなかなか聞ける機会がないので非常に貴重な時間でした。これまでの授業でも医学の世界と当事者主体の考え方の違いを学んできたが、当事者からお話が聞けてより社会が変わってほしいと思えた。



【学生企画】国際協力の現場からーバングラデシュ児童労働と NGO のリアル、そして学生にできることー

企画・進行：金坂 里菜（社会学部社会学科2年）
 講師：内山 智子（特定非営利活動法人シャプラニール=市民による海外協力の会
 前バングラデシュ駐在所長）

2025年11月26日（水）12:40～14:40

ボランティアセンター(横浜)コラボレーションスペース

参加者：学生4名、教職員2名

目的

バングラデシュでは、家事使用人として働く少女たちが見えない児童労働として存在する。南アジアを拠点に活動する海外協力 NGO シャプラニールでは、現地の家事使用人の支援センターを卒業し自立した生活をする少女たちへの聞き取りを行った。今回は同 NGO のインターンをしていた学生の企画として、家事使用人の少女たちが置かれている現状や、支援センター卒業後の生活など、“少女たちの生の声”を同 NGO の前バングラデシュ駐在所長から聴き、学生に何ができるかをともに考える場をつくる。

内容

講師の内山さんより、バングラデシュの児童労働は依然高い水準にある事、統計に算定されていなかった家事使用人が、国内外の NGO 連携の結果、11月に児童労働統計への反映が決まった事、児童労働の背景には経済的理由以外に親の認識不足も影響が大きいこと等が報告された。またこうした現状に対する NGO の取り組みとして、少女たちの居場所づくり、将来の選択肢を増やすスキルトレーニング、地域住民や雇い主など周辺への働きかけやアドボカシー活動などの取組が紹介された。その後、参加者を交えたロールプレイや企画学生のインターン活動報告、サリー等の民族衣装の試着体験や児童労働撲滅のためのフェアトレード活動についての紹介など、同国の社会課題のみならず文化も知る機会となった。

企画学生の感想

自分の話を通して誰かの意識が少しでも変わったり、社会の理解がわずかでも前進したりしたという経験は、私の人生で初めてのことで、強く感動した。誰かの行動の一步につながったことがとても嬉しかった。一方で、今回発表したマザリナ(多文化共生の活動)の良い面だけでなく「本当にこれで十分なのか？」と疑問を持つ姿勢、一步引いた視点で物事を考える重要さを改めて実感した。少人数の対話形式だからこそ、学生それぞれと深い話が出来、新しい視点を獲得する貴重な一日となった。

こうした普段交流の少ない学生同士が対話できる「ボラカフェ」という空間は、私たちにとって非常に意味のある場であり、授業とは異なる学びを得られることを改めて痛感した。参加者を多く集められなかったことは課題である。曜日の設定や告知方法、ポスターの工夫、どこにアプローチすべきだったのか、情報が届かなかった人がいたのではないかと、明学生に来てもらうにはどうしたらいいのか等、様々な観点から改善の余地があったと感じている。今回の経験を活かして、また学生として何かを企画出来たらいいと思っている。

参加者の声

- ◎(アルバイト先の)ベトナム人の社員さんに対して少し怖いと思っていたけど、今日のお話を聞いて話してみようと思った。
- ◎マザリナのお話を聞いて、ここに来る日本人はもともと多文化共生に関心のある人だけなのかなと思った。



「当事者が主役」ってどういうこと？ ～JICA「TAMPOPO」プロジェクトに学ぶ国際協力～

講師：盛上 真美（DPI日本会議国際部会メンバー）
 吉田 憲（JICAコスタリカ所長）
 西村 正樹（DPI日本会議・副議長）
 廣瀬 芽里（Yes, Deaf Can! 代表）
 坂本 輝（明治学院大学 法学部 3年）

2025年12月1日（月）18:00～20:30

白金キャンパス アートホール

参加者：学生4名、一般（教職員含む）11名

目的

JICA プロジェクト・ストーリー 『TAMPOPO の綿毛が風に飛んでいく—ブラジルろう者「当事者主体」の奮闘の軌跡』を題材に、「当事者主体」とは何かを問い直し、その意義や課題について理解を深めることを目的とした。JICA「TAMPOPO」プロジェクトの実践から学び、支援する側・される側という関係を越え、当事者が主役となる協力のあり方や社会モデルについて、参加者一人ひとりが考える機会となった。

内容・所感

本イベントでは、前半に JICA「TAMPOPO」プロジェクトに関わった実践者による報告を通して、国際協力における「当事者主体」の取り組みとその背景について学ぶ。プロジェクトの経験や現場の視点から、当事者が主体的に関わることの意味や可能性を共有した。



後半は、より身近な社会課題も題材に、登壇者と本学学生を交えたパネルディスカッションを行い、「当事者主体」の考え方を自分たちの社会や行動にどう生かせるのかを、参加者とともに考える対話の場とした。また、情報保障として、東京都手話通訳等派遣センターに依頼し、当日要約筆記、手話通訳を準備した。設営から実施に至るまでこれまでにない経験となった。「誰も取り残さない」を実践するイベントとして今後は視聴覚障害者向けの情報保障としてどんどん取り入れていきたい。

参加者の声

- ◎西村さんのお話に感動した。手話は言語であるという明確なメッセージと、それを体現しておられる姿に感銘を受けた。
- ◎坂本さん、廣瀬さん両名のクリアなお話にこんなすごい人がいるんだ、聴覚障害者への偏見が自身の中にもあったことを感じた。
- ◎「当事者」とは誰かということを改めて考える良いきっかけになった。“障害”の当事者というだけではなく、生活者という意味では全ての人が当事者たりうることを知った。



奥田知志さん、永井玲衣さんと考える能登の復興

進行・講師：奥田 知志（公益財団法人共生地域創造財団代表理事）
永井 玲衣（哲学者・作家）

2025年12月9日（火）15:15～16:45

白金キャンパス 2201 教室

参加者：学生 15 名、教職員 8 名、一般 18 名

目的

能登半島地震後の復興に向けた取り組みを学び、地域に寄り添う「伴走型支援」のあり方について理解を深めることを目的として開催した。能登で継続的に活動を行ってきた実践者や作家、哲学者の視点に触れることで、学生一人ひとりが復興支援やボランティア活動を自分ごととして捉え直し、今後の行動につなげる契機となることも本企画の狙いである。

内容・所感

本イベントでは、明治学院大学ボランティアセンターによる能登支援活動の紹介に加え、能登の復興支援に携わってきた奥田知志氏による基調講演をいただいた。講演では、被災地における支援現場において社会福祉領域で学ぶ事柄を超える事象がしばしば起こることをケーススタディからお話しいただいた。また、専門家だけではそうした現場が回らない現実を踏まえ、「伴走型支援」の理念や必要性についてもご説明いただいた。



後半では、哲学者・作家の永井玲衣氏をファシリテーターとして迎え、能登復興支援に関わる学生 2 名と会場とのオープンセッションを実施した。さまざまな意見が飛び交い、復興の意味や支援に向き合う姿勢について参加者全体で考える対話の場となった。永井氏が丁寧に言葉を拾い、学生たちや会場の参加者たちもぼつりぼつりと自分たちの言葉を探す様子がみられた。

参加者の声

被災地支援においてボランティアを受け入れる労力を考えた時に、自分たちが行くことの迷惑を考えてしまうことがある、という学生の声があり、それに呼応する形で行動障害のある参加者の親が周囲の目や迷惑を考えてしまうことがある、というお話があった。それに対して、進行の永井氏が「哲学対話の場では歩いても叫んでも構わない」という趣旨の発言をされたことで会場の空気が変わり、「円になって平場で話した方が良い」という参加者の声もあり、教室のレイアウトを変え、円になって哲学対話を行った。その展開がよかった、面白かったと言う声が多く聞かれた。その他にも以下のような声があった。



◎奥田さんの言う「伴走型支援」が社会学部の学びと重なりよかった。

◎能登半島支援ボランティアにこんなにも若者（学生）が行ってることに感動した。

◎復興支援ボランティアの映像がよかった。

9. 災害ボランティア助成金

(1) 総括

災害ボランティア助成金は、災害復興活動を行う学生・教職員を対象に、活動時に生じる交通費等の経済的負担を緩和するための助成金制度である。従来の「災害遠征助成金」制度をより使いやすく、また学生だけでなく教職員も活用できるようにリニューアルし 2024 年 5 月より本制度の運用を開始した。

申請要項は、以下の通りである。

助成対象者	本学学部生・院生、教職員（非常勤講師を含む）
助成対象となる活動	災害救助法の適用を受けている地域における、自治体、NPO 法人等の諸団体が募集する災害復興支援活動を対象とする。
助成金額・助成回数・助成金の対象費目	<p>(1) 助成金額は 1 回 30,000 円上限（実費）とする。</p> <p>(2) 助成回数に制限は設けない。</p> <p>(3) 助成金の対象費目は、交通費、宿泊費、社会福祉協議会の「ボランティア保険※天災に対応するプラン」加入料、および当該募集団体が定める参加費を助成金の対象費目とする。</p>
手続	<p>(1) 事前手続 「明治学院大学ボランティアセンター災害ボランティア助成金申請書（様式 1）」「保証人承諾書（様式 2）※学生のみ」、および参加する活動の募集要項等の活動内容がわかるものをボランティアセンター代表メールアドレスに提出する。</p> <p>(2) 活動中の手続 「ボランティア活動証明書」（様式 3）を受入先に依頼し取得する。</p> <p>(3) 事後手続 以下を速やかに提出する。 ア「ボランティア活動証明書」（様式 3） イ「明治学院大学ボランティアセンター災害ボランティア助成金報告書」（様式 4） ウ「振込依頼書」（様式 5） エ 領収書（原本） ※添付台紙に貼付</p>

(2) 実績

2025 年度は、本制度で採用された 93 件（昨年度 21 件）すべてが、2024 年に発生した能登半島地震および豪雨災害に関連する復興支援ボランティアであった。現地での活動を希望しながらも、経済的負担や活動に対する漠然とした不安を抱える学生にとって、助成金の支給や相談窓口の存在は、活動への大きな後押しとなっている。

本制度では、迅速な現地活動を支援する観点から、これまで「諸団体が募集する活動」を対象としてきた。しかし、発災からの時間の経過や被災地の状況変化に伴い、参加者自らがグループ単位で活動内容を企画・実践したいというニーズが高まりつつある。特に、物理的なインフラの復旧が進んだ一方で、地域コミュニティの再生や住民同士のつながりの回復、生活再建に向けた継続的な支援といった課題は、公募型の活動のみでは十分に対応しきれない状況が見られる。こうした領域においては、学生が主体的に関与する意義は大きい。これらの状況を踏まえ、2026 年度は、他制度の見直しも含めた支援体制の整備を予定している。

（職員 菊池 範子）

10. ボランティアフェア

(1) 総括

長期夏季休暇を前に、ボランティア活動に関心を寄せる学生を対象に横浜のボランティアセンターで多様なボランティア活動を紹介する機会を設けている。今年度は、ボランティア活動を実践している学生団体の活動紹介および横浜キャンパス近郊で活動されている市民団体代表から活動紹介をして頂いた。また、ラウンジでは特別展示として11団体の活動紹介をポスター形式で掲示し、また活動の様子を動画で流すことでイメージをつかみやすくする工夫を行った。

初めてボラセンに来たという学生からは「こんなに情報があるんだ!」との声も聞かれた。活動団体の説明会では、配架されたチラシに掲載しきれない団体設立のきっかけや明学生との関わりなどをお話し頂いたり、学生団体と市民団体との意見交換や交流が行われたことで、お互いの経験を学びあうことができ、相互理解が深まった点も今年度の特色として挙げられる。

フェア参加者数は延べ158名と昨年の97名、一昨年の102名より増加したが4日間と期間を延長した影響もある。

毎年恒例になっている七夕飾りも実施し、「自分の願い」とともに「どんな社会になってほしいか」というお題を設定した。短冊には、「Free Palestine」「誰にでも大切な友達がいる社会」「平和な社会」「偏見が減り多様性が認められる社会」「楽しさも苦しさもともに分かち合える社会」などの言葉が見られ、短時間ながら社会に思いを寄せるひとときが提供できたのではと推察する。

振り返りとして、時期的に学生がレポートや試験勉強で余裕がないという声があり、開催時期の前倒しも今後検討する。また夏休みに何かしたい学生は白金校舎にもいるとの意見もあった。オンライン接続などで関心のある層にリーチする工夫が必要である。広報については、立て看板の他、ボランティア学入門など関連すると思われる授業を持つ教員の方に広報協力を仰いだとともに、近年強化しているSNS発信も積極的に実施した結果、最終日のストーリーをアップ後に来場した学生もおり、一定の効果が認められた。一方で日本語を母語としない学生(留学生や国際キャリア学科の学生など)も参加できる工夫についても課題が残った。

(ボランティアコーディネーター 森田 恵)



(2) 開催概要

日時	2025年7月8日(火)-11日(金) (説明会7月8日-9日/特別展示7月8日-11日)
場所	横浜校舎4号館ボランティアセンター (学生ラウンジ、コラボレーションスペース)
参加団体	説明会参加6団体(外部団体4団体スタッフ5名/学生団体2団体スタッフ4名) 特設展示参加11団体(説明会参加6団体含む)
参加者数	学生ラウンジ130名、コラボ28名(延べ158名) *昨年度97名
担当	コーディネーター森田、プログラムディレクター菅沼

<説明会参加団体>

日付	団体名
7/8	畑やろうじゃないか(学生団体)
	NICE(ワークキャンプ)
	神奈川県車いすテニス協会(車いすテニス)
7/9	Umee Coffee(学生団体)
	おっち一塾(学習支援)
	舞岡・やとひと未来(里山保全)



<特設展示参加団体>

1	多文化まちづくり工房(多文化共生)
2	Connection of the Children(まちづくり他)
3	くまさん横浜(障害児支援)
4	good!(ワークキャンプ)
5	横浜 CRACKERS(電動車いすサッカー)
6	神奈川県車いすテニス協会(車いすテニス)
7	おっち一塾(学習支援)
8	舞岡・やとひと未来(里山保全)
9	NICE(ワークキャンプ)
10	畑やろうじゃないか(学生団体)
11	Umee Coffee(学生団体)



11. 国際機関実務体験プログラム

(1) 総括

国際機関実務体験プログラムは、横浜・みなとみらい地区の国際機関で45時間から100時間の実務体験を行う、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と本学を含めた6大学との協働事業である。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で修得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質をもって活躍することのできる人材育成を目的とする。

実務体験は、夏期と春期に行われ、派遣国際機関は6大学で割り振られている。2025年度は夏期に横浜市国際交流協会（YOKE）で1名、春期にアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）で1名、合計2名がプログラムを修了した。

今年の派遣学生たちは、自身の専門分野や知見を現場で実践することを特に意識していたように感じられる。時には自分の予想と異なる結果や無力さを感じた瞬間もあったようだが、それぞれに目標や課題意識を持ち、積極的に自身の知らない世界や人と出会い、学ぼうとする姿には刺激を受けた。このプログラムを通して学生自身が感じ、学び、出会ったものはいずれも貴重な財産であり、実生活や今後のキャリアの糧となってくれることを期待したい。

◇2025年度夏期プログラム実績

派遣人数	1名
派遣先	YOKE（横浜市国際交流協会）1名
活動内容	・学習支援教室、日本語教室の運営補助 ・通訳ボランティア研修の見学



◇2025年度春期プログラム実績

派遣人数	1名
派遣先	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）1名
活動内容	・SNS記事の執筆 ・ニュースレターの作成、テンプレートの改善 ・高校での講義補助

（職員 杉山 佳奈）

(2) 派遣学生生活動報告

1. 派遣学生	文学部英文学科2年 岩田 彩
2. 実務体験先機関	YOKE (横浜市国際交流協会)
3. 志望動機	実習内容の中に「やさしい日本語」があったため。また、言語を学ぶだけでなく、活かす場での実践経験を通し、今後の進路選択において視野を広げるため。
4. 実習テーマ・ 達成度	実習テーマ (興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど) 「多文化共生における言語の重要性」 実際にどういった支援がされているのか、どのようなサポートがあれば子供たちが安心して学び、自分の力を発揮できるのかを重視した。
	達成度 (実習を振り返って) 褒める・認める・否定しない、ということをポイントに学習支援教室が運営されていることがわかった。多文化共生において言語とは、外国につながる人たちだけが努力して習得するものではなく、我々日本人側もやさしい日本語を話せるようにするなどの寄り添う努力をするべきだと学んだ。
5. 実務体験内容	スケジュール、内容等 ・ なつやすみにほんごきょうしつ 日本語サポーター ・ 通訳ボランティア登録見学 ・ 学習支援教室あおぞら ・ 学習支援教室なないろ ・ 日本語教室見学 ・ T-Kids サテライト教室 ・ 通訳ボランティア研修見学 ・ 報告書整理 ・ 国際機関訪問
6. 学び・気づき	新たに学んだこと 言語の壁・心の壁・文化の壁・制度の壁があることを学んだ。 また、子供は在日期間が長ければ長いほど、日本語が堪能になっていることに対して、大人の日本語能力は在日期間とは比例せず、本人の学習環境や生活環境の違いが大きく影響を与えていることがわかった。さらに文化による食い違いは、日本人と外国につながる人たちだけでなく外国につながる人同士でも起こることを知った。
	実習前と実習後の変化 小さい子供と接することがあまり得意ではないので、ましてや外国につながる子供を相手にするということに実習前は不安を感じていたが、実習後は想像していたより楽しく、私も子供たちに学ぶことがあったので結果的に実習のほとんどが、子供たちの学習支援のサポートになった。
	実習によって得た知識やスキルなど 学習支援教室やほんごきょうしつで子供達への接し方を学んだ。 また、事業説明や報告書、研修会などから在日外国人の現状や困りごと、それに対する支援やYOKE、横浜市が行っている取り組みを知ることができた。

<p>7. 特に印象に残ったこと</p>	<p>このインターンを通して、印象に残ったことは「言語は人の安心や社会参加にとって重要である」ということを再確認した。また、実習を通して実際に「やさしい日本語」を使おうとしたが、想像していたより伝わらないことが多く、自分がやさしいと思っている日本語がやさしくないということに気がついた。</p> <p>さらに、小学生は言葉が完璧に通じなくても、遊びやおしゃべりをしているうちに心を開いてくれ、距離が縮まったのに対して、中学生は必要最低限の会話で終わってしまうことが多く、年齢が近い私たちより、離れた大人の方がやりやすいのではないかと感じた。</p>
<p>8. 課題・改善点</p>	<p>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点</p> <p>実習を通して、私自身の語学力が十分でないと感じる場面が多くあった。特に日本語でのコミュニケーションが難しい子供と接した際は、自身の力不足により意思疎通がうまくできないことと、十分なサポートをしてあげられないことに強く悔しさを感じた。また、教科書の文章を噛み砕いて説明してあげる際に、普段違和感なく書いてあるまま違和感なく理解してしまっている言葉を簡単な言葉で伝えようとする、考えていた以上にうまく説明することができなかった。</p> <p>このことから語学力の不足が支援の幅や質に影響することを実感したので、外国語の学習に力を入れると同時に、日本語でも説明力も鍛えていきたい。</p>
<p>9. 今後へ向けて</p>	<p>この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか</p> <p>普段体験しないものに触れる機会となった。自身の語学力や表現力などの実感した課題において、スキルアップすることで今後のキャリアに活かしていきたい。</p>
<p>10. プログラム風景</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>なつやすみにほんごきょうしつでの活動の様子。あいうえおなどの50音から位置関係の少し難しい内容の学習をした。子供たちが楽しく学習できるようにと座学とアクティビティを交互に織り交ぜながら行う授業が特徴的であった。アクティビティの時間には、コマやうちわ、けん玉作りといった文化的な体験をした。文化体験になると子供達にはより一層盛り上がりが見られ、楽しく学んでいる様子が印象に残っている。</p>

1. 派遣学生	経済学部経営学科3年 望月 うらん
2. 実務体験先機関	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (IUC)
3. 志望動機	<p>1.留学生の日本語バディとして活動する上で、日本語の教え方や教えるために大切なことを学ぶため</p> <p>2.同じ学生という立場から意義のある日本での学習環境作りに貢献したいと考えたため</p> <p>3.多文化理解力を養う環境に身を置くため</p> <p>4.国際交流を通して国境を越えた学生同士の友情関係を築くため</p> <p>5.言語学習に対する理解を深めるため</p>
4. 実習テーマ・達成度	<p>実習テーマ（興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど） 異文化コミュニケーションに興味・関心の中心として置いていた。国際経営論を学ぶ上で、グローバルな環境でのマネジメントにおいて異文化コミュニケーションの重要性を学んでいたため、実践的に国際的理解力を養いたいという姿勢を抱いていた。そのため、授業見学の際にはただ日本語教育に視点を置くのではなく、学生さん達とのディスカッションを通じて、どのような思考様式を持っているのか、コミュニケーション方法を取るのかという学生さんたちの姿勢にも視点を置き学びを深めた。</p> <p>達成度（実習を振り返って） 異文化コミュニケーションに対する理解を十分深めることができた。授業内では、北米の学生さん達とディスカッションを行うことが多かったため、文化によるコミュニケーション方法の違いを実感すると共に、異文化理解における大切な姿勢を学ぶことができた。具体的には、欧米との文化の違いにより、自分の意見をしっかり持ち、発することの大切さを学ぶことができた。日本の文化である、調和や合意形成といった姿勢は国際的にコミュニケーションを取る中では、より主体的な姿勢も持ち合わせることで円滑なコミュニケーションをとる上でも、信頼関係を構築する上でも重要だと実感した。また、異文化理解の最も大きな基盤は、相手を否定しない事だと改めて気づいた。留学生とのディスカッションを通じて、ディスカッションの意義というのは全体の合意形成では無く、様々な異なる意見を出し合うことで自分には無かった新たな知見を得たり、そこからより全体の成長や学びに繋がることを学んだ。</p>
5. 実務体験内容	<p>スケジュール、内容等 授業の見学、参加。 留学生達との交流。 国際機関への訪問。</p>
6. 学び・気づき	<p>新たに学んだこと 新たに学んだことは主に3つある。1つ目は、文化や言語を超えて信頼関係を構築するためには、自分の意見や考えをしっかりと持つことだと学んだ。異なる文化を持つ他者と関係を構築するには、まず自分がどんな人なのか、どんな考えを持っているのかを相手に表現することが大切だと気づいた。今まで自分は、周囲に合わせてたり、自分の意見を発言することに控えめな姿勢を持っていたが、欧米の学生さんたちと関わる中で、自分がどういう人なのか相手に発することで、関係性が構築していくことを改めて実感した。 2つ目は、常に学び続ける姿勢の大切さである。IUCさんの学生さん達は、非常に知</p>

	<p>的好奇心が旺盛で、自分の学びたいことや興味のある事を一心に学ぶ姿勢に、大変感銘を受けた。新たに言語を学ぶ上でも、その言語ツールで何を発言するかという自分の知識量の大切さ実感した。私自身も英語を話せるように勉強をしているが、ただ英語という会話手段だけにフォーカスするのではなく、その英語使って自分は相手に何を伝えたいのか、という知識や専門性の部分をより磨く努力をする必要性があることを学んだ。</p> <p>3つ目は、相手視点で物事を考え、行動することである。異文化コミュニケーションにおいても、日本語教育に携わる点においても、相手に主軸を置いて理解を深めることが必要だと学んだ。その為に、自ら歩み寄り積極的に対話を重ねることや、自分自身から相手に行動を移していく姿勢が必要だと実感した。</p> <p>実習前と実習後の変化</p> <p>自分の意見を持ち、発言する姿勢と力を養うことができた。今までの自分は、周囲を気にしすぎてしまい自分の意見を控える性格であった。しかし、IUC の留学生とディスカッションや日常会話を通して、相手と信頼関係を構築する為にも、自分自身が成長をする為にも、自分の意見を持ち、相手に発する事は非常に大切だと深く実感した。この経験から、自分はどうか考えるのか、何をしたいのかというビジョンをしっかりと持ち、その為の努力をする姿勢を改めて身につけることができた。</p> <p>実習によって得た知識やスキルなど</p> <p>日本語教育における知識を身につけることができた。生徒達が難しいと感じる事(漢字、敬語)に対する理解や、語学教育においてはディスカッションなどのアウトプットをする機会が必要だということを学ぶことが出来た。私自身も、留学生の日本語バディをする中で、ただ日本語の文法や単語を教えるだけではなく、その知識をどう会話で使うのかというアウトプットにも重点を置いた語学学習の環境を整えることが必要だということを学んだ。</p>
<p>7. 特に印象に残ったこと</p>	<p>1 番は、留学生達の知的好奇心の旺盛さと、それに対する学習の姿勢が印象に残った。常に、自分の興味がある事や新しい学びに積極的な姿勢が、人の視野を広げ、可能性を最大化させていると感じた。留学生達の、常に自分の分からないや何故を追求する姿勢に非常に刺激を受けた。自ら学ぼうとする姿勢を持つ人々は、本当に希望に満ちていて、多くの可能性を秘めていると肌で感じた。何事にも自分から問いを抱き、何故なのかを追求する姿勢こそが、学ぶということだと考えた。大学の講義を受けている中で、私も含めて多くの日本人の学生が、学習に対して受け身の姿勢であると感じていた。しかし、今回留学生達の学ぶ姿勢を目の当たりにして、自らが学ぼうという姿勢を持たない限り何の知識もスキルも見に付けられないと実感した。</p>
<p>8. 課題・改善点</p>	<p>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点</p> <p>留学生とのディスカッションを通して、やはりまだ自分の考えを持ち、それを発言する力が不足していると痛感した。自分自身の、控えめさや自分で考える力の足りなさは課題であり、今後改善すべき点だと改めて感じる事ができた。ディスカッション中に、望月さんはどう思いますかと質問された時に、自分の意見を上手く伝えることが出来ない場面が多々あった。原因としては、自分の知識量の少なさだけでなく、相手に自分の考えを分かりやすく伝える能力や、臆せずに人前で自分の意見を発する勇気を持つことが必要だと実感した。異文化コミュニケーションを取る上で、意思表示や自己発信を重要とする文化も多く存在するため、そのような姿勢を身につけることが重要だと感じた。</p>

9.
今後へ向けて

この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか

今後の国際経営学の研究に活かしたい。多国籍企業におけるマネジメントや企業経営戦略を専攻しているため、今回実際に異なる文化の人達とコミュニケーションを抱いた経験は、文化によるコミュニケーション方式の違いや、相互理解の重要性などを活かしてより学びを深めたいと考える。また、キャリアとしては、多国籍企業でグローバルに活躍できる人材になりたいと考えるため、今回培った国際的な理解力や文化背景による会話方式の違いに対する理解を活かして、グローバルに関係を構築できる人になりたい。

10.
プログラム風景



国際機関(ITTO.FAO への)訪問。

12. キャンパス別プロジェクト 白金キャンパス:TAKANAWA HOP WAY (高輪ホップコミュニティ活動)

(1) 総括

「TAKANAWA HOP WAY」は、一般社団法人高輪ゲートウェイエリアマネジメントが行う高輪ゲートウェイ駅周辺のコミュニティ活動である。ビールの原料となるホップを高輪地域の住民の方々、企業や学校などと協働しつつ育て、収穫したホップで高輪産クラフトビールやソーダをつくり、地域の絆やコミュニティの力を強め、高輪地域を盛り上げていく活動を行っている。

明治学院大学では、この活動を開始した2021年度より法学部のゼミ活動として、総合企画室社会連携課(現社会連携部社会連携課)とともに参加し、大学内でのホップ栽培を始めとし、ビールのラベルデザインやイベントでの商品販売の手伝い、地域の方々との交流など様々な活動に取り組んできた。3年目を迎えた2023年度はこのプロジェクトの管轄について本学学内で事業移管がなされ、ボランティアセンターが担当部署となり活動を行ってきた。そして5年目を迎えた2025年度は、全ての学部生・院生を対象に公募した結果、手を挙げた2年生2名、3年生9名、4年生2名の計13名の学生がプロジェクトメンバーとして活動に取り組んだ。

2025年度のプロジェクトの特徴として、過去4年間に行っていた学内でのホップの栽培育成やビールラベルのデザインなどに加えて、プロダクトデザインでご活躍されている一野篤氏をお迎えした「デザイン勉強会」や地域イベントでのブース出展、ホップを使った石けんづくりワークショップを実施するなど、ボランティアセンターで活動する意味をプロジェクトメンバーで考え、地域交流やまちづくりとボランティアを結び付けながら、複数の取り組みに挑戦した。

2026年度は、ホップ育成やコミュニティの一連の活動の流れに、より即して取り組むことができるよう、プロジェクト活動期間を「2025年12月～2026年11月」と変更した。新メンバーとして7名の学生が選出され活動が始まっている。2026年度もJR東日本をはじめ、地域の皆様や企業の皆様と連携し、高輪のまちに関わる人、このプロジェクトに関わる人の想いを大切に、明治学院大学もプロジェクトの一員として、まちの活性化の一助となるべく、プロジェクトメンバー一人ひとりが主体性を持って活動に取り組むことを期待したい。

(職員 熊澤 瑞)

(2) 活動の様子



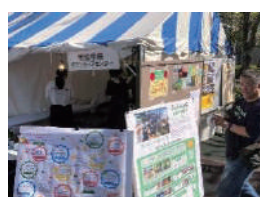
2024年度メンバー集合



ホップ収穫



学生がデザインしたビールラベル



地域イベントでの本学ブース



ホップを使った石けん作りワークショップ

横浜キャンパス：畑やろうじゃないか

(1) 総括

「畑やろうじゃないか」は、大規模農業による環境負荷や大学と地域の関係の希薄さに着目し、ボランティアセンターに隣接する横浜校舎 4 号館の緑地スペースを活用して農作物を育てる学生企画である。

これまで活動に参加していた学生メンバーの多くが、進級に伴い白金校舎通学となったことで、今年度は学生メンバーの確保と安定した活動の継続に注力した一年となった。学生がより気軽に畑へ足を運べるよう、収穫した野菜をその場で試食するキュウリ会やピーナッツ会を開催したが、広報が後手に回った影響もあり、参加者数はあまり伸びなかった。一方、例年実施している調理大会では、震災や豪雨被害など幾度の天災を乗り越え能登半島で収穫されたお米を学生メンバーが持ち寄り、畑で収穫されたサツマイモや落花生とともに調理したところ、昼休みの時間帯には多くの学生が試食に訪れた。能登半島災害復興支援に取り組む学生団体のメンバーも訪れ、新たな交流も生まれた。また、新入生のメンバーも含め、全員で定期的なミーティングの時間を設け、畑の管理や今後栽培する品種を決定し、野菜は特に天候不順等の影響もなく、順調に収穫することができた。今年度は学生メンバーの提案で和綿も栽培・収穫し、ミニチュアでサツマイモのマスコットを作るなど、活動の幅が広がりつつある。

今後も学生メンバーの確保は課題であり、当初の目的である小規模農業や自給自足の意義を発信しつつ、より多くの学生に活動情報が行き届くよう、他の学生団体との連携も検討したい。

(2) 活動報告

メンバー	5名
収穫した野菜	キュウリ、さつまいも、落花生、大根、芽キャベツ、ネギ、和綿
1年間の主な活動内容	定期ミーティング、野菜の管理・収穫（4～7月、9月～12月）、調理大会の実施（12月）



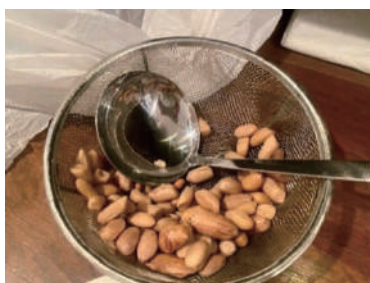
5月 種まき



7月 収穫①



11月 収穫②



12月 調理大会



12月 調理大会



通年 野菜の管理

(職員 杉山 佳奈)

Ⅲ. 新入生アンケート

Ⅲ. 新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題 「2025 年度新入生ボランティア活動アンケート」

1. アンケートの実施方法と回答者について

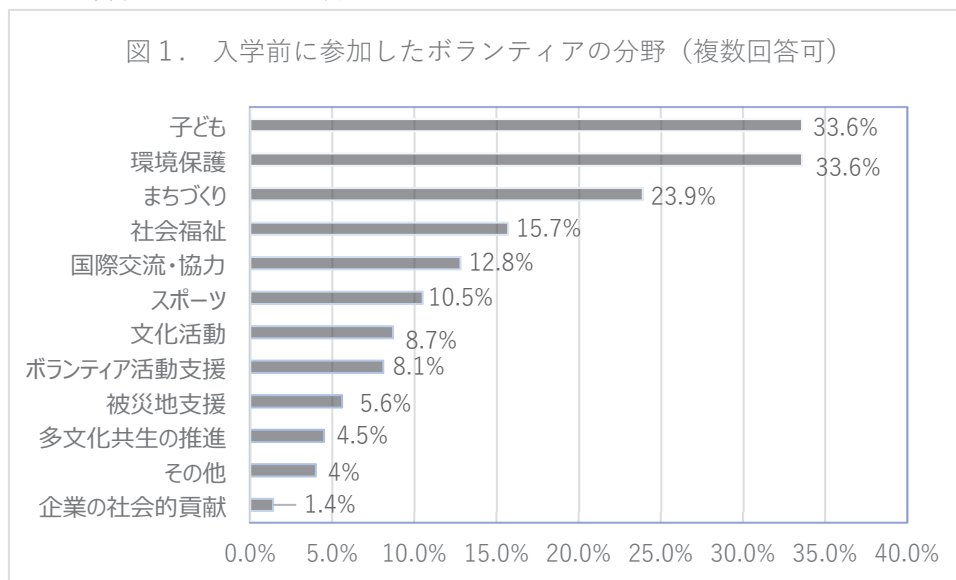
ボランティアセンターでは、2001 年度から毎年 4 月に新入生に向けて、ボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを実施している。開始当初から 2019 年度までは、学科ガイダンス時に対面でアンケートを実施してきた。しかし、新型コロナウイルスの蔓延により 2020 年度はアンケートを実施できなかった。そして 2021 年度以降は対面ではなく学内ポータルサイトである「ポートヘボン」のアンケート機能を利用して Web アンケートを実施している。そのため、対面で実施していた頃のアンケートでは全入学者のうち 90%ほどが回答し、2,500 人前後の回答を得てきたが、Web アンケートでは、最初の 2021 年度を除き、2022 年度以降は回答率が 30%台を推移している。単純に比較は難しいのだが、質問項目によっては単に時代の変化だけでなく、コロナ禍前と後での違いが出ているものもある。

2. 大学入学前のボランティア活動

2025 年度新入生の大学入学前のボランティア活動への参加については、参加経験のある人が 50.1% (447 人)、無い人が 49.2% (439 人) と拮抗している。この傾向は若干の差はあれども、例年とあまり変化がない。

入学前に参加したボランティアの分野 (図 1) であるが、環境保護活動、子どもに関するボランティアは相変わらず多くの学生が参加している (33.6%)。2014 年度の調査との比較では、国際交流・多文化共生の推進合計 (17.3%←7.4%*) の増加が目立つ。

*2014 年度ではこれらが一つの項目のため



3. ボランティア活動に対する関心

「ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか」という問いについて図2をみていただきたい。この問いに対しては「関心がない」と回答する人の割合は例年一桁にとどまっているのに対し、「大いに興味がある」と回答した人がコロナ禍前（～2019）と以後（2021～）と大きく増加していることは特徴的である。比率は調査手段（対面、web 回答）の違いも考慮する必要があり一概に言えないが、多くの人が何かを学びたいと思っている。また、サティフィケート・プログラムやボランティア大賞などのプログラムにおいても、学びと実践を結び付けることを意識した取り組みがなされ、単に正課（授業）とだけでなく、広く学ぶことと活動することと往復して考えることを意識している。

その上で、この設問に対するポジティブな回答が多いことは、ボラセンのプログラムとも親和性が高い思いを持つ人が潜在的に多いことにもつながり、ボラセンの活動をさらに発信していく必要にもつながると思われる。

図2 ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか？ 回答者数は(人)割合は(%)

	2018	2019	2021	2022	2023	2024	2025
	回答者数 割合	回答者数 割合	回答者数 割合	回答者数 割合	回答者数 割合	回答者数 割合	回答者数 割合
大いに興味がある	527 19.4	445 19.1	86 45	341 31.8	351 31.2	369 31.6	274 30.7
ある	1,320 48.7	1,198 51.5	91 47.6	534 49.9	542 48.2	585 49.3	442 49.5
どちらともいえない	645 23.8	548 23.6	8 4.2	140 13.1	149 13.2	138 11.8	122 13.7
あまりない	167 6.2	103 4.4	3 1.6	35 3.3	47 4.2	52 4.5	28 3.1
全くない	41 1.5	25 1.1	1 0.5	8 0.7	19 1.7	6 0.5	7 0.8
未回答	11 0.4	6 0.3	2 1	13 1.2	17 1.5	26 2.2	20 2.2
全体	2,711 100	2,325 100	191 100	1,071 100	1,125 100	1,160 100	893 100

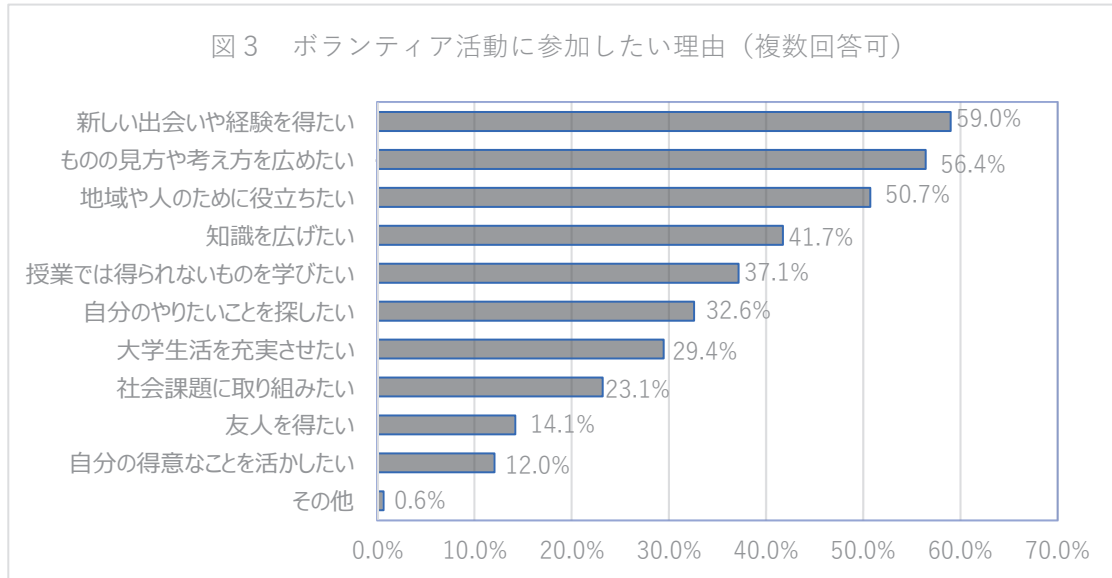
※2020 年度はアンケート未実施

「大学時代にボランティア活動に参加したいですか」という問いに対しては、「はい」が78.4%、「いいえ」が20.2%、未回答が1.5%であった。アンケートを始めた2008年ごろからしばらくは60%台から70%に届くか届かないぐらいの割合であったが、2014年以降75%を大きく上回っている。

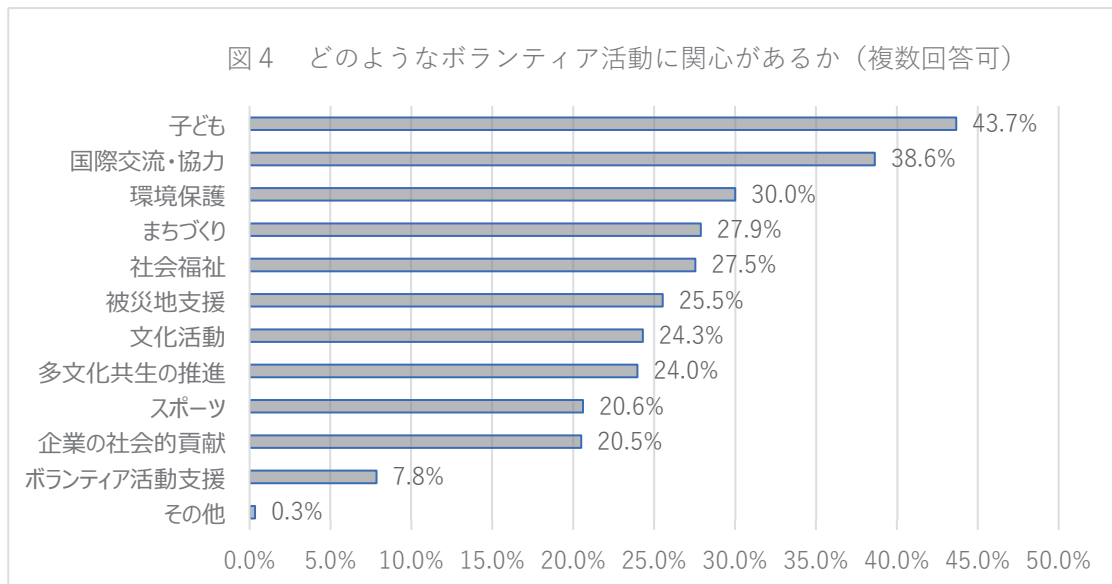
また、活動に参加したいと答えた700人に対してその理由について尋ねると(図3)、「新しい出会いや経験を得たい」が413人(59.0%)、「ものの見方や考え方を広めたい」395人(56.4%)と続き、「地域や人のために役立ちたい」が355人(50.7%)となっており、この傾向は例年通りであるが、誰かのため、というよりはボランティア活動を通じて、自分の成長を促す理由での参加希望となっている。

また、内容についての問いに対して、「一つの活動を続けていきたい」と回答した人が、105人

(11.8%) に対して、「色々な活動に挑戦していきたい」が 590 人 (66.1%) となっているが、参加理由で「ものの見方や考え方を広めたい」「新しい出会いや経験をしたい」という回答が高い回答率になっていることとも関係しているのではないと思われる。



さらに「どのようなボランティア活動に関心があるか」として尋ねたところ (図4)、子どもに関わるボランティア活動が 43.7%、国際交流・協力に関する活動が 38.6%と続いており、環境保護 (30.0%) となっていた。また、延べ回答数は 2,597 人となるが、元々回答数は 893 人のため、一人当たり平均約 3 分野を選択している。



また、「どのようなスタイルでボランティア活動に参加したいですか。」と聞いてみた (図5)。活動日については、「夏休み・冬休み等の長期休暇」と回答した人が 509 人 (57.0%) で最も多かった。頻度について (図6) は「月に1~2回くらい」が 232 人 (26.0%)、「2ヶ月に1回くらい」が 250 人 (28.0%)、「一定期間に集中して」が 165 人 (18.5%) となっている。

ボランティアセンターとしては、1 Day for Others を認知してもらい、多くの学生への参加を促す。また、活動日として長期休暇を挙げている学生が 509 人 (57.0%) に上ることから、その間でのプログラムについても展開していくことは検討すべきだが、同時に外部の団体によるボランティア募集なども、長期休暇向けに特集して広報するなど意識していく必要がある。

図5 ボランティア活動を希望する日(複数回答可)

	回答者数(人)	割合 (%)
平日	171	19.1
休日	292	32.7
夏休み・冬休み等の長期休暇	509	57.0

図6 ボランティア活動を希望する頻度

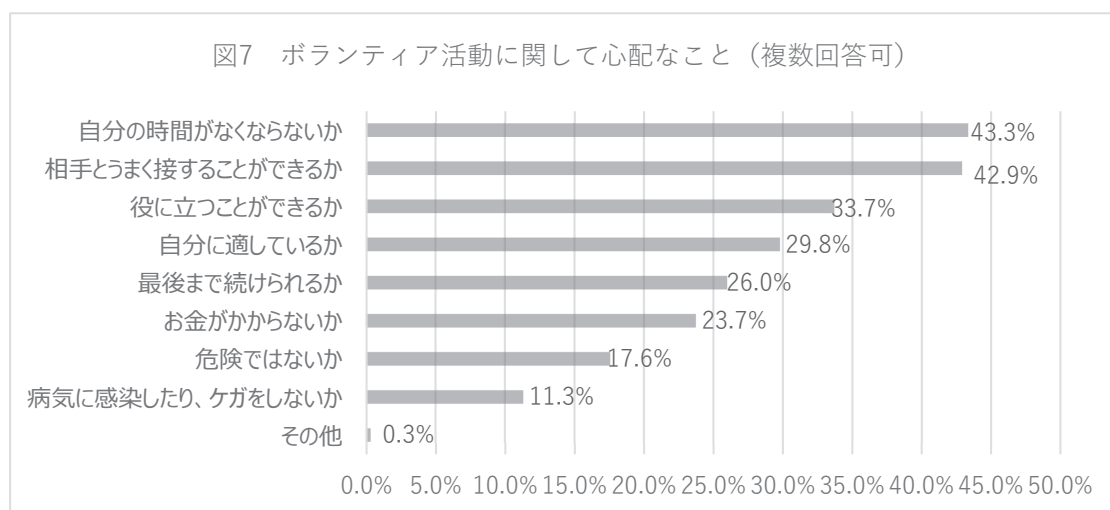
	回答者数 (人)	割合 (%)
週に1回くらい	45	5.0
月に1~2回くらい	232	26.0
2か月に1回くらい	250	28.0
一定期間に集中して	165	18.5
その他	8	0.9
未回答	193	21.6

4. ボランティア活動に関して心配なこと

次に、ボランティアをする上で心配なことについても聞いている。複数回答可としてその結果を回答した人数を母数してその項目ごとの割合を示した (図7)。

「自分の時間がなくなるか」(43.3%)、「相手とうまく接することができるか」(42.9%)と続くが、これらはまだ大学生としての生活そのものが時間的にどう配分できるか不明確であることにも通じていると思われる。ボランティアセンターの各プログラムへの参加により、こうした不安が払しょくされて積極的な活動参加につながるとよいと思う。

図7 ボランティア活動に関して心配なこと (複数回答可)



5. 明治学院大学のボランティア活動

最後に、明治学院大学のボランティアについて触れてみたい。「明治学院大学のボランティア活動について知っていましたか」と聞いたところ、8割近い人が「はい」と回答した（700人・78.5%）。また、そのうちどのように明治学院大学のボランティア活動を知りましたか（複数回答可）と聞いたところ（図8）、「大学のホームページ」と回答した人が一番多く52.3%（366人）、次が「オープンキャンパス」31.9%（223人）であった。大学のホームページへの情報発信を意識していく必要もあるが、併せてSNSの認知が低いため（5.4%）、オープンキャンパスなど高校生が目に触れる場でSNSの紹介など、今後の広報戦略において検討すべき課題でもある。

図8 どのように明治学院大学のボランティア活動を知りましたか（複数回答可）

	回答者数（人）	割合（%）
大学のホームページ	366	52.3
活動が紹介された新聞記事・テレビ記事	11	1.6
オープンキャンパス	223	31.9
先輩、家族、知人、友人に聞いた	44	6.3
学校の先生から聞いた	15	2.1
活動が紹介された Web 記事	27	3.9
SNS	38	5.4
その他	3	0.4

※明治学院大学のボランティア活動を知っていたと回答した700人を母数

年間80~100件程度のプログラムが組まれている、1日社会貢献プログラム「1 Day for Others」は、これまでにボランティアを経験したことがない新入生にとっては比較的参加のしやすい機会だ。一方で、「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、基本3年間かけて修了するプログラムであり、ボランティア実践と大学での学びを結びつけながら腰を据えて取り組みたい学生にとって魅力あるプログラムである。「1 Day for Othersに参加してみようと思いますか」、「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケート・プログラムに参加してみようと思いますか」とそれぞれ新入生に聞いた結果を図9にまとめた。

図9 明治学院大学のボランティアプログラムに参加したいか

	1 Day for Others		ボランティア・サティフィケート・プログラム	
	回答者数（人）	割合（%）	回答者数（人）	割合（%）
参加する	75	8.4	34	3.8
できれば参加したい	303	33.9	184	20.6
情報を確認してから参加を 考える	450	50.4	563	63.0
参加しない	48	5.4	94	10.5
未回答	17	1.9	18	2.0
全体	893	100	893	100

「1 Day for Others」については、各プログラムともかなり具体的な内容で募集をかけるため、「情報を確認してから参加を考える」という回答者にとっても、伝わり、事前に参加判断ができると思われる。一方で「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」でも、同じく「情報を確認してから参加を考える」回答が6割にも上っており、情報をわかりやすく発信し、参加するとどういふ成果が得られるのか、などプログラム自体の魅力を伝えていくことも重要であると思われる。

(プログラムディレクター 菅沼 彰宏)

IV. ボランティアセンター資料

IV. ボランティアセンター資料

1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

- ・ 明治学院大学保証人会
- ・ 明治学院大学学友会
- ・ 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」

上記皆様より、ご支援を頂戴いたしました。

【「2025年岩手県大船渡市の林野火災による災害救援金」募金】

期間：2025年4月7日～5月30日

募金額：35,553円

募金先：日本赤十字社「令和7年大船渡市赤崎町林野火災義援金」

2. 2025年度マスコミ報道一覧

日付	媒体名	内容
2月11日	北國新聞	明治学院大生21人復興ボラ活動報告 穴水町長を訪問 【災害ボランティア助成金受給団体の活動】(P8-9参照)
2月13日	北國新聞	「当目の米で合格」お礼参り 大学生、能登町で袋詰め手伝う (P8-9参照)
3月14日	高知新聞	「伊予線の情景 未来へ」 【ボランティアファンド学生チャレンジ2025年度助成団体の活動】(継続中)
3月16日	中日新聞	「予土線 情景を未来に」 【ボランティアファンド学生チャレンジ2025年度助成団体の活動】(継続中)
3月23日	四国新聞	「JR予土線の情景未来へ」 【ボランティアファンド学生チャレンジ2025年度助成団体の活動】(継続中)

3. 2025 年度委員等一覧

(1) ボランティアセンター運営委員

副学長	岡 伸一 (委員長)
文学部	齊藤 哲也
経済学部	土屋 拓也
社会学部	稲葉 振一郎
法学部	波多江 久美子
国際学部	榎本 珠良
心理学部	杉岡 千宏
情報数理学部	宮寺 隆之
教養教育センター	長谷部 美佳
宗教部長	尾畑 裕
教務部長	大野 武
学生部長	大木 満
事務局長	高辻 智長
センター長	猪瀬 浩平
センター長補佐	西原 博之
センター長補佐	宮崎 理
コーディネーター	砂川 秀樹
コーディネーター	森田 恵

(2) ボランティア活動推進委員

センター長	猪瀬 浩平
センター長補佐	西原 博之
センター長補佐	宮崎 理
コーディネーター	砂川 秀樹
コーディネーター	森田 恵

(3) ボランティアセンタースタッフ

センター長	猪瀬 浩平
センター長補佐	西原 博之
センター長補佐	宮崎 理
次長兼課長	高橋 千尋
コーディネーター	砂川 秀樹
コーディネーター	森田 恵
コーディネーター	田中 悠輝
プログラムディレクター	菅沼 彰宏
課員	菊池 範子
課員	熊澤 瑞
課員	杉山 佳奈
派遣スタッフ	河合 彩夏
派遣スタッフ	小林 理穂

4. ボランティアセンター 2025 年度基本方針

ボランティアとは、人びとが、大きな声やわかりやすい言葉だけでなく、小さい声やわかりにくい言葉を丁寧に受け止め、強い力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである。あらゆる職業、研究・学習、日常生活の中にボランティア・スピリッツは宿っている。平穏な日常のなかであれ、思いがけぬ出来事のなかであれ、他者への貢献を丁寧に考え、社会の困難に向けて一歩踏み出し、「公正」「平和」「共生」などの人類の普遍的な理想をさまざまな立場の人たちと一緒に実現していく市民を育てることが、本学の教育理念である。

この教育理念を具現化するために、ボランティアセンターは、学内外のあらゆる人びとが「他者への貢献」について考え、実践し、交流する場を提供する。それによって、一人ひとりが社会課題と出会い、向き合い、共に考え、挑戦する機会を保障し、誰もが生きやすい世界の実現を目指す。

以上の考えのもと、ボランティアセンターでは「すべての明治学院大学構成員のためのボラセン」となることを目指してプログラムを運営してきたが、いまだ多くの学生、教職員にとってボランティアセンターは身近な存在とはなっていない。ボランティア・スピリッツがあらゆる人間の営みに宿るのであれば、潜在的には多くの人がボランティアセンターにつながる可能性を秘めているはずである。

2025 年度は、ボランティア・スピリッツはあらゆる人間の営みに宿ること、そして誰もがそれぞれの学びや仕事、暮らしの現場から社会課題に向き合うことができるというメッセージをわかりやすく伝え、プログラムとして具現化することにより、ボランティアセンターの認知を一層高めることを目指す。

次の 4 点を 2025 年度の基本方針とする。

1. 本学学生、教職員全員のボランティア活動への参加促進と支援

ボランティア活動への参加を促進し、積極的に支援するための方策として、以下の 4 点を行う。

- ①「社会課題に出会う場」の提供。「1 Day for Others」や「ボランティア・カフェ」の実施。「1 Day for Others」については、一つひとつのプログラムの質のさらなる向上を図る。
- ②「社会課題に出会い・向き合う場」の提供。「いつでもボランティアチャレンジ(以下、いつボラという。）」、「ボランティアファンド学生チャレンジ(以下、ボラチャレという。）」、「明治学院大学災害ボランティア助成金」、外部資金調達等による活動を促進する。3 つの支援制度の利用を一層拡大するため、積極的に広報を行うとともに、学生の利用しやすい形になっているか随時見直す。「いつボラ」についても、留学生や教職員などに活用を拡大するため、適宜、情報発信とニーズ把握を行いながら、支援のあり方を検討する。
- ③学生による学生支援の展開を促進する。そのために、学生自らがボランティア活動を組織化できるようサポートをする。学生が、ボランティアセンターの活動に議論・企画・広報面で関与できる体制を構築する。

- ④教職員との協働を一層深めていくために、授業や研究への支援、ボランティア・市民活動についての情報提供を積極的に行う。ボランティアセンターの運営委員に限らず、ボランティア・市民活動にかかわる教職員と連携し、プログラムの運営や助言をする体制を築く。

2. ボランティア実践と大学の学びの融合の活性化

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム(以下、サティフィケートという)を「社会課題に向き合い、考え、自分が変わる・社会を変える場」と位置づける。より多くの学生が学びを深めるため、運営委員と連携しながら、実践・学びの双方の指導方法を改善し、広報の充実を図る。

また、サティフィケートの認証に必要な既存の要件に満たない場合でも、学びと実践の成果を認定する仕組みを検討することで、途中で諦めてしまう学生の努力を評価し、より多くの学生がボランティアによる学びに関心を持つことを目指す。

明治学院大学ボランティア大賞は、ボランティアを通じた学びの成果を学内外に広く発信する場とし、その活性化のため運営や広報のあり方について検討する。

「ボランティア学」等、ボランティア・市民活動にかかわる授業を担当する教員との連携を一層深める。

3. ボランティアセンターの交流・活動・研究の場としての機能の充実

スタッフの専門性を高め、ボランティア・スピリッツにつながる情報を収集蓄積させることで、以下の4つの機能の充実を図る。

①学生・教職員のボランティア活動支援機能

- ・ボランティアをしたい人と、ボランティアを必要とする現場を結び付け、双方にとって意味のある活動を生み出す。
- ・学生・教職員の活動や交流の場として、作業スペースやミーティングスペース・収納の整備・改善を行う。

②教員・職員との連携機能

- ・授業支援や教員の研究支援を通してボランティアセンターの活用を促進する。
- ・教員の研究・教育成果をボランティアセンターのプログラム開発や運営に活かす。
- ・事務部署の専門性を活かした連携を深め、ボランティア活動を活性化する。

③学内外の情報発信・交流機能

- ・学内のボランティア活動情報や、学外で団体登録を経た団体・機関からのボランティア情報を提供する。
- ・ボランティアセンター内外のスペースを活用し、明治学院内外の関係者が協働する活動を提供する。

④本学のボランティアを深化させるための研究・研修機能

- ・レインボーフェスをはじめ、「公正」「平和」「共生」などの人類の普遍的な理想に向かうための広範な市民知を共有・発信する場を運営する。
- ・スタッフの専門性を高めるとともに、ボランティアセンターの中長期的課題を検討するため、スタッフ研修を定期的に行う。
- ・他大学のボランティアセンターなど外部の団体と連携を図り、ボランティアセンターの活動の成果と課題を検証する場を持つ。

4. ボランティアセンターにおける活動の広報・情報保障の強化

社会への説明責任を果たし、活動を活性化するため、学内他部署と連携して広報と情報保

障体制を整備する。

ホームページ、SNS、映像、リーフレット、報告書、オープンキャンパスなどを利用し、広報を積極的に行う。学内の教職員に対する広報強化のため、運営委員が所属部署での発信がしやすいようサポートする。

ボランティア支援やプログラム参加、イベントや会議について、多様な学生、教職員に十分な情報保障ができるよう、引き続きアクセシビリティを十分に整備する。

以上の活動を創造的に実行するため、ボランティアセンターのスタッフが立場を超えて活発に議論する場を保障するとともに、働きやすく、働き甲斐のある職場環境をつくりだす。

5. 明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日	大学評議会承認
2004年 5月19日	大学評議会承認
2004年10月20日	大学評議会承認
2005年10月 7日	常務理事会承認
2005年12月 9日	常務理事会承認
2006年 1月13日	常務理事会承認
2006年 7月14日	常務理事会承認
2010年 3月12日	常務理事会承認
2014年 3月14日	常務理事会承認
2018年 5月11日	常務理事会承認

(設置)

第1条 明治学院大学(以下、「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、共通教育機関として、「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、以下の業務を行う。

- (1) サービス・ラーニングプログラムの企画、実施
- (2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど、学生の自主的活動の支援と助言
- (3) 地域や国際社会への貢献を目指し、社会との協働によるボランティアプログラムの開発
- (4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
- (5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
- (6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
- (7) その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

(活動)

第4条 センターは、第2条の目的を達成するため、以下の学生の活動を支援する。

- (1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
- (2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
- (3) 地震、津波、台風、洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
- (4) 海外でのボランティア等に関する活動
- (5) 学外の人道支援機関、特定非営利活動法人(NPO)、企業等との連携活動
- (6) ボランティア参加への啓発活動
- (7) その他

(運営委員会規程)

第5条 センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため、明治学院大学ボランティアセンター運営委員会を置く。

2 センター運営委員会規程は、これを別に定める。

(構成)

第6条 センターには次の職員を置くことができる。

- (1) センター長 1名
- (2) センター長補佐 若干名

- (3) ボランティアコーディネーター 若干名
 - (4) 非常勤ボランティアコーディネーター 若干名
 - (5) 事務職員 若干名
- (センター長)

第7条 センター長は本学専任教員の中から、学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

- 2 センター長は、センターの業務を統括する。
- (センター長補佐)

第8条 センター長補佐は、本学専任教員の中から、センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

- 2 センター長補佐は、センター長の業務を補佐する。
- (ボランティアコーディネーター)

第9条 ボランティアコーディネーターの任用等は、「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

- 2 非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は、「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。
- (評価・評価委員会)

第10条 ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

- 2 非常勤ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

- 3 前2項に基づき設置する評価委員会は、副学長、学生部長、センター長、センター長補佐、大学事務局長、その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

(活動推進委員会)

第11条 センターに、その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

- 2 推進委員会は、センター長の諮問に応じて助言または提案を行い、推進委員によって構成される。
- 3 前項の推進委員は、ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生等、およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり、その任期は2年とし、再任を妨げない。専任教職員にあっては、所属長の推薦により、その他の者にあっては運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。
- 4 センター長は、必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

(学生メンバー)

第12条 センターの業務の遂行にあたって、センター長は、学生の参加と協力を求めることができる。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付 則

- 1 この規程は、2001年7月18日から施行する。
- 2 この規程の施行により、「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。
- 3 2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項、教養教育センター設置による。）
- 4 2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）
- 5 2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティア・コーディネーター、事務職員数の変更による。）

- 6 2005年11月1日一部改正施行(第7条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。第8条評価・評価委員会, 新設)
- 7 2006年1月1日一部改正施行(コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。)
- 8 2006年1月1日一部改正施行(第7条2項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。)
- 9 2006年4月1日一部改正施行(第3条事務局職制変更による)
- 10 2010年4月1日一部改正施行(基本理念作成委員会の答申に基づき, 第2条目的および第3条業務を見直し, 第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除, 第5条センター長補佐の人数を変更, 第7条センター長補佐は専任教員の中から選する, 第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記, 3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加, 第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加)。
- 11 この規程は, 2014年4月1日から施行する。(第3条3項, 第4条学生の活動内容の追加, 第5条3項の削除, 第11条2項, 第11条3項推進委員の学外有識者・実務家を2名から若干名へ変更, 第12条見出し変更)
- 12 この規程は, 2018年5月11日から施行する。(第6条ボランティアコーディネーターの人数変更, 第10条評価を受ける周期の変更)

明治学院大学ボランティアセンター報告書 第22号 2025

発行 2026年6月

発行者 明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

明治学院大学白金キャンパス10号館2F

TEL 03-5421-5131 FAX 03-5421-5144

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518

明治学院大学横浜キャンパス4号館1F

TEL 045-863-2056 FAX 045-863-2182

E-mail voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp

<https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/>

印刷 山口北州印刷株式会社

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、
ネットワークにより転送することを禁じます。

